



日本質的心理学会 第13回大会

テーマ

語り継ぐ

会場：名古屋市立大学

会期：平成28年9月24日(土)・25日(日)

<http://www.jaqp.jp/>



開催のご挨拶

日本質的心理学会第13回大会を名古屋市立大学で開催することができ、非常に喜ばしく感じております。近年の質的研究の高まりを受けて、本学会の認知度や重要性も年次事に高くなっているように感じます。

質的研究の重要な一つの要素として「ナラティブ」があります。この「ナラティブ」を広く世に知らしめた立役者として、本学の野村直樹先生がいらっしゃいます。野村先生は、2016年3月をもちまして退職なされましたが、その後も常に最先端の研究をなさっており、本大会においても、野村先生に基調講演をお願いし、新しい知見についてお話戴くことになりました。次の世代へ知見を伝えていくという意味を含めまして、本大会のテーマを「語り継ぐ」としました。

名古屋市は、日本の真ん中に位置するため、東西南北どちらからでも参加しやすいのではないかと思います。名古屋市は1610年に徳川家康が清洲から町ごとこの地に移した「清洲越し」を境に町としての歴史がはじまり、同年に立てられた名古屋城は、現在、復元工事中ですが、その一部が公開されております。また、最近では、ひつまぶし、みそかつ、手羽先、ういろうなど、特徴ある郷土料理「なごやめし」が注目を浴びており、学会に来た際にぜひお楽しみ頂ければと思います。

名古屋市立大学は、医学、薬学、看護、経済、芸術工学、人文社会学部の6学部で構成され、日本の公立大学中で医・薬・看があるのは本学のみであり、総合公立大学として研究・教育を行っております。また、大会会場は、複数ある本学のキャンパスでも、駅から徒歩30秒の川澄キャンパスを使用いたします。

本大会でも、人文社会学部と看護学部の教員を中心に準備委員会を設立し、名古屋独自の特色を盛り込んだ企画を考え、学会を盛り上げていきたいと思っております。

日本質的心理学会第13回大会
実行委員長

上田敏丈

目次

1. 大会参加者へのご案内	1
2. 交通アクセス	4
3. 会場案内	5
4. 大会スケジュール	8
5. 大会企画概要	10

抄録集

1) 委員会企画	20
2) 会員シンポジウム	26
3) ポスター発表	
1 グループ	50
2 グループ	61

1. 大会参加者へのご案内

1) 大会概要

大会テーマ 語り継ぐ

第13回大会 HP : <http://www.hum.nagoya-cu.ac.jp/~jaqp2016/index.html>

日本質的心理学会大会 HP : <http://www.jaqp.jp>

第13回大会メールアドレス : jaqp2016@gmail.com

大会日程 2016年9月24日(土) 25日(日)

場所 名古屋市立大学 桜山キャンパス 看護学部棟

2) 大会参加について

受付場所 : 看護学部棟 1F

① 大会参加事前申込みの方

受付にて参加証と領収書が交付されます。ネームホルダーに入れて、各会場へお越し下さい。

② 大会当日参加申込みの方

当日参加の方は、受付にてご記名後、参加費をお支払いください。参加費は下記の通りです。

大会参加費	一般会員・非会員	6000円	学生会員	4000円
懇親会費	一般会員・非会員	5000円	学生会員	3500円

*学生会員の方は学生証をご提示下さい。聴講生、研究生は学生に含まれます。

*大会初日の開始時刻前後は、受付が混雑することが予想されます。時間にはゆとりをもってお越し下さいますようお願い申し上げます。

*大会期間中のお知らせや変更は、受付の掲示板にてお知らせします。

*期間中、質的心理学会デスクが設置されます。入会等各種問い合わせはこちらにお願いします。

3) クローク

大会期間中、1階にクロークを設け、みなさまの荷物をお預かりいたします。ご利用の際には必ず係員より番号札をお受け取りください。なお、貴重品についてはお預かりできませんので、個人で管理いただきますようお願い致します。

4) 懇親会について

大会1日目の18時30分より生協食堂にて、多くの方々との交流の場となるように懇親会を開催します。なごやめしを各種取りそろえて、みなさまのご参加をお待ちしております。

日本質的心理学会第13回大会
懇親会
食べてみゃー!!
語り継がれる なごやめし

日時 2016年9月24日(土) 18:30~20:30

場所 名古屋市立大学生協 1階

会費

事前	一般会員	4,500円
	非会員	4,500円
	学生会員	3,500円
当日	一般会員	5,000円
	非会員	5,000円
	学生会員	3,500円

おいらたちも参加するよ!

名古屋市公式マスコットキャラクター「ほちん」

「かなえっち」 「だんも」

「エビザバス」

5) 昼食について

大会期間中、昼食のご用意はありません。近隣に各種飲食店がございますので(別紙参照)、そちらをご利用下さい。

ただし、質的心理学会会員のみなさまは、大会2日目の総会会場にて、お弁当を配布致します。こちらにご参加くださいますようお願い申し上げます。

6) 飲食・喫煙に関するご注意

各種飲食については、看護棟地下の休憩室をご利用下さい。なお、ゴミについてはなるべくお持ち帰り頂きますようお願いいたします。本学は敷地内禁煙を実施しております。また本学周辺道路での禁煙にもご協力ください。

7) 会員控え室

本大会では、看護棟3階303演習室にホットコーヒーなどの飲み物を提供しております。ご自由にご利用下さい。また、書籍の展示・販売会も3階にて行っております。ぜひお立ち寄り下さい。

8) 各種問い合わせ先

第13回大会メールアドレス：jaqp2016@gmail.com

各費用の振込先 ゆうちょ銀行 記号 12080 番号 5283261

日本質的心理学会第13回大会

(銀行振込の場合：ゆうちょ銀行 二〇八 普通 0528326)

2. 交通アクセス

〈大学までのアクセス〉



地下鉄でのアクセス

名古屋駅から → 地下鉄桜通線 桜山駅 下車 3番出口 (15分程度)

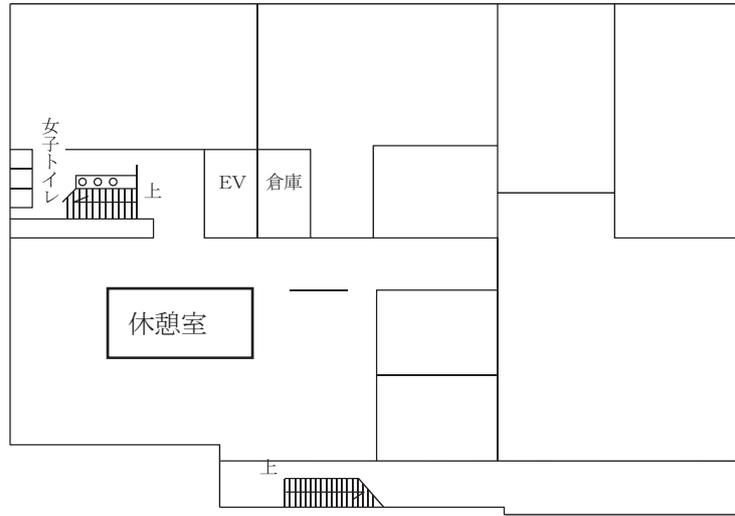
市バスでのアクセス

金山駅 金山7番のりば 金山12 「市立大学病院」下車 (15分程度)

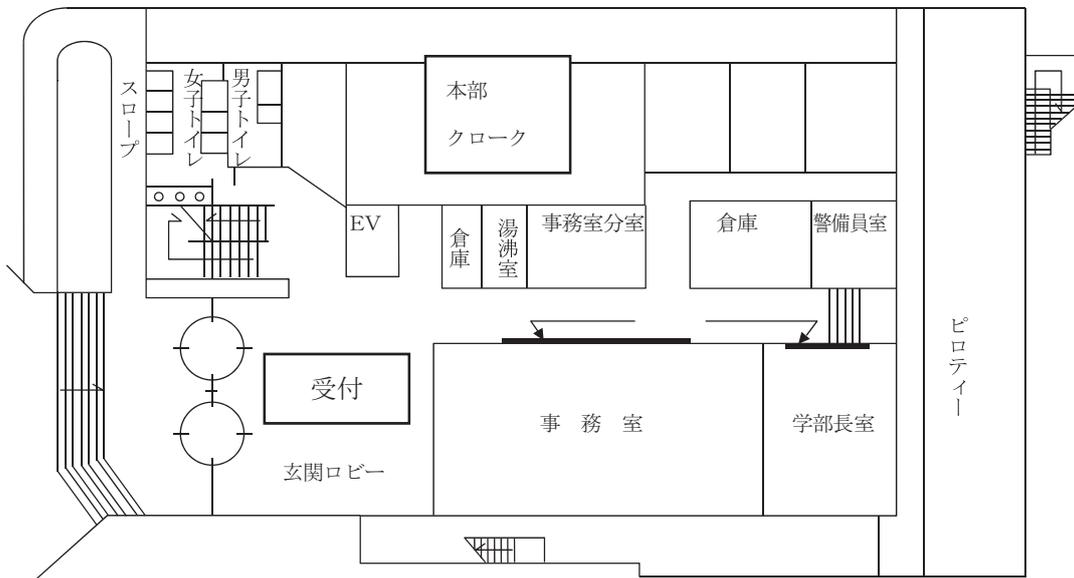
金山駅 金山8番のりば 金山14 「市立大学病院」下車 (15分程度)

3. 会場案内

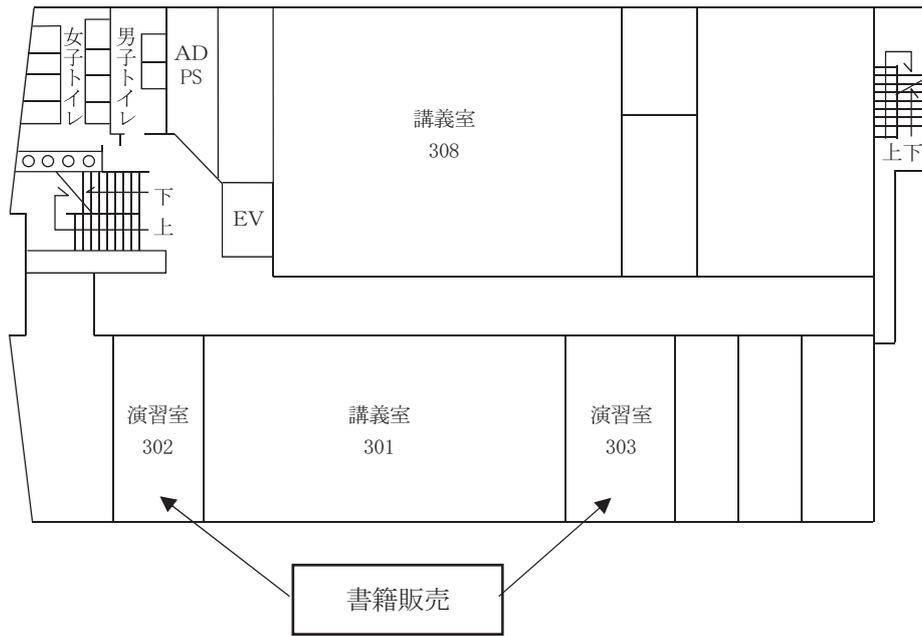
地階



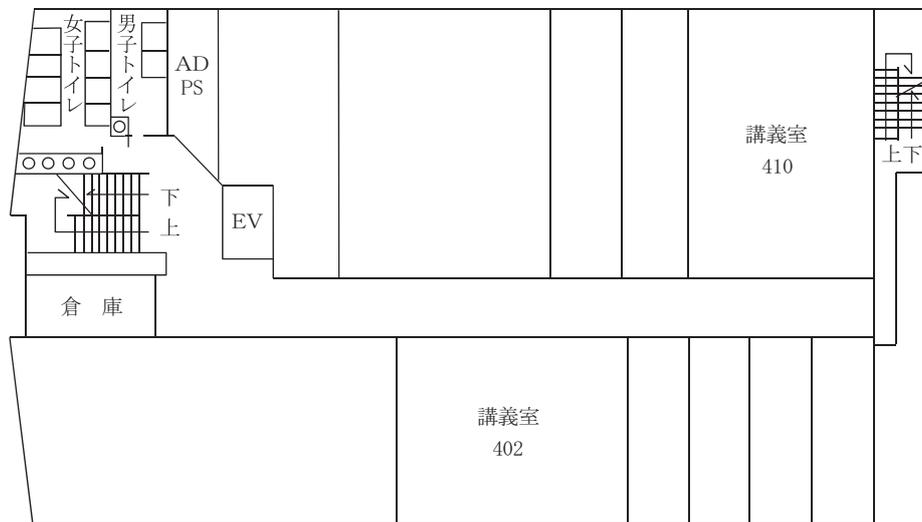
1階



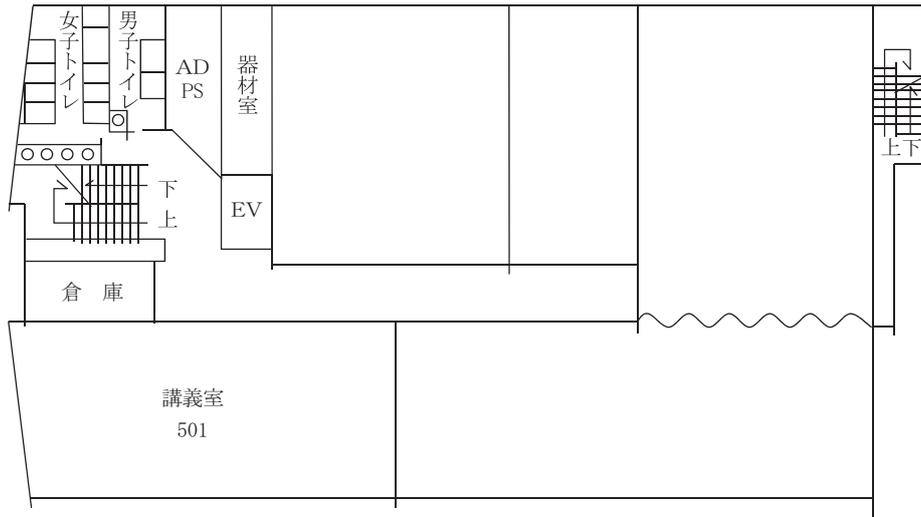
3階



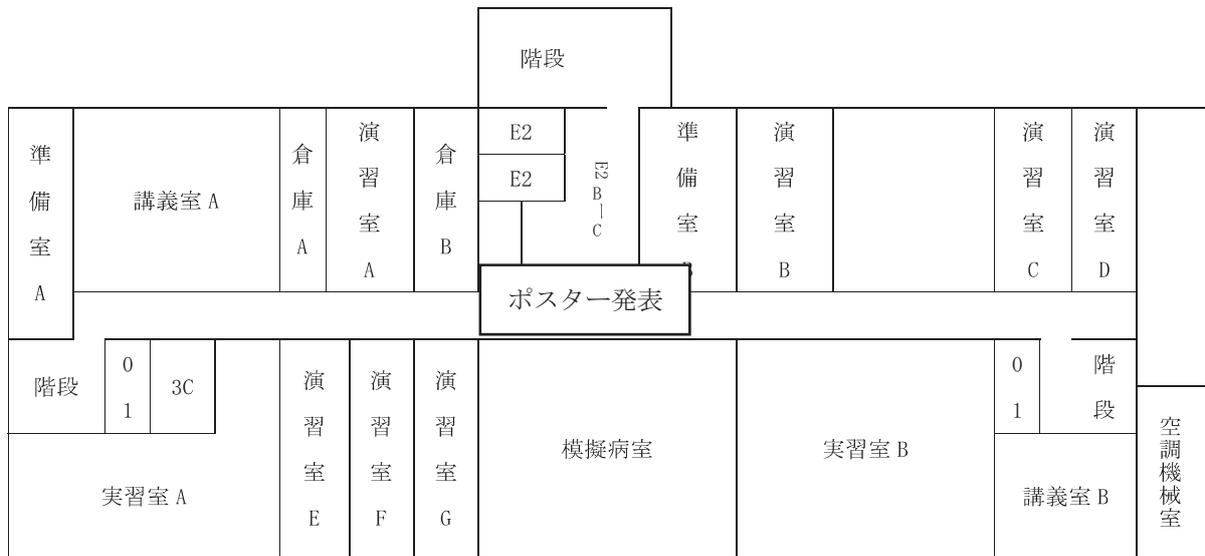
4階



5階



西棟



4. 大会スケジュール

2016.09.10版	看護学部棟地 学生ホール	看護学部棟1 F 第1会議室	看護学部棟3 F 308 (180名)	看護学部棟4 F 402 (60名)	看護学部棟5 501 (60名)	西棟 講義室A (80名)	西棟 講義室B (80名)	さくら講堂
9:00	玄関	外米講師教室	303 (25名)	410 (50名)	廊下	演習室A	演習室B	さくら講堂
9:30								
10:00					中央教育におい て異文化間能力 をいかに着むの か 時任幸平			
10:30					時人サービスマ ン職における 「ジェネラリス ト」と「スペ シャリスト」を 果たす 河原智江			
11:00								
11:30								
12:00								
12:30								
13:00	休憩室 打ち合わせ 昼食							
13:30		大会本部 クローク						
14:00								
14:30								
15:00								
15:30								
16:00								
16:30								
17:00								
17:30								
18:00								
18:30								
19:00								
19:30								
20:00								
20:30								

懇親会 (桜山キャンパス 生協)

大会日程 25日(日)

時間	看護学部棟1F		看護学部棟3F		看護学部棟4F		看護学部棟5		西棟		さくら講堂	
	学生ホール	第1会議室	外来講師控室	308(180名)	301(80名)	302(18名)	410(50名)	402(60名)	講義室A(80名)	演習室A		実習室B(80名)
9:00												
9:30												
10:00												
10:30												
11:00												
11:30												
12:00												
12:30	休憩室 打ち合わせ 昼食											
13:00		受付										
13:30		大会本部 クローク										
14:00												
14:30												
15:00												
15:30												
16:00												
16:30												
17:00												
17:30												
18:00												
18:30												

5. 大会企画概要

(1) 大会記念講演

9月25日(日) 9:30～ 11:50 さくら講堂



ナラティブから時間を考える —E系列の時間とは—

野村直樹

名古屋市立大学大学院 名誉教授

〈講演概要〉

みなさんは時間について日々どんなことを感じていますか。たとえば、時間は一つだけでしょうか。時計の時間が唯一の時間なののでしょうか。時の流れというのも不思議なものです。ほんとに何かが流れているのでしょうか。時間は、「考えると頭がこんがらがってくるので、考えるのは止めよう」。これも時間についての感じ方の一つでしょう。でも、人生が時間と切り離せないものとする、そうとばかり言っていられませんか。

時間について考えるのが難しいのは、時間を語る言葉が曖昧であるとともに、語彙が足りていないことが一原因だとぼくは思っています。過去－現在－未来は、時間の重要な側面であるにもかかわらず、時計の針のどこを探しても、過去も現在も未来も見当たりません。時計は時間を計るとされていますが、過去－現在－未来はこれとは別の時間なのです。ちょっと難しく感じますか。大丈夫です。当日みなさんにも分かりやすいようにお話をしたいと思えます。

*本大会記念講演は、一般公開を致しております。

(2) 大会実行委員企画 ビギナー・セミナー 9月25日(日) 13:30～15:00

質的データ収集のコツ

企画司会：北川真理子（名古屋市立大学大学院看護学研究科教授）

話題提供：藏本直子（人間環境大学看護学部講師）

星 貴江（人間環境大学看護学部助教）

企画主旨

近年、大学院修士課程で取り組む研究には、質的研究を手がける院生が増えてきている。このシンポジウムでは、質的研究に挑戦する院生を主な対象として、研究の重要な鍵を握るデータについて、いかに精度のよいデータを収集することができるのか、データとその分析の実際を通して見逃せられない着眼点を紹介します。

質的研究の中でも主に、現象学的接近や、エスノグラフィーで扱う面接・参加観察のデータ収集法に焦点をあてます。

(3) ワークショップ 9月24日(土) 10:00～12:00

① TEA ワークショップ

—分岐点分析の意義と「クローバー分析」の考え方—

サトウタツヤ（立命館大学）

市川章子（一橋大学大学院）

TEA（複線径路等至性アプローチ）は文化心理学の理論に基づく質的研究の方法であり、（構造ではなく）過程（プロセス）を分析する新しい方法論である。この企画では、TEA（複線径路等至性アプローチ）に関する説明と実習を行うが、主として分岐点をどのように描くのかに焦点をあてる。

分岐点において、人は社会的方向づけ（SD）や社会的助勢（SG）という双方向の力を受けることになり、様々な想像を巡らし、自己対話を行い、進むべき径（みち）を選択していく。

つまり、TEA（複線径路等至性アプローチ）において分岐点とは単なる選択の時点ではない。選択肢が発生することは時間が発生することであり、それは結果的に、人生における時期区分となりうる時点である。

今回は、基本的な概念について説明した後、企画者が用意した分析用のデータを用いて、分岐点分析を行う予定である。TEA（複線径路等至性アプローチ）に関心をもつ方の参加を期待したい。

9月24日（土）13：30～15：30

② 死を語り、生を描く ―死生のエピソードを記述する―

近藤 恵（天理医療大学）

人が生きる場に臨み、それをみてとろうとする私たちにとって、記述は重要な意味を持ちます。なぜ、エピソードや事例を記述するのでしょうか。私たちは、人々の生きる場に臨み、死に逝く人々と出会い、その中で何を描きだそうとするのでしょうか。

本ワークショップでは、「記述」という質的研究を行う者にとっては当たり前の作業について、喪失の模擬体験を行いながら問い直してみたいと思います。喪失の模擬体験では、二人一組になっていただき、互いの体験についてのインタビューをした上で、エピソードを記述していただきます。記述の方法については当日ご説明します。互いにインタビュアーとインタビューイを経験し、記述を共有する中で、聞き手と受け手との間で生成される物語がいかにかに記述されるのか、さらには読み手との了解可能性について考えたいと思います。

9月24日（土）13：30～16：30

③ 質的データ分析手法 SCAT 入門

大谷 尚（名古屋大学）

安藤りか（名古屋学院大学）

SCAT (Steps for Coding and Theorization) は、明示的な手続きで着手しやすい質的データ分析手法で、2008年に発表して以来、4本の国際学術誌英文論文、10本の博士論文、23本の修士論文を含むあらゆる領域の300件以上の研究に用いられ、SCATを使うことを前提とした科研もいくつも出ています。また近年では、タイなどの外国の研究者もSCATを使った研究をさかんに発表しています。

このワークショップは、通常は2日間を要するSCATのワークショップを、なんと3時間に圧縮して行うマイクロミニワークショップです。はじめにSCATの分析の要点を簡単に示したあと、グループごとに実際の質的データを分析して、4段階のコーディング→ストーリーラインの記述→理論記述を行って頂き、最後に相互評価を行います。

ごく短い時間ですが、SCATの本質的な点を理解して頂けるよう濃密なワークショップにしたいと考えています。

④ 現場(フィールド)をより豊かに記述・表現するために

—ビジュアル・エスノグラフィーの実践から—

岩館 豊(一橋大学大学院)

非正規で働く若者たちの労働組合を事例として、ビデオカメラを用いたフィールドワークに取り組んできました。本ワークショップでは、(1)フィールドデータをもとに編集・制作中の映像作品を上映・視聴し、(2)調査の実際・過程を紹介しながらビジュアル・エスノグラフィーの特徴と可能性について議論したいと思います。

現場(フィールド)でカメラをまわしながら僕が感じたことの一つは、事務所で団体交渉用の書類を作成する手、メーデー用につくられたTシャツ、都市の路上を踊り跳ねる身体は、言葉による語り(テキストデータ)と同等に、彼・かの女たちの「怒り」や「もどかしさ」のあり様を語っているのではないかということでした。自らの生とその「尊厳」をかけた若者たちの労働組合実践について、ビジュアル・エスノグラフィーは何をどう「語り継ぐ」ことができる／ないのか。この問いを一つの支点としながら、現場(フィールド)をより豊かにもっと分厚く記述・表現していく道筋を探っていく場にできればと考えています。

(4) 委員会企画 9月25日(日) 13:30～15:30

① 質的心理学フォーラム編集委員会企画
質的研究領域としての〈あいだ〉

企画・司会 大倉得史 (京都大学大学院人間・環境学研究科)
鷹田佳典 (早稲田大学人間科学学術院)
話題提供者 山本知香 (京都音楽院)
今尾真弓 (名古屋学芸大学)
田中大介 (桜の聖母短期大学キャリア教養学科)
指定討論者 坂井志織 (首都大学東京)

9月25日(日) 13:30～15:30

② 編集委員会企画

最先端の社会現象から考える新しいコミュニティの姿とは? :

アフリカ難民、プロボノからみる
「ゆるやかなネットワークと越境する対話」

企画：青山征彦 (成城大学) 香川秀太 (青山学院大学)
司会：青山征彦 (成城大学)
話題提供：藤澤理恵 (株式会社リクルートマネジメント
ソリューションズ組織行動研究所)
香川秀太 (青山学院大学)
橋本栄莉 (日本学術振興会 (PD))
指定討論：岸磨貴子 (明治大学)
松本雄一 (関西学院大学)

9月25日(日) 16:00～18:00

③ 研究交流委員会企画

—教職大学院の学びを研究する—

企画・司会：一柳智紀（新潟大学）
話題提供者：益川弘如（静岡大学）
話題提供者：東海林麗香（山梨大学大学院）
話題提供者：倉本哲男（愛知教育大学）

(5) 会員シンポジウム 9月24日(土) 10:00～12:00

① 災害復興過程をめぐる人文学的アプローチの再検討

—地震学者との対話を通じて—

【話題提供者】

高原耕平・大阪大学大学院文学研究科
河合直樹・京都大学大学院工学研究科
宮前良平・大阪大学大学院人間科学研究科
高森順子・(公財) ひょうご震災記念21世紀研究機構

【企画者・進行】

高森順子・(公財) ひょうご震災記念21世紀研究機構（再掲）
コメンテーター：武村雅之（名古屋大学）

② 対人サービス専門職における「ジェネラリスト」と「スペシャリスト」を再考する

企画 河原智江・西村ユミ
司会 西村ユミ（首都大学東京大学院人間科学研究科）
話題提供者 久保恭子（東京医療大学東が丘・立川看護学部）
話題提供者 河原智江（共立女子大学看護学部）
指定発言者 西村ユミ（首都大学東京大学院人間科学研究科）

③ 中等教育において異文化間能力をいかに育むのか

企画 : 時任隼平 (関西学院大学)
司会 : 時任隼平 (関西学院大学)
話題提供者 : 津高絵美 (関西学院千里国際中・高等部)
話題提供者 : 河野光彦 (関西学院大学理工学部研究員)
話題提供者 : 時任隼平 (関西学院大学)

9月24日(土) 13:30～15:30

④ ビジュアル・ナラティブの方法論と現実を変革するイマジネーション

企画・司会 やまだようこ (立命館大学)
話題提供 やまだようこ (立命館大学)
木戸彩恵 (関西大学)
家島明彦 (大阪大学)
小松孝至 (大阪教育大学)

⑤ 「カタストロフの語り・記憶・時間」

企画・司会・話題提供者 : 矢守克也 (京都大学)
話題提供者 : 高木光太郎 (青山学院大学)
話題提供者 : 安斎聡子 (青山学院大学)
話題提供者 : 杉山高志 (京都大学)

9月24日(土) 16:00～18:00

⑥ APAの質的研究論文評価基準を読む

—多様な研究手法の観点から—

企画・話題提供・司会 能智正博 (東京大学大学院教育学研究科)
企画・話題提供・司会 鈴木聡志 (東京農業大学教職・学術情報課程)
企画・話題提供 大橋靖史 (淑徳大学総合福祉学部)
話題提供 柴山真琴 (大妻女子大学家政学部)

⑦ ナラティブをメタ分析する

一言語教育からの探究

企画・司会：嶋津百代（関西大学）
話題提供者：北出慶子（立命館大学）
義永美央子（大阪大学）
嶋津百代（関西大学）
指定討論者：サトウタツヤ（立命館大学）

9月25日（日）13：30～15：30

⑧ 熊本震災からの問い：質的心理学の蓄積と課題

～熊本地震ワーキンググループとともに

企画：ハツ塚一郎（熊本大学）
伊藤哲司（茨城大学・常任理事）
発表：加藤謙介（九州保健福祉大）

⑨ 質的研究における研究と実存の間

—研究対象者の唯一性の記述をめぐって

企画：日高友郎（福島県立医科大学）
司会：日高友郎（福島県立医科大学）；水月昭道（学校法人筑紫女学園）
話題提供者：日高友郎（福島県立医科大学）
指定討論者：齋藤清二（立命館大学）；サトウタツヤ（立命館大学）；廣井亮一（立命館大学）；
福田茉莉（島根大学）；水月昭道（学校法人筑紫女学園）

9月25日（日）16：00～18：00

⑩ 利害の絡んだ制度的場面における共感と反感の談話心理学

企画：岡田悠佑（大阪大学）
司会：岡田悠佑（大阪大学）
話題提供者：古川敏明（大妻女子大学）
話題提供者：岡田悠佑（大阪大学）
話題提供者：渡邊綾（福井大学）

⑪ 子どもとむかいあう

—教育実践の記述、省察、対話—

企 画：勝浦眞仁（桜花学園大学）川島大輔（中京大学）
司 会：川島大輔（中京大学）
話題提供者：勝浦眞仁（桜花学園大学）
話題提供者：熊田広樹（旭川大学短期大学部）
話題提供者：大倉得史（京都大学）
指定討論：菅野幸恵（青山学院女子短期大学）
指定討論：岸野麻衣（福井大学）

⑫ Bruner の『意味の行為』を行為論として読み直す

企 画：横山草介（自由学園）
司 会：阿部廣二（早稲田大学大学院人間科学研究科）
話題提供：横山草介（自由学園）
阿部廣二（早稲田大学大学院人間科学研究科）
引谷幹彦（青山学院大学大学院社会情報学研究科 修士課程修了）
指定討論：サトウタツヤ（立命館大学）
高梨克也（京都大学）

(6) ポスター発表

ポスター発表の会場は、西棟の廊下になります。発表時間は下記の通りです。

9月24日(土) 10:00～11:30 発表1グループ

9月25日(日) 13:30～15:00 発表2グループ

発表者は、抄録集に掲載されている番号と同じ番号の掲示場所にポスターを時間前までに掲示してください。発表時間中は、筆頭発表者が責任を持って、対応して下さい。

また、ポスターはその後も審査が続きますので、両日とも17:00まで掲示しておいてください。もし取りに来られない場合は、実行委員会の方で破棄させていただきます。

優秀ポスター賞は、理事と実行委員会の投票によって選出されます。それぞれ当日にポスター賞受賞者を受け付けにて掲示致します。

ポスターの掲示サイズは、横85×縦120cm程度(A0サイズ)で作成してください。会場の関係上、画鋲・のり・セロハンテープ等は使用できません。

ポスターは、マグネットを用いて貼り付けます。マグネットは、1発表者あたり、バー状のものを4本程度を実行委員会で準備します。

A3やA4で複数枚貼り付ける場合は、事前にそれらを貼り付けておいてください。

【質的心理学フォーラム編集委員会企画】:質的研究領域としての〈あいだ〉

質的心理学フォーラム編集委員会企画

企画・司会 大倉得史 (京都大学大学院人間・環境学研究科)
鷹田佳典 (早稲田大学人間科学学術院)
話題提供者 山本知香 (京都音楽院)
今尾真弓 (名古屋学芸大学)
田中大介 (桜の聖母短期大学キャリア教養学科)
指定討論者 坂井志織 (首都大学東京)

企画趣旨

質的研究の大きな目標の一つは、人々が営んでいる生を手応えある形で理解し、記述することだろう。しかし、生というものは実に捉えがたいものでもある。それは何らかの概念的規定には収まりきらない余剰分を、常に有している。

例えば「私の生」とは言うけれど、それは私の体が生み出したものでも、私の体の内部でのみ営まれているものでもない。私の肉体が死を迎えても、私と他者たちとの〈あいだ〉で営まれていた何かまでもが一挙に消えてしまうわけではない。二つのいのちが生み出したいのちが次の世代に引き継がれていくこともあろうし、私が生きていたという事実が他者に有形無形の影響を及ぼしていくこともあるだろう。そういう意味において、「私」と「他者」の〈あいだ〉に、生物学的な「生」と「死」の〈あいだ〉に、前の世代と次の世代の〈あいだ〉に、生は遍在している。

あるいはまた、私たちは人と人の〈あいだ〉に生きている、とも言われる。人と人とが関わり合うときに生まれる特有のリズムや間、場の空気といったものは、個々人の行為や属性の単なる総和では説明できない独自のダイナミズムを有している。そうした固有の次元で営まれる生、複数の生が交じり合ったときに立ち上がる、誰のものでもなく誰のものでもあるような生を、一体どのように記述していったら良いだろうか。そこでは、非常に深い次元における生の共振や反響が起こっている可能性があるが、それをどのように捉えていくべきだろうか。

さらに、より実践的観点から言えば、しばしば非対称の関係となりがちな支援者と被支援者の〈あいだ〉で、あるいは被支援者同士の〈あいだ〉で、どんな問題が生じてくるのだろうか。皆がより幸せに生活できるようにとの願いは同じであったとしても、立場や背景、個性を異にする人々が協働することは決して簡単なことではない。異なる文脈を背負ったさまざまな生が絡み合い、ときに激しい摩擦を生み出す現場で、どんな姿勢や工夫が必要になってくるのだろうか。

本企画では、質的心理学フォーラム第8号の特集論文のうち、複数の生がそこにおいて交じり合い、反響し合う場、あるいは各個体の有限性を超えて生が波紋を広げていく場としての〈あいだ〉に注目し、そこで生じているダイナミズムを描出する研究や、私たちが他者と共に生きていくためにどんなことが鍵になるのかについて実践的な示唆を与えようとする研究のいくつかを紹介する。それを通じて、概念的規定に容易には収まらない生という対象(対象化できない対象)について考えていく際に、質的研究が持つ強みを明らか

にしていきたい。

『『出会うということ』をめぐって—ある自閉症の子どもとの〈あいだ〉に着目して—』

山本知香（京都音楽院）

すでに知っているはずの相手に対し、まるで初めて出会ったかのように新鮮で、生々しい感覚を覚えたことはないだろうか。ある知り合いの新しい側面を知的に理解し、相手に対して一方的に驚きや新鮮さを覚えることは多々あるかもしれない。しかし、本発表で考えていきたいのは、そうではなく、まさに「〇〇さんと出会った」としか言いようがないような、相手の存在そのものとの出会いの感覚である。それは同時に、相手にも自分を「知られてしまった」と感じるような、緊張と、照れや喜びなどが複雑に混じった感覚でもある。

具体的には、自閉症のある子どもと筆者との音楽療法場面を取り上げる。普段は子どもとのコミュニケーションのために力を借りているはずだった音楽を、「いらない！」と感じたことを手がかりに、木村敏の〈あいだ〉の概念に照らして考察をすすめることで、人と人が「出会うということ」の位相について掘り下げていきたい。

『災害支援の困難を超えること—被災地でのスクールカウンセリング活動を通して』

今尾真弓（名古屋学芸大学）

発表者は、東日本大震災で大きな被害を受けた宮城県沿岸部の学校を訪問し、スクールカウンセラーとして活動を続けてきた。被災地には、復興を願う多くの人々や支援団体が、世界中から訪れていた。数多くの支援は被災した人々の力となり、人々の回復を助けた。しかしながら他方で支援は、被災者の疲弊や自尊心の侵襲をもたらしていた。さらには「心のケア」が被災者を苦しめ、被災体験からの回復過程の複雑化をもたらしていた。このような支援の「負の側面」を私たちはどのように理解し考えればよいのだろうか。

本発表においては、支援の「負の側面」のありように焦点を当てたい。具体的には、支援者や被災者の〈あいだ〉—支援者と被災者の〈あいだ〉、被災者と被災者の〈あいだ〉、支援者と支援者の〈あいだ〉—で起こっていたことを明らかにし、支援を受けること、行うこと、そして被災地支援の困難を超える鍵について考察を行いたい。

『ライフエンディングとしての現代葬儀—儀礼と人生設計の〈あいだ〉—』

田中大介（桜の聖母短期大学キャリア教養学科）

就活（就職活動）になぞらえた「終活」という言葉が広く一般に浸透している今日、葬儀はたとえば自宅購入のために融資契約を組んだり、または将来展望に沿って転職を検討したりというような、「より良い日常生活」をもたらすことを目した人生設計のもとに行われる作業的活動＝タスクとしても見なされつつある。すなわち、現代の葬儀は「自己の生を手応えある形で制御して、最期を迎えたい」という人びとのニーズを反映した出来事としても捉え得る。この視点に基づき、本発表では一般に「ライフエンディング」という概念で括られる種々の活動に光を当てると同時に、「生＝日常＝人生設計上のタスク」対「死＝非日常＝人生設計の埒外にある習俗・慣習」という表層的な二項対立の構図を再検討しながら、葬儀が両者の〈あいだ〉にある両義的・境界的な出来事として見なされるようになってきた機制を考察していきたい。

日本質的心理学会編集委員会企画 最先端の社会現象から考える新しいコミュニティの姿とは？

アフリカ難民、プロボノからみる 「ゆるやかなネットワークと越境する対話」

企画：青山征彦（成城大学）・香川秀太（青山学院大学）
司会：青山征彦（成城大学）
話題提供：藤澤理恵（株式会社リクルートマネジメントソリューションズ組織行動研究所）・
香川秀太（青山学院大学）
話題提供：橋本栄莉（日本学術振興会（PD））
指定討論：岸磨貴子（明治大学）
松本雄一（関西学院大学）

企画概要

昨今、ますます人の動きが流動化し、既存の集団や組織の概念ではとらえ切れない現象が拡大している。すなわち、メンバーシップや集団としての境界が比較的明確だった、従来のコミュニティや組織に代わり、特に上からの指示がないまま、自律分散的にネットワークを形成し、各々の異質性・多様性を生かして新たな場、知識、情報、情動等を創造する活動の活発化である。言い換えれば、既存の分野や集団の枠を越えた越境活動、もしくは、集団の境界それ自体が曖昧となり消失さえするゆるやかなネットワーク型活動の活発化である。様々な領域で、この種の活動形態に依拠した実践、もしくは、影響を受けた新しい取り組みが野火的に広がっている。

例えば、社会人がメインの仕事とは別に社会貢献活動やコミュニティデザインに参加するパラレルキャリア、見ず知らずの人間同士が突然街中でパフォーマンスを見せるフラッシュモブ、旧来のような特定の団体だけでなく多様な個人が参加する反原発デモなどの社会運動、多様性を生かしたネットワーク状の組織運営の広がりなどである。実際、先端を走る活動家や企業家の多くは、従来のような官僚主義的なイメージとして次の世界を語るのではなく、確実にゆるやかな分散的ネットワークとしてそれを描く。

こうした活動において、現場では実際に何が起こり、どういった未来を我々は構築することになるのか。また、いかに質的研究の強みを生かしそれを表現できるか。本研究では、パラレルキャリア、アフリカの難民問題といった、最先端の社会現象に着目し、討論を行う。

プロボノ活動にみるビジネス／ソーシャルの越境的対話 ——「交換」に着目して

藤澤理恵 (株)リクルートマネジメントソリューションズ組織行動研究所

香川秀太 (青山学院大学)

プロボノとは、「仕事を通じて培った知識やスキル、経験を活用して社会貢献するボランティア活動」などと緩やかに定義される活動である。例えば、各々違う職場のWEBデザイナー、コンサルタント、コピーライターといった企業人が、束の間の異職種混成チームをつくり、普段の仕事で培った各ビジネススキルを活かして、NPO等の社会活動団体のHPの刷新やマネジメントの改善を、無償で試みたりする。他方で、ビジネスパーソンにとっては、そうした職場の外で自らのスキルの腕試しをする機会を得たり、普段の職場で出会うことのない福祉・介護の現場や、性被差別者の支援活動の現場と協働することで、それまでの働き方や生き方、あるいは社会への見方が揺さぶられ、問い直す機会を得たりする。こうした一種の「交換関係」からこの活動は成り立っている。

参加者の中には、プロボノに参加することで、自己を縛っていた枠が解放された感覚を覚え、これまでの職場の仕事につまらなさを感じ、退職や社外にて新しいコミュニティづくりに乗り出す場合もあれば、強固に資本主義的なビジネス文化を維持し、NPOとコンフリクトを生じさせる場合もある。

本発表では、こうしたプロボノ活動のネットワークはいかに成り立ち、そこでどういった種類のコンフリクトや感情や視点や関係性が新たに生まれているのか分析する。また、次世代の働き方やコミュニティ・ネットワークの在り方、さらには、緩やかな異質性のネットワーク活動を分析しデザインするための理論的視点を提案してみたい。

遍在する〈故郷〉

——南スーダン難民の相互扶助組織の実践にみるコミュニティの再生と創出

橋本栄莉 (日本学術振興会／九州大学)

難民と呼ばれる人々は、国家から排除された脱領域的・周縁的な存在と一般に捉えられてきた。その一方で、難民となった人々の暮らす場は、国際関係や国内問題、複数の文化的規範や自他の意識といったさまざまな位相の社会関係やネットワーク、人間同士の相互行為が集積する場でもある。

2013年末に南スーダン共和国で勃発した内戦によって、72万人以上もの人々が難民となった。一部で民族紛争化した南スーダン国内の紛争は、当然のことながら、隣国の難民定住地で暮らす人々の社会関係にも多大な影響を及ぼしている。

南スーダン難民が多く暮らすウガンダの難民定住地では、難民同士の相互扶助を目的とした独自の社会組織が発達している。この組織の運営に携わる難民たちは、異なる背景を持つ他者——ホスト・コミュニティ、他地域の紛争による難民、国内紛争において「敵」とみなされる民族集団など——との共存を前提とした組織づくりに取り組むと同時に、自分たちの民族的アイデンティティと向かい合う場を提供することで、故郷ではないその土地に新たな〈故郷〉を創出しようとしていた。

本発表では、植民地期以降の紛争の歴史の中で「上から」規定されてきた集団概念や境界に翻弄されつつも、目の前の他者との共存方法を模索しながら生き抜いてきた人々の知や実践を分析する。このような分析から、さまざまな混乱や緊張、思惑と希望の中でよりよい生を目指す人々が見出す新たなコミュニティのあり方について検討する。

研究交流委員会企画 教職大学院の学びを研究する

企画・司会：一柳智紀（新潟大学）
話題提供者：益川弘如（静岡大学）
話題提供者：東海林麗香（山梨大学大学院）
話題提供者：倉本哲男（愛知教育大学）

企画主旨

現在、教員養成改革が全国的に進められている。その背景には、変化の激しい時代において求められる知のありようが変化していること、そうした知を育成するために教師に求められる知もまた変化していることが挙げられる。同時に、特別な支援が必要な子どもへの適切な支援や、いじめや不登校への対応など、学校および教師が取り組まなければならない課題は多岐に渡っていると現状がある。

こうした中、教員養成改革の1つとして進められているのが教職大学院の設立である。教職大学院は従来の学問の専門領域に特化した学びではなく、高度専門職業人としての教員養成を主眼として、「理論と実践の往還」「実践の省察」「生涯学び続ける教師の育成」などをキーワードに、自己の実践の省察を行いつつ、新たな理論とそれに基づく実践を学ぶことのできる機会と場を提供することを目指している。平成28年度だけでも全国に18校が新設され、今後も新設、拡充が目指されている。

こうした教職大学院における学びは、従来の大学院とは異なる。学びの質を保証していくためには、教職大学院での学びを、そこに携わる人々自身が記述し、省察し、研究の俎上に乗せていくことは不可欠だろう。しかし、その際、研究の進め方や方法、知見の提示の仕方、さらには「研究」というものの捉え方もまた、新たな可能性に開かれているのではないだろうか。

本シンポジウムでは、先駆的に教職大学院を開設し、実践とその知見を蓄積してきた教職大学院にて活躍する先生方から、自校の教職大学院の取り組みとその学びの特徴をそれぞれの研究に基づいて紹介していただきつつ、教職大学院での学びを研究する上で、大切なこと、難しいこと、可能性、展望などを議論したい。

授業づくりを支える教員コミュニティの拠点としての教職大学院

益川弘如（静岡大学）

発表主旨

静岡大学教職大学院の教育方法開発領域では、県下の教員一人一人に知識習得型授業から知識構築型授業への革新を促し、授業の質を向上し続ける教員コミュニティの構築と拡大支援の「拠点」として位置付けている。授業・実習では、「人はいかに学ぶか」に関する学習科学の研究知見を基盤に、院生と実習先教員が共に授業を核とした設計・実践・分析のサイクルに取り組むことで双方が変容することを目指しており、その変容成果と今後の課題を紹介する。

公共性という視点から教職大学院における研究および教育を考える

東海林麗香（山梨大学大学院）

発表主旨

本学では全ての院生が、年間 200 時間にわたって連携協力校での実習に取り組む。指導教員も院生と共に、担当院生の実習にあわせて連携協力校に出向き、院生と共に授業等を観察し、子どもや先生と関わり、その場で院生指導を行う。実習のありよう、指導のありようは実習先および連携協力校全体に開かれている。また、研究課題、進捗状況および成果も県教委をはじめとした外部に公開され、また成果は県の教育に具体的に還元されること、一般化可能なことが求められる。このような教職大学院における研究および教育のありようを公共性という視点から整理し、その実際や可能性、課題についての議論の糸口としたい。

Action Research からみる教職大学院の学び —Ed.D. 博士課程との接続も踏まえて—

倉本哲男（愛知教育大学）

発表主旨

本学では、H25 教職大学院の全国調査を実施し、「教職大学院のカリキュラム・指導方法の改善に関する調査研究 - 理論と実践の融合・往還の視点から -」の報告を行った（H26）。Part 1「Action Research とカリキュラムマネジメントの視点から」では、「終了報告書」「学校実習」「条件整備・他」の視点で整理した。次に Part 2 では、博士課程との接続を念頭におき、海外の Ed.D. プログラムも調査した。教職大学院の設置が、ほぼ終了（申請中も含む）した全国的な動向に鑑み、「理論と実践の融合・往還」をする「教職大学院の学び」とは、いったい何であるのか、本学の実践事例も踏まえながら検討する。

災害復興過程をめぐる人文学的アプローチの再検討

—地震学者との対話を通じて—

話題提供者 : 高原耕平・大阪大学大学院文学研究科
河合直樹・京都大学大学院工学研究科
宮前良平・大阪大学大学院人間科学研究科
高森順子・(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構
企画者・進行 : 高森順子・(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構(再掲)
コメンテーター : 武村雅之(名古屋大学)

企画主旨

災害復興過程では、地域の立て直しを図るためのあらゆる取り組みが、人々の生の営みに直結する。そのことと歩みを同じくするように、特に2007年の中越地震以降「物語復興」や「災害文化」といったような言葉に代表されるような、被災した人々を中心に据えた人文学的な実践・研究が進められてきた。一方で、災害研究は多様化、細分化が進んでいる。各分野の専門知が個々に蓄積され、進化し先鋭化しているからこそ、異なる専門分野の研究者同士の対話は困難になっているとはいえないだろうか。

本企画では、災害復興過程をめぐる人文学的アプローチが、研究・実践として災害復興に本当に役立つのかを、地震学者との対話の場を設定することで検討する。具体的には、哲学、グループ・ダイナミックスを専門とする若手研究者4名が、災害復興過程の現場での実践・研究を報告する。報告を受けて、これらが災害復興研究にどのように寄与するのか、また、現場に真に役立つのかを、地震学者の武村雅之氏を迎え、双方の率直な対話を通じて検証を試みる。この試みによって、専門分野の異なる者同士の対話の場の設定方法を再考するとともに、人文学的アプローチによって生み出される災害復興の知見が、既往研究とどう接続しうるかを検討し、現場での既往実践の再確認、再構築、新たな実践創出の契機としたい。

発表主旨

① ちょっと掘ったら瓦礫が出てくるで —20年目の復興公営住宅における公共性の諸課題

高原耕平

1995年の阪神淡路大震災のあと、2万5千戸以上の復興公営住宅が建設された。入居から約20年が経過し、当初入居者(被災者)の高齢化、住民層の入れ替わりなど、「復興住宅」は転換期を迎えつつある。

本発表では、被災A市のある復興公営住宅の現状を糸口として、「1995年の宿題」について考えてみたい。復興住宅はほんとうに復興しているのだろうか。

はじめに、住民によって語られる住宅の諸課題が、集合住宅一般の問題、公営住宅一般の問題、そして復興住宅特有の問題が絡みあったものであることを報告する。次いで、住宅が直面しているこうした課題の背景に、被災体験などの差異を織り込んだ「公共性」の生成不全があることを考察する。さいごに、こうした公共性の課題に対して、哲学にできることを検討する。

② 思い出すことと忘れることの間で揺れる供養の意味合い

— 津波流出写真返却における死者との共生への一考察

宮前良平

東日本大震災は戦後初めて死者行方不明者の総数が1万人を超えた災害であり、その死者数の多さから、近年では幽霊譚の聞き取り調査や宗教者による実践活動をベースに死者論が議論されるようになりつつある。本発表では、津波流出写真返却活動の実践から、死者との共生へ向けた議論へアプローチしてみたい。

東日本大震災の被災地では、津波によって流された写真を返却する活動が展開されている。しかし、震災から5年半が経過し、写真返却を希望する被災者数が減少するにつれて、縮小や終了を決めるところも少なくない。本発表では、岩手県北東部に位置する野田村における発表者によるフィールドワークをもとに、津波流出写真を終了させる際に用いられる「供養」が示す意味を明らかにする。その際に理論的基盤としてロラン・バルト『明るい部屋』における写真論を参照する。

③ 書道による新しい復興支援のかたち — 主体性を促す被災地書道教室の実践

河合直樹

「うちの村に来て書道教室をやってくれませんか」——東日本大震災で被災した岩手県九戸郡野田村に住む男性との数奇な出会いから、2012年10月以降ほぼ毎月、発表者は講師役となって書道教室を開催してきた。

この書道教室は、「復興」という目的が前景化する既存の支援活動に顔を出さなかった住民が多く集い、書への没頭と他者との交流が自然になされる空間となっている。2015年3月以降は不定期開催となったが、ある女性は、「震災前と同じ生活をしちゃいけない」という決意のもとに、自ら課題を設定して毎朝筆を執ることを習慣化した。

こうした一連のエピソードからは、単なる書道技術の熟練や、日常からの逃避・気晴らしとは異なる、被災後の生活を前向きに意味づける被災者の主体的な姿が、明確に立ち現われる。被災地で書道を実践することと復興との関係や、その営為を支援することの復興支援としての意味を深く検討したい。

④ 物語り行為で連帯するコミュニティ

— 阪神・淡路大震災20年目の災害体験手記集制作を通じた実践的研究

高森順子

阪神・淡路大震災の約4ヵ月後に1冊の手記集が発刊された。『阪神大震災 被災したわたしたちの記録』と題されたその手記集は、震災直後に創設された市民団体「阪神大震災を記録しつづける会」によって出版された。同会は「記録しつづける」の名の通り、10年間活動を継続することを発足当初から掲げ、その結果、手記集を1年に1冊、全10集発刊し、収録された手記は434編に上った。

当初の目標が達成されたことと、同会の代表であり、手記集の編集を行っていた高森一徳が最終巻発刊の前年に亡くなったことから、同会の活動はその後5年間、活動を休止していた。代表者の姪である発表者は、活動休止から5年が経過した2010年より、かつて手記を執筆していた人々に声をかけ、同会の今後のあり方を執筆者と共に考えてきた。そして、震災から20年目を迎えた2015年に、継続的に活動に関わってきた手記執筆者に改めて手記を綴ってもらい、全14編が収められた手記集『阪神・淡路大震災 20年目の私たち』をまとめ上げた。

本発表では、手記執筆という、自らを物語る行為が同会の執筆者たちにとっていかなる意味を持っているのかを、20年目の手記集を編集した発表者が編集のプロセスで行われた執筆者とのやりとりから検討する。

対人サービス専門職における「ジェネラリスト」と「スペシャリスト」を再考する

企画：河原智江・西村ユミ
司会：西村ユミ（首都大学東京大学院人間科学研究科）
話題提供者：久保恭子（東京医療大学東が丘・立川看護学部）
話題提供者：河原智江（共立女子大学看護学部）
指定発言者：西村ユミ（首都大学東京大学院人間科学研究科）

企画趣旨

本シンポジウムでは、保健医療福祉分野を中心とする、対人サービス専門職（以下、専門職という。）における「ジェネラリスト」と「スペシャリスト」について、それらのレベル、質、担当する範囲等を議論したいと考えている。ただし、今回は、素人と専門家という観点からの「スペシャリスト」ということや自身の専門性を高める（あるいは、関心のある分野を深化する）、いわゆる、個人のキャリアアップという観点での「スペシャリスト」については、議論から除外する。

本議論を保健医療の分野において考えるときには、各専門職にはベースとなるライセンスとの関係が思い浮かぶだろう。医師を例に挙げたとき、医師免許というライセンスを取得していることは、「ジェネラリスト」としての医師のベースを担保するということである。その上で、医師は、各専門診療科において診療を行うわけであるが、当該専門診療科における「ジェネラリスト」であるとともに、当該専門診療科のさらなる専門性を極める「スペシャリスト」ということもある。

このことは、看護師、保健師、助産師、その他メディカルスタッフにも同様のことが言える。

次に、専門職の担う役割という観点から、本議論を考えてみる。

アルマ・アタ宣言で位置づけられたプライマリケア（WHO, 1978）は、「すべての人に健康を」という目標のもとで展開をされてきた歴史がある。医師を例に挙げると、プライマリケアは、全ての臨床医に必要な能力とされ、プライマリケアを担う医師は総合診療医（ジェネラリスト）と呼ばれ、各専門診療科別の専門医（スペシャリスト）とされている。

また、組織運営という観点からは、専門職には、「スペシャリスト」というよりは、「ジェネラリスト」を求められる現状もある。状況によっては、「ジェネラリスト」と「スペシャリスト」の両方の機能を求められる場合もあるだろう。

例えば、病院の救急医療部門では、赤ちゃんからお年寄りまで、あらゆる年齢層のさまざまな状態の患者（患児）が搬送されるため、救急医療の専門技術もさることながら、幅広く対応できる「ジェネラリスト」としての専門技術が求められる。

地域において、保健医療福祉の中核的な役割を担う地域包括支援センターでは、多職種の中で看護職の配置が1名（数名）ということが多く、組織からも、そして、関係機関からも、“医療”の専門職である看護職としての「ジェネラリスト」と「スペシャリスト」の機能を求められる現状があると思われる。すなわち、地域においては、対象者の複雑なニーズに対応していくことが多く、必然的に、より高度で、専門的な支援

が必要になる場合も多くなるためである。

このように考えていくと、専門性を高めていくことは必要であるが、「ジェネラリスト」としてのベースがあることが前提となると思われる。また、「ジェネラリスト」と「スペシャリスト」は双方ともに必要であるが、一般的には、「ジェネラリスト」と「スペシャリスト」の双方の専門性を同時に高めるということは、極めて難しいとも考える。

以上から、本シンポジウムでは、ベースとなる専門性、専門職の役割、専門職の置かれている環境等を踏まえ、以下の論点を中心として、「ジェネラリスト」と「スペシャリスト」について再考することとする。

- ・「ジェネラリスト」のベースラインをどこに置くのか？
- ・「ジェネラリスト」固有の専門性とは何か？
- ・「スペシャリスト」の範囲は、どこまでを指すのか？
- ・「ジェネラリスト」と「スペシャリスト」は、どのような関係にあるのか？
- ・専門職自身は、「ジェネラリスト」と「スペシャリスト」のどちらを志向するのか？
- ・社会からは、「ジェネラリスト」と「スペシャリスト」のどちらを求められているのか？

発表趣旨

企画者らの専門領域である看護学を例に挙げながら発表を進める。

久保は、「小児看護学」という観点からの、「ジェネラリスト」と「スペシャリスト」について話題提供を行う。「小児」看護学領域は、看護の中でも、「スペシャリスト」という位置づけがあるが、どのような点が、他の看護学領域と比べてスペシャリストなのかということを含め、上記論点について述べる。

河原は、「公衆衛生看護学、地域看護学、在宅看護学」という観点から、「ジェネラリスト」と「スペシャリスト」について話題提供を行う。「公衆衛生看護学、地域看護学、在宅看護学」では、地域において専門性を持ちながら、かつ、いかに多職種と連携を進めていくことで、対象者の利益につながることを目指すため、「ジェネラリスト」として求められるものが、他の看護学領域と比べると異なった部分があるのではないかと考えている。このことも含め、上記論点について述べる。

自主シンポジウム 中等教育において異文化間能力をいかに育むのか

企 画：時任隼平（関西学院大学）
司 会：時任隼平（関西学院大学）
話題提供者：津高絵美（関西学院千里国際中・高等部）
話題提供者：河野光彦（関西学院大学理工学部研究員）
話題提供者：時任隼平（関西学院大学）

企画趣旨

近年、学校教育において経済社会の発展を牽引するグローバル人材の育成は、校種を問わず喫緊の課題として指摘されている。本企画では、グローバル人材に必要な能力の一つを、異文化間能力として捉える。異文化間能力（Intercultural Competence）とは、異なる文化間で生起する様々な文化的接触の中で、異質な集団と共に生きていくための能力を表した包括的概念である（Bennet 2015）。異文化間能力という概念には、様々な能力が含意されている。本自主シンポジウムでは、それらを「レジリエンス」「Authentic Learning」「異文化衝突による具体的変容のプロセス」の3点から捉え、議論を行う。具体的には、関西学院千里国際中・高等部における事例研究を中心に報告を行い、それらと異文化間能力の関係性について議論を行う。関西学院千里国際中・高等部は海外帰国子女の積極的な受け入れ校であり、また文部科学省のSuper Global High schoolとして平成27年度よりグローバル人材育成に向けた取り組みを行っている。

本自主シンポジウムでは、異文化間能力を中等教育において育成するためには、「どのような要素が重要なのか」を参加者と共に議論する事を重視する。そのため、議論のポイントは、学習者の「異文化間能力に関する学び」と「その要因」である。話題提供者は、この2点を明確にした上で発表を行い、またフロアからの御質問・御意見を通して会場全体で議論を行う参加型のシンポジウムを意識している。

話題提供（1）

異文化接触を意識したフィールドワークは、異文化に関するどのような気づきを生むのか

津高絵美（関西学院千里国際中・高等部） *SGH 主任、*SGH アセスメントチーム

発表趣旨

本話題提供では、主に高校2年生を対象に平成27年度に実施された授業「フィールドスタディ」と、「リサーチとフィールドスタディ」、「課題研究論文オフィスアワー」を対象とした事例研究を報告する。これらの実践研究の理論的枠組みは、Authentic Learning である。Authentic Learning とは真正な学習を意味しており、現実社会の課題や問題意識を教室の中に採り入れた方法である（Herrington & Herrington 2006）。例えば、フィールドワークを通じた実地学習や、サービスラーニング等がそれにあたる。本実践研究では、生徒が学外で実施した「フィールドスタディでの学習活動」「それらを持ち帰り学内で行った学習活動」の2点をふまえ、異文化間能力に関してどのような学びを実感しているのかを明らかにする。

話題提供（2）

異文化接触とレジリエンスの関係性に関する考察

河野光彦（関西学院大学理工学部研究員）＊関西学院千里国際高等部

発表趣旨

本話題提供で着目するのは、レジリエンスである。レジリエンスとは、「逆境に耐え、試練を克服し、感情的・認知的・社会的に健康な精神活動を維持するのに不可欠な心理特性」を意味している（森ほか 2002）。主に2年生を対象に平成27年度に実施された授業「フィールドスタディ」と、「リサーチとフィールドスタディ」、「課題研究論文オフィスアワー」を対象に、それらの活動に参加した事が生徒のレジリエンスにどのような影響を与えたのかを定性的に分析する。特に、活動における「活動の具体的内容」と「そこでの他者とのインタラクション」に着目し、分析した結果を報告する。

話題提供（3）

日常的異文化接触は、生徒にどのような変化をもたらすのか

時任隼平（関西学院大学）＊SGH アセスメントチーム

発表趣旨

本発表では、中等教育における正課・正課外の活動を包括的な学習環境として捉え、そこでのどのような出来事が異文化間能力に関する変化をもたらしたのかを考察する。本研究で対象とするのは、関西学院中・高等部を卒業後に関西学院大学に進学した学生たちである。関西学院中・高等部在籍時代に経験した異文化衝突に関して半構造化インタビューを行い、そこでの出来事にどのような意味があり、結果どのような変化に繋がったのかを分析する。具体的には、インタビューで得たデータを Trajectory Equifinality Approach (TEA) を使って分析し、TEM を生成する。最終的には、異文化間能力に関する変容を経験した複数のインタビューに共通する事項を明らかにすると共に、異文化間能力の習得に必要なプロセスについて議論を行う。

参考文献

- Janet M. Bennett (2015) The SAGE Encyclopedia of Intercultural Competence. SAGE Publications, Inc
森敏昭、清水益治、石田潤、富永美穂子、Hiew, Chok C (2002) 大学生の自己教育力とレジリエンスの関係。
学校教育実践学研究 8 巻：179-187
サトウタツヤ (2009) TEM ではじめる質的研究 -時間とプロセスを扱う研究を目指して。誠信書房、東京都
Tony Herrington, Jan Herrington (2006) Authentic Learning Environments in Higher Education.
Information Science Publishing

ビジュアル・ナラティヴの方法論と 現実を変革するイマジネーション

企画・司会：やまだようこ（立命館大学）
話題提供：やまだようこ（立命館大学）
木戸彩恵（関西大学）
家島明彦（大阪大学）
小松孝至（大阪教育大学）

企画趣旨

人々は想像力とはイメージを形成する能力だとしている。ところが想像力とはむしろ知覚によって提供されたイメージを歪形する能力であり、それはわけても基本イメージからわれわれを解放し、イメージを変える能力なのだ。イメージの変化、イメージの思いがけない結合がなければ、想像力はなく、想像するという行動はない。(バジュラル 『空と夢』)

ナラティヴ（もの語り）とは、経験を有機的に組織化する行為である。その組織化のしかたは、狭義の言語様式に限定されないはずである。従来、ナラティヴ研究では、「時間順序」「時間秩序」など時間軸を重視してきたが、それは西欧語の言語様式を前提にしすぎてきたからではないだろうか。ビジュアル・ナラティヴは、それ自体がビジュアル特有の「テキスト」であり、独特の「経験の組織化のしかた」「語り方」「コミュニケーション方法」をもつので、その特徴を生かすべきである。

ビジュアル・ナラティヴは、言語によって構成される時間構造や、言語によって作られる概念枠組を超え、イメージを飛躍させ、感性や感情の伝達を容易にし、異文化コミュニケーションに威力を発揮すると考えられる。現代社会では、ビジュアル・プラクティス、つまりマンガ、アニメ、映画、ゲームなど、ビジュアルで考え、ビジュアルで語り、ビジュアルで伝える方法は、すでにポピュラーであり、大いに使われている。しかし、学問は旧態依然とした言語中心主義で語られている。ビジュアル・ナラティヴの理論と方法論を学問として練りあげていく必要がある。

私たちは、ナラティヴにおける言語中心主義から「ビジュアル・ターン（視覚的転回）」へという方向性を打ち出してきたが、さらにビジュアルのもつ「イマジネーションの力」に着目し、多様な具体的事例をもとに、その理論的・方法的議論を深めてゆきたい。

「かわいい」とは何か？ ——新しい発想を生成するビジュアル・ナラティヴ

やまだようこ（立命館大学）

事実は変えられないが、ナラティヴは変えられる。「イマジン」の歌のように、イメージのむすびつきによって、現実を変革し、新しいものの見方を生み出すことができる。「かわいい」とは何かというテーマで、ボトム・アップによって新しい発想を生み出す授業実践から、①「新しい発想の発見と名づけ」（別れのとき

の「かわいい」手の振り方「ワンポイント・フリフリ」、②「ブスカワの構造」（「かわいい」と「ブス」の境界と移行の不均衡）、③「かわいいとナチュラルの比較」（微妙な感性の比較考察）などの例をもとに、ビジュアル・ナラティブの可能性を議論する。

ビジュアル・リサーチ・メソッドの展開としての異種むすび法

木戸彩恵（関西大学）

本発表では、ビジュアル・ターン以後、ビジュアルな素材から創造的発想を可能にするビジュアル・リサーチ・メソッドの展開について概説したうえで、KJ法をベースに開発した「異種むすび法（やまだ・木戸、印刷中）」について紹介する。異種むすび法は「多声モデル生成法」の一部として位置づけられる。この方法を用いて、大学生が「かわいい」と考える画像イメージを対象にモデルを作成した事例を紹介する。分析において「ずれのある比較」をする意味と、分析結果として得られた新たな発想からイメージを生成し、学術的知見を超えた情報を発信する意義について言及する。

人生を物語り、視覚化する ——双六のライフストーリー

家島明彦（大阪大学）

本発表の目的は、ビジュアル・ナラティブの方法論としての人生双六法について説明し、その効果を検証することである。まず、ビジュアルであることが持つ力について考察する。具体的には、文章だけの物語と視覚化された物語を比較提示してみせることによって、視覚化の影響力について例証する。次に、自分の人生について語る／描くことの機能と効果について考察する。具体的には、自分の人生を双六の形式で描いたり他者の人生を双六の形式で読み解いたりするという作業を通して、人が何に気づき、何を学んだのかを整理する。過去を振り返り、現在の位置を把握し直し、未来を展望する、というプロセスを通して、様々な学びが得られていることが示唆された。

宗教的図像から考える他者性のあり方と意味構築プロセス

小松孝至（大阪教育大学）

宗教上の主題に基づく様々な図像は、歴史の中で、見るものにとって様々な意味を持って存在してきたと考えられる。宗教学・図像学・歴史学などの知見から、それらが信仰において持つ（持っていた）意味に迫ることは私たちにもある程度は可能であるが、これらの図像は同時に、現在私たちが受け入れている意味、価値、自己などのなりたちにゆさぶりをかけ、新たな考察を導く側面も持つと思われる。本発表では、いくつかの聖母子像を手がかりとして、それが、「母子」や「他者性（otherness）」といった概念に対しどのような示唆を与えうるかを、図像をみることにもとづく意味構築過程とともに考察する。

文献

ガストン・バシュラール（著）宇佐見英治（訳）2016『空と夢〈新装版〉運動の想像力にかんする試論（叢書・ユニベルシタス2）』法政大学出版局

「カタストロフの語り・記憶・時間」

企画・司会・話題提供者：矢守克也（京都大学）
話題提供者：高木光太郎（青山学院大学）
話題提供者：安斎聡子（青山学院大学）
話題提供者：杉山高志（京都大学）

企画主旨

本シンポジウムでは、カタストロフの語り・記憶・時間と題して、大規模災害や戦争、事件・事故といったカタストロフをめぐる質的研究について議論する。具体的には、「予言」、「被災者の語り」、「非体験者の伝承の語り」、「スキーマ・アプローチ」をめぐる4つの話題提供を行い、来場者とともに、カタストロフをめぐる質的研究の可能性について検討する。

発表主旨

第1の話題提供者（矢守克也）は、ジャン＝ピエール・デュビュイの「賢明なカタストロフ論」が、防災・減災研究、災害経験の記憶・継承の研究に対してもつ意義について報告する。本理論では、未来のカタストロフを「不可避」のものとする。そして、逆説的にも、この態度こそが未来のカタストロフを回避するために不可欠だと論じる。ただし、ここで言う「不可避」は、精密に理解しなければならない。

本理論は、独特の時間的態度、〈投企の時間〉を提起する。〈投企の時間〉では、未来は、現在に対して、「反実仮想的に非依存（独立）」であるが、「因果的には依存」する。つまり、「今と違うことをしたら、未来は…へと変わるだろう」との仮想可能性は排除するが、今なしていることが因果的に未来につながっていることは否定しない。この一見矛盾する時間的態度は、「プロテスタンティズム」のパラドキシカルな態度、すなわち、プロアクティブな姿勢の「徹底した放棄」（神の絶対的超越性の確保）と「徹底した採択」（世俗内禁欲・勤勉）の並立と同型的である。他方、これと対置される通常的时间的態度、つまり、〈歴史の時間〉では、未来は、現在に対して、「反実仮想的に依存」し、「因果的にも依存」している。つまり、上記の意味での仮想可能性を認めるし、実際の因果連鎖も当然肯定する。

〈投企の時間〉を前提にする同理論は、〈歴史の時間〉に立脚した「リスク論」が導く一連の態度（たとえば、事前の備え、予防原則…）→これら通常、非の打ち所なく肯定されている態度こそが、カタストロフを招来する元凶だとして断罪する。この態度こそが、「まさか津波が原発を…」を生んできたからである。さらに、同理論は「運命論」とも似て非なるものである。人びとをして、現在における、“もっともたしからしい”対策（カタストロフに対して）、あるいは努力（ユートピアに対して）に安住させる（ないし、それすら放棄させる）ように働くのが「運命論」であるのに対して、“もっともたしからしくない（現時点では、ほとんどありえないと思える）”対策や努力をも歴史の中から「救い出す」（「叩き出す」；ベンヤミン）のが、「賢明なカタストロフ論」だからである。

第2の話題提供者（杉山高志）は、阪神・淡路大震災の語り部グループを例に、被災当事者が被災経験談を長い年月語り続けることの意味について報告する。阪神・淡路大震災の発災から21年目の平成27年に、阪神・淡路大震災の語り部グループ「語り部 KOBE1995」は、防災科学研究所が主催する「第6回防災コ

ンテスト:防災ラジオドラマ部門」に出品するラジオドラマ作りを行い、発表者はその過程の参与観察を行った。

語り部 KOBE1995 が作成した作品は、語り部の「被災の経験談の内容」にのみ注目するのではなく、被災の経験談を十年以上にわたって語り続けることで「語り部自身に変化してきたという事実」に注目して制作された。阪神・淡路大震災の語り部の高齢化や、震災を知らない世代の登場など阪神・淡路大震災後 21 年目を迎える今だからこそ考えるべき「新しい語り継ぎの形」について、ラジオドラマで表現した。具体的には、「私に語る資格はあるのでしょうか」という題名でラジオドラマを制作した。制作過程で、「私に語る資格はあるのでしょうか」というキーワードで、メンバー間で様々な議論がなされた。例えば、「他の被災者（語り手）」と比較して、自分に語る資格があるかという議論である。また、「(目の前の)聞き手」に対して、自分が語る資格があるかと自問自答したメンバーも散見した。他にも、震災で「亡くなった家族」を念頭においたとき、自分に語る資格があるのかと悩みをメンバー投げかけた場面もあった。このように、「私に語る資格はあるのでしょうか」という言葉を軸にどのような議論がなされたかについて報告し、被災当事者が被災経験談を長い年月語り続けることの意味を考察する。

第 3 の話題提供者（安齋聡子）は、広島市の被爆体験伝承者養成事業を例に、次世代の「伝承者」について報告する。平成 24 年、広島市は被爆体験伝承者養成事業を開始した。この事業は、証言者が減少するなか、他者の被爆体験の記憶を「伝承」して、講話として一般に語る、次の世代の「語り部（伝承者）」を養成することを目的としている。現在、約 70 人の 1 期生・2 期生が、伝承者として伝承講話を行っている。

約 3 年間の研修の過程では、原爆に関する基礎的事項を身につけた後、各証言者（被爆者）に複数の伝承候補者がついて、グループでその証言講話を学習していくというスタイルが取られた。事業の目的や、こうした学習方法から考えると、証言者による証言講話に忠実な伝承講話や、同一の証言者の語りを学習した伝承者間では一律の伝承講話が語られることも想定される。しかしながら、伝承講話の現場では、「忠実な語り」「一律の語り」とは異なる、いくつかのタイプに分類できるものも多数生まれている。

本シンポジウムでは、証言講話・伝承講話、1 期生の活動を中心とするフィールドワーク、伝承者・証言者へのインタビュー等のデータとその分析をふまえて、「伝承」「継承」といわれる場面でのどのようなことが起きているのかの具体を示したい。また、それらを通して「伝承」「継承」とはどのような事象なのかについて、考察の一端を提示したい。

第 4 の話題提供者（高木光太郎）は、「伝承」へのスキーマ・アプローチというテーマで報告を行う。想起は通常、脳内に保持されている記憶表象の出力過程、ないしは社会的相互行為を通じた過去表象の構築および共有の過程として把握される。前者と後者には認知主義と社会構築主義という立場の違いがみとめられるが、表象の処理過程として想起を捉えている点で共通性がみられる。これに対してスキーマ・アプローチでは、想起を「かつてあったものがいまもある／ない」という「過去と現在の二重性（duality）」のモードで遂行される「環境の反復的な探索行為」として非表象主義的に理解することを目指す。ここで言語的記号を含む諸アーティファクトは、過去の出来事の記述・表現ではなく、環境の探索を構造化し方向づける媒介として位置づけられる。

報告者はこれまで共同研究者と共に自白や目撃証言の信用性評価の実践を通してスキーマ・アプローチの視点と方法論を整備してきたが、本報告ではこのアプローチを用いて記憶の「伝承」と呼ばれる過程を捉えることを試みたい。伝承を記憶表象の保存や受け渡しではなく、環境の想起的な探索過程の集合的な組織化として理解することで、どのような視野が開けてくるのか。カタストロフの記憶を題材とした映像作品などを素材としながら検討してみたい。

APAの質的研究論文評価基準を読む

—多様な研究手法の観点から—

企画・話題提供・司会：能智正博（東京大学大学院教育学研究科）
企画・話題提供・司会：鈴木聡志（東京農業大学教職・学術情報課程）
企画・話題提供：大橋靖史（淑徳大学総合福祉学部）
話題提供：柴山真琴（大妻女子大学家政学部）

企画趣旨

質的研究の質や評価基準に関する議論は長く行なわれている。そんななか、質的研究の専門学術誌 *Qualitative Psychology* を2014年に出版し始めたAPA（アメリカ心理学会）の専門委員会は、このたび論文の評価基準をまとめ、*American Psychologist* 誌に発表することになった（2016年8月掲載予定）。一方、今年から日本でも質的研究の教科書シリーズ、「Sage 質的研究キット」（新曜社、全8巻）が出版され始め、質的研究の土台となるような知識や技能が多くの人に共有されつつある。シリーズには研究の質を問うFlickの巻が含まれているが、同時に、方法論が異なるそれぞれの巻においても様々なかたちで評価に関わる問題が論じられている。評価には質的研究に共通の部分があれば、同時に、方法論により異なる部分もあるだろう。本シンポでは、「キット」の何人かの訳者が、おのおの得意とする方法論と「キット」における記述をよりどころとしながら、APAの論文評価基準を読んでいく。その概要理解した上で、それぞれの方法論の観点からAPA基準の可能性と意義について論じ、今後の質的研究の教育や実践に貢献することをその目的とする。

発表主旨

研究デザインの視点から（鈴木聡志）：U. Flick 著『質的研究のデザイン』における質的研究の質の問題を紹介するとともに、大会当日は本シンポジウムの導入としてAPA基準の概要を説明する。彼は質的研究の質の問題について1章を使い、研究の計画、実行、報告の3つのステップに分けて説明している。その内容を概説すると、計画の段階では、研究課題やリサーチ・クエスチョンや住民についての既存の知識を考慮して特定の手法やデザインを決定すること（適用）と、特定の手法やデザインが研究課題とフィールドに合っているかを何度もチェックすること（適切性）と、多様性に開かれていることが質を向上させる。実行の段階では、厳密性と創造性、一貫性と柔軟性、基準と方略の緊張の中でフィールドと向き合うことで質が発展する。報告の段階では、透明性、フィールドからのフィードバック、結果を届ける読者のためにどのように書くか、が重要である。他の章でも質の問題が言及されているが、ここでは省略する。彼の議論では質的研究のデザインを通じた質の向上に関心があり、明確な基準（standards）のようなものは示されていない。彼は、読者にはアカデミックな読者と実践的な状況にいる読者がいて、それぞれに向けて書く際書き方のスタイルが異なることを指摘している。前者に向けた論文やレポートには何らかの基準が必要だが、読者が後者の場合はより簡略で柔軟な書き方が望ましいだろう。後者の例として報告者が経験した学校関係者評価を紹介する。

ナラティブ研究の視点から

能智正博

S. Kvale 著の『質的研究のための「インター・ビュー」』と比較しつつ APA 基準を読んでみる。本書において研究の質は、インタビュー自体の質、文字起こしの質も含めた多層的なものと考えられており、研究論文の質はそれらいくつかの面が統合された結果でしかない。インタビュー研究はちょうど職人が自分の作りたいもののイメージ（研究設問）を念頭になるべくよい素材を調達し、その素材を生かしながらそのイメージを調整し、最終的な工芸品（craft）を完成させていく過程に類比される。たとえば、対象者から話を聞くなかでそこから得られた情報がその場で解釈され確認され記録されることが質の土台になる。より具体的には、テキストに照らして問いを明確化・精緻化していくこと、研究過程全般を通して多様な面から確認を重ねること、自分の理論的立ち位置を明確化してそれに即した見方や方法を工夫することなどが含まれる。これらは必ずしもすべてが、伝統的な研究論文の評価基準とは重ならず、ナラティブ研究の射程の広がりもそこに反映している。今回の発表ではそうした広がり、APA の基準においてどういうふうにかかされているかという点を中心に考察していきたい。

ディスコースの心理学の立場から

大橋靖史

公表された APA 論文評価基準について、T. Rapley 著『会話分析・ディスコース分析・ドキュメント分析』を参照しながら、論じてみたい。会話分析やディスコース分析では、リサーチ・クエスチョンを立て、それに基づき分析材料を収集し、データを書き起こす、あるいは、アーカイブを作成するプロセスを経ていく。こうしたプロセスがこの種の質的研究においては中核的な作業となる。プロトコルやアーカイブを作成していく中でどれだけテキストを読み込めるかが、研究の質を決定することになる。コード化を含め、元のデータに何度も立ち戻りつつ、次第に分析を深めていくことが大切になる。そして、そうした深化のプロセスを経たうえで、これまでの研究や多様なケースとの比較検討を通じ、分析の妥当性について検討し、論文を作成することになる。この点において、会話やディスコースの分析のアプローチは基本的には、他の質的研究アプローチと共通するものと言えよう。今回の発表では、会話やディスコースの分析の実例を紹介しながら、APA 論文評価基準にあてはめた場合にどのように評価されるか、また、そこにはどのような利点や問題点があるかについて検討してみたい。

エスノグラフィー研究の視点から

柴山真琴

本発表では、M. Angrosino 著『質的研究のためのエスノグラフィーと観察』を拠り所にして、APA 基準を検討する。本書では、エスノグラフィーを「観察、インタビュー、文書分析を主要な技法とする多角的なデータ収集法」として捉え、特に観察をエスノグラフィーの中核的な技法として位置づける。その上で、複数の章にまたがる形で「研究の全過程で妥当性を絶えずチェックすること」の必要性を述べる。具体的には、（１）観察段階：「トライアングレーション」により観察者のバイアスを低減させ複合的なデータを収集すること、（２）記録段階：組織化されたフィールドノートをつけること、（３）分析段階：「記述的分析」と「理論的分析」を行い、「イーミック」と「エティック」の視点の間を往復すること、（４）執筆段階：迫真性のある首尾一貫したナラティブとして表現することが、妥当性の担保に寄与すると指摘する。さらにエスノグラフィーの執筆については、学術論文形式とそれ以外の代替的形式を紹介しながら、「厳密に書くこと」と「豊かに書くこと」の間で生じる問題にも言及する。当日の発表では、エスノグラフィー研究に要請されるこれらの諸点が、APA 基準にどのように盛り込まれているのか、両者間に見られる記述の濃淡の違いに着目しながら、比較検討する予定である。

ナラティブをメタ分析する

－言語教育からの探究－

企画・司会：嶋津百代（関西大学）
話題提供者：北出慶子（立命館大学）
義永美央子（大阪大学）
嶋津百代（関西大学）
指定討論者：サトウタツヤ（立命館大学）

企画主旨

第二言語教育や応用言語学の分野では、学習者や教師を個別に理解するための方法として、また、かれらを取り巻く事象や環境を具体的に提示する方法として、質的研究が行われるようになった。日本語教育においても、学習や教授にまつわる動機や意味の探究が注目されるようになり、多様な文脈における質的研究が蓄積されつつある（館岡，2015 他）。このような背景のもと、本シンポジウムは、質的研究の対象の1つとして扱われてきた「ナラティブ」を、言語教育の枠組みの中で捉え直す。

本シンポジウムの話題提供者が共有している基本的な考えは、1) 語りの内容に注目するだけでなく、語ることそのものが言語活動であることを認識し、ナラティブを構築する活動そのものに着目すること、それゆえ、2) ナラティブという言語活動を通して、語り手自身が、過去の出来事や現在に至るまでの経験を振り返り、出来事と出来事、経験と経験をつなぎ、未来へと紡いでいくという点である。本シンポジウムでは、このような継続性のあるナラティブを、認識論的側面、方法論的側面、そして教育的側面などからメタ的に検討する。さらに、言語教育における質的研究の意義や課題、今後の可能性についても議論する。

「何が語られたか」と「どのように語られたか」－会話分析を用いたナラティブの再考

北出慶子（立命館大学）

発表要旨

ポスト構造主義において語りを対象とした研究の多様性が他分野において顕著化している。心理学においては Bamberg (2015)、応用言語学においてもナラティブ研究については Pavlenko (2007)、インタビュー研究について Talmy (2010) がその認識論的違いを明確化する必要性を述べている。その背景には、当事者の語りの内容や当事者側の視点を重視した従来型の語りに対し、語り自体を社会実践と捉える構築主義的なアプローチとの区別化がみられる。構築主義的立場においてナラティブは状況に埋め込まれた社会活動であり、何が語られたかだけでなく、どのように語られたかは意味生成の過程として極めて重要としている。しかし、当事者の語りの内容を研究対象とした解釈主義的ナラティブ研究において当事者と調査者がお互いをどのように位置付け、どのようなアイデンティティを構築しているのかを客観的立場から分析した研究はまだ十分とは言えない。本発表では、過去に解釈主義的立場において分析した語りのデータをあえてエスノメソドロジイ的会話分析を用いて再分析した試みについて述べる。会話構造や成員カテゴリーの観点から語

りのデータを分析することで、聞き手であり調査者でもあるという一見矛盾した研究者の役割、また語りの中で会話参加者の関係がいかに変化していくのかが明らかになった。ナラティブのメタ分析結果から、本発表では認識論的違いに留まらず、語りの社会的文脈や語られ方への配慮の必要性や意義について議論する。

第二言語の教室における「ナラティブ」の利用 －日本語を学ぶ研究留学生の発表活動を例として

義永美央子（大阪大学）

発表要旨

ことばを学ぶことを単なる「スキルの獲得」ではなく「自己のある側面の成長を促すもの」と捉える言語教育の場では、学習対象となる言語の音声・語彙・文法等を理解し使用できるようになるのみならず、学習言語を用いて何を語れるようになるかが重視される。本発表では、日本の大学院に進学を予定している研究留学生のための日本語集中予備教育において、授業活動の一環として行われた修了発表に注目する。この修了発表は、15週間にわたる学習活動を締めくくる活動と位置付けられており、留学生がこれまでの研究活動や職業経験、なぜ日本留学を選んだか、これから日本でどのような研究をし、将来は何をしたいと考えているのかについて、自己の過去・現在・未来をつなぐ形で日本語を媒介として語ることを期待されている。しかし、日本語学習を始めたばかりの留学生にとって、日本語で語りを構築することは容易ではない。本発表では、発表準備の過程と発表会での実際の語り、発表会後の振り返りの記録に基づき、第二言語の教室で自分を語る際に留学生はどのような葛藤を感じるのか、第二言語で自らについて語ることによって、彼・彼女らの何に変化がもたらされたのか・もたらされなかったのかについて検討する。

語るべきものと語られぬもの

－日本語教師を目指すノンネイティブ教育実習生のナラティブ

嶋津百代（関西大学）

発表要旨

従来の言語学や社会言語学の研究対象として扱われてきたモノローグ的ナラティブに取って代わり、昨今の応用言語学や言語教育では、語り手と聞き手の相互行為を通して協働的に構築される対話的ナラティブに注目する研究が少しずつ増えてきた（三代，2015 他）。しかし、接触場面でのノンネイティブの日本語によるナラティブを分析する場合には、語り手がノンネイティブであるということを念頭に置き、母語ではなく日本語でナラティブを語るという言語的側面と、ネイティブと相互行為を実践するという社会文化的側面の双方に着目する必要がある（嶋津，2004）。本発表では、日本語教師を目指すノンネイティブ教育実習生が執筆した自伝的エッセイと、エッセイ執筆後のインタビューを分析資料とし、それらの中で、過去のエピソードに基づいたノンネイティブ実習生のナラティブに注目する。まず、実習生のモノローグ的なエッセイには共通して、自らの学習経験や教授経験を肯定的に受け入れていく様子が窺える。次に、実習生とのインタビュー内容を提示するが、エッセイに選択されたエピソードとは異なるものが語られる。特にノンネイティブであることの葛藤や日本語教師になることの不安など、「語るべき」経験としてエッセイに書かれたエピソード以外に「語られぬもの」があったことが分かり、ネイティブとダイアログ的に構築されるナラティブだからこそ見えてくる語りの様相が明らかになる。これらのデータをもとに、語りを行う文脈や方法によってその内容や提示の仕方が異なることを指摘するとともに、ノンネイティブのナラティブについて再検討する。

熊本震災からの問い：質的心理学の蓄積と課題

～熊本地震ワーキンググループとともに

企画：ハツ塚一郎（熊本大学）
伊藤哲司（茨城大学・常任理事）
発表：加藤謙介（九州保健福祉大）
ほか調整中

熊本地震における質的研究者の支援活動や新たな実践の試みについて情報交換するとともに、過去の災害体験、災害研究を含めた、質的研究の蓄積と今後の課題について討議します。

企画者（ハツ塚、伊藤）は東日本大震災の発災にあたり、「東日本大震災ワーキンググループ」を結成、支援や調査にあたる質的研究者の対話の場を設定し、研究合宿や機関誌特集などの試みを行いました。このたびの熊本地震にあたり、新たなワーキンググループを呼びかけています（別紙）。

新たな災害の発生と被災体験の中で、どのような知見と蓄積を生かし、活用していくことができるのか。どのような新たな課題が突きつけられ、いかなる実践と研究の方向性が開かれようとしているのか。お集まりいただいた方々とともに、自由な形式で対話を深めたいと考えています。

当日は、被災したフィールドからの報告（加藤、ほか調整中）を共有するとともに、これまでの災害に関する調査と研究の事例、復興支援や防災教育などのアクションリサーチ事例を振り返ります。進行中の災害支援、復興支援に資する対話の場となりますとともに、これまでの質的研究の蓄積を振り返り共有する場、そして来たるべき災害に質的研究が連携し備えるためのネットワーク作りの場として、会員の方々のご参加をお待ちしています。

日本質的心理学会 熊本地震ワーキンググループ 結成趣旨

熊本地震で被災された方々に心よりお見舞いを申し上げます。被災地に思いを寄せ、また直接間接の支援にあたる会員が連携し対話する場として、熊本地震ワーキンググループ（震災 WG）を結成します。

フィールドに寄り添い、経験を決して量に還元しない姿勢を、質的心理学はその基盤として共有してきました。東日本大震災にあたって結成された震災 WG は、研究合宿や学会シンポジウムをはじめ、出会いと対話の場、新たな研究と支援を醸成する場、そこで生じた会話と考察を記録し発信する場として、3年間にわたり活動しました。その経験と精神を受け継ぎつつ、新たな取り組みを模索する場として、今回の震災 WG は活動したいと思います。

熊本地震の被災規模は、東日本大震災や阪神・淡路大震災と比較すると、必ずしも大きくはないかもしれませんが。しかし、ただ「量」の問題として災害を捉える視点には、自ずと危うさが漂います。熊本地震においても、過去の災害とは明らかに質を異にする事象が発生し、大きな影響をもたらしました。質的な固有性に目を配りつつ、過去の災害経験とその細部に学ぶことは、それ自体が被災地にとっての大いなる支援ともなるはずです。

質的研究とは、人と人を「むすび」、将来への視点を「ひらき」、新たなやり方を「うみだす」ことです。この能智理事長のメッセージを被災地で具現化する試みとして、多くの会員の皆様の参加を期待します。

活動方針

- (1) 会員による支援活動・研究活動を共有するとともに、関心を寄せる会員同士の交流と情報交換の場となり、質的心理学会としての社会貢献と新たな研究活動の発展を促す。
- (2) 対話と交流の場として、各委員会と連携し、学会誌、メルマガ、大会企画、研究会などを最大限に活用するとともに、個々の会員の創意と提案を取り入れ活動する。
- (3) WG のメンバーは普段は ML でやりとりし、熊本での研究合宿等を実施するなど、現場における対面での交流も重視する。なお、活動にかかる費用は、基本的に各自の自己負担とする。
- (4) 以上の活動にあたっては、東日本大震災時の震災 WG と指針を共有し、また3年間を活動の目処とする。

ハツ塚一郎（熊本大学）
伊藤哲司（茨城大学・常任理事）

質的研究における研究と実存の間

—研究対象者の唯一性の記述をめぐって

企 画：日高友郎（福島県立医科大学）
司 会：日高友郎（福島県立医科大学）；水月昭道（学校法人筑紫女学園）
話題提供者：日高友郎（福島県立医科大学）
指定討論者：齋藤清二（立命館大学）；サトウタツヤ（立命館大学）；
 廣井亮一（立命館大学）；福田茉莉（島根大学）；水月昭道（学校法人筑紫女学園）

企画主旨

質的研究法、特に参与観察に基づくマイクロ・エスノグラフィにおいては、単に行動を記述するだけでなく、その意味を解釈するための文脈も含んだ「厚い記述」が目指される。特に近年は、「よりローカル、より小さなスケール」で実施され、かつ「実践的問題へと取り組む」志向を強く持つ“focused ethnography”が増えつつあるとも言われる。人々の営為を文脈を含んだ形で記述することはエスノグラフィにおける極めて重要な課題である。

一方で、対象となる場や人々の「厚い記述」を通じて得られた結果を、どのように研究として位置づけることが可能であるかという点については議論の余地が多い。研究対象者となる場や人々の唯一性を丁寧に記述することが求められる一方で、記述された結果をもとに転用可能な知見を産出していくことも同時に求められる場合が多い。これらは一見すれば相反するようにも思われるが、共存しうる課題なのだろうか。

本シンポジウムは、マイクロ・エスノグラフィを用いた研究における、研究の理念・意義（転用可能性を見出し、具体化していく）ことと研究対象者の実存（研究対象者は唯一無二の存在であること）の間に生じうる乖離がどのように埋められうるかについて、議論を行う。

話題提供者は日高友郎（福島県立医科大学）の一名とし、日高が「筋萎縮性側索硬化症患者の在宅療養の場のフィールドワーク」として、2007年から2012年まで継続的に実施してきた一連の研究についての報告をする。日高の報告に対し、齋藤清二（立命館大学）、サトウタツヤ（立命館大学）、廣井亮一（立命館大学）、福田茉莉（島根大学）、水月昭道（学校法人筑紫女学園）が、それぞれの立場より指定討論を行う。一名の話題提供者に対して、複数名の指定討論者を配置するという形式を取ることにより、質的研究における「記述」、「転用可能性」、「実存」などの諸論点について多様な側面から議論・検討する。

発表主旨

神経難病者のコミュニケーション支援のマイクロ・エスノグラフィ —文化心理学的アプローチに基づく検討

（日高友郎）

筋萎縮性側索硬化症（Amyotrophic lateral sclerosis：ALS）は、全身の随意筋の運動を喪失する進行性

の神経難病である。呼吸筋が冒されれば人工呼吸器が必要となり、人工呼吸器の装着に伴う気管切開によって、患者は音声言語を失う。そのため、ALS 患者に対するコミュニケーション支援が様々な観点から実施されている。

その一方で、コミュニケーション支援を受けながら難病とともに生きる実態が不明瞭であること、公衆に向けたリアルタイムコミュニケーションの可能性が十分に探求されていないこと、神経難病者が自らの経験を発信するための場が不足していること、という問題が存在している。これらの問題点を解決した上で、神経難病者のコミュニケーション支援に資する研究を実施することが要請されている。

以上の議論から、本研究は「病いの実態の記述的理解」、「ALS 患者の一对多リアルタイムコミュニケーションの実践」、「ALS 患者の病いの体験を語るための場作り」を一体とした支援モデルを提唱することを通じ、神経難病者のコミュニケーションの可能性を拡大することを目的とした。本研究においては、「文化心理学的アプローチ」（記号の観点から、事例に基づくモデル化を可能とする）、および「生（ライフ）」（生命、人生、生活の3点から包括的な人間のあり様の理解を目指す）の視点を導入したマイクロ・エスノグラフィによって神経難病者へのコミュニケーション支援を記述するという方法を採用。

2007 年から 2012 年にわたり継続的に実施したフィールドワークに基づき、以下 4 つの研究を実施した。

1. 在宅療養における ALS 患者のコミュニケーション支援の実際

ALS 患者の在宅療養の現場への参与観察を行い、マイクロ・エスノグラフィとして、日々の活動を記述した。ALS 患者に対するコミュニケーション支援によって、患者だけでなく家族も含め、療養を円滑に進めるための記号がもたらされることを示した。

2. ALS 患者のリアルタイムコミュニケーション可能性の検討

ALS 患者による、インターネット・メッセージングソフトウェアを用いたコミュニケーションの場を分析した。リアルタイムコミュニケーションは十分に可能であると示された一方、患者の沈黙に、周囲の者が耐え切れず話者を変えてしまうという課題が示された。

3. 病者の経験を伝えるためのコミュニケーションのあり方：ファシリテーション機能の解明

科学者と市民の対話の場であるサイエンス・カフェをフィールドとし、専門的な知識（難病の経験など、一般には想像もつかないような知識）をテーマとした対話においてはファシリテーターが重要な役割を担っていること、ならびにその機能を明らかにした。

4. 病者アドボカシー企画の運営と意義の変容過程：複線径路・等至性モデルによる ALS 患者参加型企画の分析

ALS 患者が自らの病いの経験を語る企画を継続的に実施した。企画を継続的に運営していくための要素を明らかにするとともに、回を重ねるごとに多角的な視点で ALS 患者の生（ライフ）を研究および支援することに繋がっていく可能性、ならびにオーディエンスが難病を身近なものとして認識するような変容が示された。

上記 4 研究に対して、齋藤は記号論・意味ネットワークの視点から、サトウは文化心理学の視点から、廣井は臨床心理学の視点から、福田は当事者性・モデル化の視点から、水月は研究者自身の変容という視点から、それぞれ討論を行うものとする。なお司会は日高・水月とする。オーディエンスからの質問、コメントも受け入れ、積極的な議論を実現する場としたい。

利害の絡んだ制度的場面における共感と反感の談話心理学

企 画：岡田 悠佑 (大阪大学)
司 会：岡田 悠佑 (大阪大学)
話題提供者：古川 敏明 (大妻女子大学)
話題提供者：岡田 悠佑 (大阪大学)
話題提供者：渡邊 綾 (福井大学)

企画主旨

他者と共感を築くことは社会生活の基本であるとされ、特に採用面接や診療コミュニケーションといった参加者間の利害が絡む制度的場面においては、他の参加者と共感を築くことができるかどうかは、相互行為の結果としての成功への一つの秘訣であるとも言われる。しかし「共感を築く」あるいはその反意語である「反感を買う」とは具体的にどのような相互行為現象を指し、そしてその共感または反感は相互行為を超えてどのように帰結するのだろうか。本シンポジウムではその一つの回答として、「心理学的課題を談話の中から再特定化すること」を目的とする談話心理学の視座から3名の研究者がそれぞれ、日本企業に対する米議会公聴会での共感とその帰結(古川)、別の日本企業に対する米議会公聴会での反感とその帰結(岡田)、そして外国人患者への医療体験面接調査での共感及び反感とそれらの帰結(渡邊)を分析する。

古川は、トヨタ車の「アクセルペダルの不具合」をめぐるリコール問題に関する米公聴会でのトヨタ側の参加者たちが協働的に応答を産出する「助け舟」といえる相互行為のプロセス、特に北米社長の稲葉氏が“Let me step in”という発話やそれに類似する発話行為を用いることによって開始される相互行為に焦点を絞り、それが米議員との共感の構築に成功したやりとり、逆に失敗して反感をかうことになったやりとりを考察する。岡田は、タカタ製エアバッグリコール問題をめぐる米公聴会における公聴会委員である米議員からタカタ側代表者への“that’s worrisome”や“you’re not supporting this recall wholeheartedly”といった心的述語を用いた発話に関する連鎖構造と成員カテゴリー化、そして相互行為の一つの帰結としての当該公聴会のマスメディアでの言説の接続関係を探ることで、反感を反感として構築する技法とその政治的意義を考察する。渡邊は、日本在住の外国人患者(元患者を含む)を対象に実施した日本での医療体験に関する面接調査をデータとして、(1)参加者がどのようにして「感情を伴う語り(affect-laden telling)」を産出し、聞き手はどのような方法と言語・非言語資源を用いて共感を示すのか、また、(2)語り手は極端な定式化や心的叙述を用いて、どのように反感の語りを構築していくのか、を日常会話における共感の技法と比較し考察する。

本シンポジウムの最終的な狙いは、上記3つの利害の大きい制度的場面でのコミュニケーションの分析結果から、政治経済及び医療を巡る制度的相互行為場面において、参加者間で共感を築き維持するための適切な利害管理方法を提言し、相互行為の参加者が示しそして相互行為を超えて帰結する共感・反感の社会生活における諸相を具体的なものとして提示することである。

米公聴会における「助け舟」と共感の構築 —トヨタ側出席者たちによる応答の協働的産出—

古川敏明（大妻女子大学）

発表要旨

トヨタ車の「アクセルペダルの不具合」をめぐるリコール問題で、2010年2月に豊田章男社長が米公聴会に出席すると、マスメディアは豊田氏のパフォーマンスについてさまざまな論評を行った。しかし、豊田氏は米議員たちからの追求に対し単独で受け答えをしていたのではなく、臨席するトヨタ北米社長や通訳がいわば助け舟を出し、受け答えに深く関与していた。本発表ではトヨタ側の参加者たちが協働的に応答を産出する相互行為のプロセス、特に北米社長の稲葉氏が“Let me step in”という発話やそれに類似する発話行為を用いることによって開始される相互行為に焦点を絞り、それが米議員との共感の構築に成功したやりとり、逆に失敗して反感をかうことになったやりとりを分析する。

反感の技法と政治的意義

—タカタエアバッグ問題米公聴会での情意スタンスとメディア報道—

岡田悠佑（大阪大学）

発表要旨

本発表では、利害の絡んだ制度的場面において、反感と呼べる感情がどのような相互行為手続きによってどのように意味付けられるようになるのか、そして反感が相互行為を超えてどのような影響を反感の対象に与えるのかを明らかにする。タカタ製エアバッグリコール問題に関して行われた米議会公聴会をデータとし、公聴会委員である米議員からタカタ側代表者への“that’s worrisome”や“you’re not supporting this recall wholeheartedly”といった心的述語を用いた発話に関する連鎖構造と成員カテゴリー化、そして相互行為の一つの帰結としての当該公聴会のマスメディア報道での言説の接続関係を探ることで、反感を反感として構築する技法とその政治的意義を検証する。そしてその結果を基に、もたらず利害が大きい制度的場面における反感への適切な応答及び反感を防ぐ行為方法の提議を試みる。

外国人患者の医療体験に関するインタビュー調査における共感と反感の技法と協働構築

渡邊 綾（福井大学）

発表要旨

本発表では、インタビュー調査という制度的場面における相互行為の中で、調査者と対象者によって共感と反感がどのように協働構築されるのかを明らかにする。具体的には、日本在住の外国人患者（元患者を含む）を対象に実施した日本での医療体験に関する面接調査をデータとして、参加者がどのようにして「感情を伴う語り（affect-laden telling）」を産出し、聞き手はどのような方法と言語・非言語資源を用いて共感を示すのか。また、語り手は極端な定式化や心的叙述を用いて、どのように反感の語りを構築していくのかを分析する。その際、日常会話における共感の技法（Kupetz, 2014）と比較し考察する。それらの結果を基に、面談調査という制度的会話における共感や反感をめぐる相互行為現象を具体的に示したい。

子どもとむかいあう

—教育実践の記述、省察、対話—

企画：勝浦眞仁（桜花学園大学）川島大輔（中京大学）
司会：川島大輔（中京大学）
話題提供者：勝浦眞仁（桜花学園大学）
話題提供者：熊田広樹（旭川大学短期大学部）
話題提供者：大倉得史（京都大学）
指定討論：菅野幸恵（青山学院女子短期大学）
指定討論：岸野麻衣（福井大学）

企画主旨

教育・保育の場において、「質的に考える（Thinking Qualitatively）」ことに多くの困難を伴う現状がある。というのも、正しい知識と確かなスキルという、教員・保育者の技術的実践を重視すべしという言説が、外側からの強い要請としてあるのみならず、教員・保育者自身の内側にも散在しており、技術の向上と確かな知識の習得に駆り立てられているからである。

しかし、こうした言説は大勢の子どもを一括りにして語ってしまうがために、教育・保育実践から乖離してしまう危惧がある。教員・保育者が自らの実践を記述、省察するとともに、それらについて他者と対話することを通して、「一人一人の子どもとむかいあう」ことの意味を思い起こさせてくれる営みを不断に持ち続けることが、いまの教育・保育の場に求められているのではないだろうか。

本シンポジウムでは、実際に「子どもとむかいあう」保育者の立場から（1名）の話題提供と、「子どもとむかいあう」保育者や教員を目指す学生に、むかいあう立場から（2名）の話題提供を行う。指定討論者からのコメントやフロアとのディスカッションを通して、教員・保育者が、自らの現場の状況を語ることで、実践で直面する不確実性や省察的実践をどのように意味づけていくのかについて検討する。

話題提供 1

療育の現場における保育者との対話および記述 —気づくこと、捉えることに寄り添う

（熊田広樹）

児童発達支援等の地域療育の現場では保育者が中心的な役割を果たしている。丁寧に親子の育ちに寄り添う療育を目指したいと願う一方、福祉制度の中で「個別支援計画」等の立案も求められる。その中では、短期、長期というようにスパンを区切った「目標」やその「達成」等、目に見える子どもの行動の変化を記述することが疑いもなく求められている。また発達の過程で見られる子どもの困りや行動上の問題を、例えば視覚優位性などの一見わかりやすい言葉を用いて直線的な因果関係として捉えようとする記述も散見される。

発表者が地域療育の現場で実践してきたことは、遊びという一回限りの営みを深く掘り下げて振り返り（対

話)、保育者自身の言葉を作り上げていく(記述)ことに寄り添う過程であった。保育者による実際の記述を紹介し、子どもの言葉にならない言葉を捉えようとするところから逃げずにむかいあうことの意味を、皆さんとご一緒に考えていきたい。

話題提供 2

教師を目指す学生とむかいあうーエピソード記述し、対話することの意義ー

(勝浦眞仁)

保育や教育の現場では、「いま」という瞬間に起きたことを、実践者がすぐさま反省的に意識したり、言語化したり、語ったりしているわけではない。「生の、感じたままの、あるいは体験したままの物語」(Stern, 2004)の渦中に佇んでいる。教師を目指す学生たちも、教職ボランティア等の場で起こった体験に心を動かされ、またその物語をどう意味づけていけばよいのか分からない「不確かさ」の中にいながらも、目の前にいる子どもたちと懸命にむかいあっている。このような学生自身の心に響いた体験をエピソードとして描き、また教員がその文脈に身を置いて対話することには、学生と教員による協同的な学びとして、大きな意義があると考えられる。

本発表では、教職を目指す学生2人が教職ボランティアに赴く中で、彼ら自身の心に残った体験をエピソード記述し、教員養成校の教員である発表者とそのエピソードについて対話することが、学生および教員にとって、どのような学びにつながっていくのかについて、フロアの皆さんと共に議論していきたい。

話題提供 3

現場に関わっている研究者の役割

(大倉得史)

「発達心理学」を専門としているからということで、保育現場に講師等の形で呼ばれるようになって約6年になる。実際は保育の「ほ」の字も知らないのに、という後ろめたさを感じつつも、懸命に現場の保育者たちの感覚や悩み、問題意識などを探りながら、何とか一つひとつの依頼に答えてきた。振り返ってみると、そうした姿勢が、今でも一定程度現場に受け入れてもらえているということにつながっているのかもしれない。

一方、保育者が今語っている子どもは実際どんな子どもなのだろうかとか、なぜ保育者がその場面でそういった対応に出たのかといったことを考えたときに、少し分かりにくいと感じたこともあった。その疑問を率直に返すことが、大変多忙な保育者たちにとって新たな気づきにつながる側面もあったようである。

今回は、現場から遊離するでもなくそこに埋没するでもない研究者という存在が、子どもにむかいあう実践に対してどんな役割を果たせるのかについて考えていきたい。

これらの話題提供および指定討論を通して、「子どもとむかいあう」ということを、フロアの皆さんと議論し、改めて問い直していきたい。

Bruner の『意味の行為』を行為論として読み直す

企画：横山草介（自由学園）
司会：阿部廣二（早稲田大学大学院人間科学研究科）
話題提供：横山草介（自由学園）
 阿部廣二（早稲田大学大学院人間科学研究科）
 引谷幹彦（青山学院大学大学院社会情報学研究科 修士課程修了）
指定討論：サトウタツヤ（立命館大学）
 高梨克也（京都大学）

企画主旨

今春、心理学者 Jerome Bruner はその 100 年にわたる生涯を閉じた。晩年の Bruner の最大の仕事の一つは、1980 年代に一つのターニングポイントを持つナラティヴ心理学の展開に対する寄与であろう。このことを認めるならば、ナラティヴ心理学の向かう先が見え難くなっている今日にあって、Bruner 心理学の方法論上の核心に迫ろうとする作業は、新たな視野を我々に与えてくれる可能性を秘めているといえる。本企画は、いみじくも今春、邦訳が復刊された Bruner 晩年の主著の一つである “*Acts of meaning*” の再解釈から出発するものである。同著の邦題は『意味の復権』とされている。この邦題は「意味 (meaning)」という概念を、心理学研究の中核に位置づけようと試みた Bruner の志向をいくらか誇張して表現したものといえる。しかし、原題の “*Acts of meaning*” は、直訳すれば「意味の諸行為」である。ここに明らかなことは、原題におけるアクセントが「諸行為 (acts)」にあるのに対し、邦題におけるアクセントは「意味 (meaning)」にある、ということである。ここには「意味」と「行為」という概念の位置づけを巡っての一つの転倒が見出される。この転倒に対する我々の主張は、彼のアイデアは「意味」を問う研究を志向するものではなく「行為」を問う研究を志向するものであったというものである。すなわち、Bruner の主唱した「意味の行為」の研究とは、諸個人が日常生活や人生の中で経過した様々な「行為の意味 (meaning of acts)」を明らかにすることを目論むものではなく、諸種の「行為の意味」が規定される手前にあって、人間が未知性に基礎づけられた物事の「意味を希求する行為 (acts of meaning)」の過程を明らかにすることを目論むものであった。

「希求」という言葉は、今、この時点においては無いものが、いずれ何らかの形で得られることを願い、求めている状態を指す。この文脈において「意味」という概念は、「意味の行為」の先に不確定性に裏付けられたものとして展望される可能的概念となる。「意味」論から「行為」論への方法論的転換は、晩年の Bruner のナラティヴ論を理解する上で極めて重要な論点である。本シンポジウムでは、Bruner への追悼の意を込めて、彼の「意味の行為」論を一つの行為論として具体的な実証データの分析を通して精緻化することを試みる。

発表要旨

Bruner の「意味の行為」とは何であったか？－「行為論」としての可能性－

横山草介

人々の生きた「行為の意味 (meaning of acts)」の分析に携わる時、我々は言わば「外部観測者」の視点に立って、彼らが生きた行為の外側から当の「行為の意味」を検討することになる。これに対し「意味の行為 (acts of meaning)」の分析に携わろうとするならば、我々は言わば「内部観測者」の視点に立って、間断なく継起する行為の連鎖の内側から一つの「行為」として「意味の行為」を検討する必要がある。ここで言う「意味の行為」は「何らかのトラブルやジレンマの発生を契機として、当の事態を理解可能にするような意味を落着させる可能性の脈絡希求の行為」(横山, 2016) として定義される。この定義は、Bruner 派の Narrative Cultural Psychology の方法論に定位するものであり、「意味」は対象の位置づく脈絡との関係において規定される、という考え方に基づくものである。

「意味の行為」から捉える「再会」－大学生の旧友との再会場面の談話分析－

阿部廣二

報告者はこれまで、旧友同士の大学生と社会人が参与する再会場面について検討を行ってきた(阿部, 2014, 2015, 2016)。「意味の行為」の観点から考えるならば、再会場面では、成員自身のかつてからの変化を契機とした、互いの相互理解についての「トラブル」(横山, 2016)が生じると推測される。再会場面に参与する成員は、こうしたトラブルをどのように取り扱い、また理解可能な意味として落着かせていくのだろうか。また、こうした過程の分析は、青年心理学を始めとする若者研究に対してどのような利益をもたらすのであろうか。本報告では、以上の問題について、具体的な再会場面の談話分析、およびディスカッションを通して考えていきたい。

「意味の行為」から捉える児童養護施設職員が抱えるジレンマの解消過程 －施設職員へのインタビューデータのナラティブ分析－

引谷幹彦

本報告の対象は、児童養護施設で長期的に支援実践に携わってきた職員である。児童養護施設とは、職員が保護者に代わって24時間子どもと生活をともにする入所施設である。そこには、「本来であれば子どもは家族の手によって養育されるべき」という子育てについての規範と、実際には「自身が他の家族の子どもを施設で預かって養育している」という現実との間でジレンマを抱えている職員の姿がある。では、児童養護施設の職員はこうしたジレンマにどのように折り合いをつけながら、支援実践の継続を図っているのだろうか。

「意味の行為」(横山, 2016)の観点から考えるならば、彼らがこれらのジレンマに如何に折り合いをつけながら日々の実践を継続しているのかについて考察することが可能となる。本報告では、職員に対する半構造化インタビューのデータの検討を通して、「意味の行為」という視座がこうした対象の理解にどのような見通しを与え得るのかについて考察したい。

24日(土) 10:00～11:30【ポスター発表1】

No101 青年期発達障害者の母親自身の人生経路

山崎真理子 ルーテル学院大学大学院臨床心理学専攻修士課程 田副真美

青年期発達障害者の母親に半構造化面接を行い、TEM図を作成した。子どもが発達障害の診断を受けてから、その母親は何をきっかけとしてどの様に自分らしく生きる選択をするのかを可視化し、またその心理的な変遷はどう推移するのかを質的に分析した。診断時の年齢は違っても、共通する過程は存在する。これにより、より有効な母親支援を提供できる可能性が示された。

No102 精神障害者の地域生活支援と心のケア導入に関する検討
—地域活動支援センター及び作業所のあり方をめぐる考察—

荒井陵 NPO法人あすぴれんと

臨床心理学的アプローチが適切かつ、より有効な形で地域の福祉現場に導入されていくためには、当事者のニーズが研究的に明らかにされることが必要であり、臨床心理士が提供できるサービスと当事者のニーズのマッチングを行っていくことが重要となるであろう。そこで、本研究では当事者のニーズを明らかにし、臨床心理士の地域障害者福祉における支援の可能性及びその方法を考察した。本研究の分析には、すでに述べたような問題点に答えるためにグラウンデッド・セオリー・アプローチを採用した。分析の結果、19個のカテゴリーが見出された。見出されたカテゴリーや下位カテゴリーを用いてモデル図を作成、それをもとに精神障害者の心理的ケアへのニーズと、臨床心理士の提供できる支援のマッチングについて考察した。

No103 「運資源ビリーフ」は移住先でも普及しているのか？

村上幸史 神戸山手大学

運を使うと減ってしまうもののように捉える考え方である「運資源ビリーフ」は、日本以外の地域にも普及していることが分かっている。しかしながら、現地語によるものとは別に、移住者が日本語で会話している中に現存している可能性がある。そのため、本研究では「運資源ビリーフ」の普及に関して、南米に移住した日系人及び日本人を対象にした聞き取り調査を行った。調査は、2013年と2015年にペルー・ボリビア・パラグアイの3か国計18名に対して現地で行われた。結果は地域によって多少傾向が異なっていたが、現地での日本語での会話の中で「運資源ビリーフ」に関する会話を聞いたり、記述を目にした経験を持つ者は少なかった。ただし公用語であるスペイン語では伝聞の経験があったり、そもそも日本語自体を話さなくなっている傾向も見られた。

No104 「あのとき、こうしていれば、もっと違った人生があった・・・」と後悔し続ける人々
—パラレルワールドを描くTEAアプローチの試み

香曾我部琢 宮城教育大学

人は人生の中で自らの人生を決める転機を経験する。多くの人々は、その転機における選択が完全な成功とはいえなくても、その転機を自分の人生においてポジティブな経験と受け止め、自らの理想とする生き方を【現実の世界】で実現しようとする。その一方で、「あのときこうしていれば」とその転機における自分の選択を強く後悔しつづけ、そのときに理想の選択をした自分の架空の世界【パラレルワールド】を思い描く人も多い。本研究では、後悔しつづける人々が、どのような自らが理想とする世界【パラレルワールド】を描き、自らの選択の間違いをどのように受け止めてきたのか、その後悔や【パラレルワールド】を想像する行為がその後の人生に影響を与えるのか、自己形成プロセスに焦点を当て分析を行う。

24日(土) 10:00～11:30【ポスター発表1】

No105 「魔境」を通り抜ける力

廣瀬太介 滋賀県教育委員会

他者と共に生きることを求めながらも、お互いに傷つけ合い損ない合う関係がある。そのような関係がある場所をここでは「魔境」と呼ぶ。「魔境」ではどのような力が働いているのか、そして、その境域から抜け出す時にはどのような力が働いているのかについて、カルト体験者が経験した心理過程を分析することで明らかにしたい。発表では、分析の方法として複線径路等至性アプローチ(サトウ, 2009)と対話的自己(Hermans, 1993)を併用して報告する。

No106 市民デジタルアーカイブ活動による「まちを語る主体」の再編

中村雅子 東京都市大学

日本では2000年前後から、全国各地で地域住民が主体となって地域の記録を収集し、デジタル化した形で保存・活用する活動が生まれている。ここではこれを市民デジタルアーカイブ活動と呼ぶ。報告者は2012-2015年に全国の比較的活発な活動の調査取材を行なった。主に運営者インタビューおよび参与観察をもとに、当事者の語りや活動を分析し、従来は専門的な知識や予算のある公的な機関(博物館、文書館など)がオリジナルな資料の収集として行なってきたアーカイブ構築を地域住民が行うことに、ローカルな知の生産や、参加者がまちを語る正統性を獲得、再編するという側面があることを指摘した。

No107 看護師のチームワークにおける規範の様相

田口めぐみ 新潟大学医学部保健学科 宮坂道夫(新潟大学)

本研究は、看護経験5年目から20年目の看護師計5名にインタビューを行い、経験年数とチーム内の役割が看護師の規範形成に及ぼす影響について分析した報告である。看護経験の少ない看護師は、チームの規範を認識して規範に従う行動をとるが、徐々に患者のニーズへの対応と規範との間にジレンマや違和感を抱くようになっていた。経験年数が増すと、チームの規範を認識しながらも、患者のニーズに対応するために周囲とのバランスをとりながら、許容できる範囲で規範を変えようとしたり、チームにおけるリーダー的立場を利用し、味方を増やしながら規範を緩和する行動をとったりしていた。本研究の結果は、チーム医療の時代におけるチームの規範のあり方を探求する一助になると考えられる。

No108 心理面接における傷つき体験の語り直し

山口智子 日本福祉大学

近年、心理学、教育学など各領域で、語り直しが注目されている。山口(2001)は心理面接における自己の語り直しには、語ることに對する信頼感、語りの素材、語りの場が必要であると指摘した。また、外傷体験の語りを安易に聞く危険性が指摘される一方、外傷体験の語り直しを促す曝露療法などが注目されている。本発表では、心理面接で語られる傷つき体験に着目して、語りの内容の変化などから、傷つき体験を語り直す意味を考えたい。検討する面接過程は、対人緊張が強い女性との約2年半の面接である。分析は、記録を読み直して、6期に分けて、経過をまとめた。さらに、回ごとに語られた傷つき体験の語り、夢、小説や神話、面接に持参した手紙、状況の変化、面接者の感情や行動を表にまとめた。本発表では、面接経過と傷つき体験を語り直した手紙の変化から語り直しの経過や意味を検討したい。

24日(土) 10:00～11:30【ポスター発表1】

No109 いじめ被害経験時の対処行動といじめ被害経験からの成長感との関連性の検討

齊藤英俊 北陸学院大学

本研究では、いじめ被害経験時のいじめ被害者の対処行動が、いじめ経験からの成長感とどのように関連しているかを検討することを目的として行った。青年期の過去にいじめ被害経験をもつ人を対象に、いじめ被害経験が、その後の「自分の成長」に結び付くのに役立ったと感じている対処行動について自由記述で回答してもらった。その結果、いじめ被害経験が自分の成長に結びつくのに役立った対処行動には、「認知的再評価」、「自己努力」、「対処努力」、「仕返し」の5つの内容に分けられた。この結果を踏まえて、いじめ被害経験時にどのようにすればこれらの対処行動をより効果的に促進させることができるかについて考察する。

**No110 生徒を数学的な理解に導く教室談話の検討
— 探究的な数学学習における教師の図の活用に焦点を当てて —**

茂野賢治 立命館大学教職教育開発機構
教職支援センター

本研究の目的は、探究的な数学学習において生徒たちが学習課題を解決していく際、表出した図を教師がどのように活用していくのかに着目して、生徒の教室談話参加の状態を検討することである。2クラスの教室談話分析の結果、生徒の教室談話参加の状態は、教師の図の活用によって異なり、数学的な理解の可否につながることを示された。

**No111 働くことと子育てにかかわることの間での揺れ動き
転職を繰り返した父親の語りを通して**

増井秀樹 京都大学人間・環境学研究科

近年、子育てにかかわる男性に社会的注目が集まっているが、心理学研究では男性は職業人として家族を扶養する責任の担い手として一枚岩のように扱われることも少なくない。そこで、本研究では多様化しつつある男性の生き方を示すという観点から、6回の転職を経験した男性(46歳、9歳と5歳の娘をもつ父親)に対して行った2回のインタビューの分析を行った。結果では、まず子どもが生まれてからの転職と家族へのかかわり方を時系列で整理する。また、転職のたびにライフスタイルを選び続けなければならないという状況において、子育てにかかわりたいという思いと経済的に生活していかなければならないことの間で揺れ動くさまを明らかにする。

No112 高校困難校における生徒の語りの変化

高橋亜希子 北海道教育大学

高校の困難校は、現在、発達障害・情緒的な困難を抱える生徒が多く入学し、情緒の安定性、他者への信頼感、自己肯定感などを回復する支援が必要である。ある過疎地域の高校の困難校において社会科の教諭が生徒の内面的な課題に授業の題材を近づけ、生徒の感想の共有を通して、生徒の自己開示や友人関係形成を支える試みを行った。筆者は201X年度入学生生授業を中心に、201X年7月、10月、201X+1年2月、6月、8月、11月と2か月に1回ほど授業観察に訪れ、授業のビデオをB教諭と共に振り返った。初めは緊張で声も小さく存在も消したような雰囲気の子供が、徐々に友人関係ができ、自己表現がなされるようになった。退学者も出ていない。そのため、本発表では、生徒の記述した文章の時系列での変化、生徒へのインタビューから、生徒の内面的な変化の過程や授業が与えた影響について検討する

24日(土) 10:00～11:30【ポスター発表1】

No113 **クライアントに拒絶された音楽療法実習生が療法的関係を構築するまで
—実習生へのインタビューからTEA作成を試みる—**

古平孝子 聖徳大学

この発表は障害児施設にて音楽療法セッションを週1回行う学生がその施設に暮らす小学6年生の児童と、音楽をとおして人間関係を築いていく過程を筆者が観察し、セラピストにインタビューし、そしてTEMにて表したものである。施設に入居する児童の多くは思春期を迎える頃、人間関係の構築に難しさを示す。考えられる主な要因としては幼少時より保護者と離れて暮らしていることからアタッチメントの問題がある。拒絶から心を開いていくまでのその過程に経験の浅い学生の葛藤、省察がどのようにクライアントに影響していくのかを分析する。

No114 **「研究」と「現場」の間でのキャリア形成——学校改革へのアクションリサーチについての反省的検討**

蒲生諒太 京都大学大学院教育学研究科

国立大学改革などの動きと連動して、研究者が従来の自分の「研究」とは別に、初年次教育等の「教育活動」や地域社会や学校などに関わる「社会貢献」が盛んになってきている。しかし、研究者の立場からは「研究」とこのような「現場」との関わりが二項対立として捉えられ、後者への従事が「研究」の専念を妨げるものと感じられることがある。

本研究では、上記の問題を念頭に報告者のアクションリサーチの事例を紹介、検討する。この事例では学校現場で「探究活動」を始めとする学校改革に関与しながら「研究」と「現場」の間で研究者として、報告者自身がキャリア形成を行ってきたものである。その中での「現場」との関わりとその意味について考察する。

No115 **リーダー保育者の育ちのプロセス**

富山大士 秋草学園短期大学

都内のA保育所において、保育者同士の保育カンファレンスを開始し継続するなかで、日々共に保育をする保育者8名の中のリーダーとなる保育者の育ちのプロセスの解明を目的として研究を推進した。

「チーム保育における保育者間のチームワークの向上について」と題し、リーダー保育者を対象に、カンファレンスを開始した前年度、カンファレンス実施1年目、カンファレンス実施2年目の3年間のリーダーとしての意識の変遷について、インタビュー(30分程度×3回)を行った。インタビュー結果は文字に起こし、SCAT(Steps for Coding and Theorization)の手法を用いてコーディングしてストーリーラインを生成した。本研究を通して、一人の保育者がリーダーとしての役職になり、カンファレンスを通してチームの問題点を認識するとともに、チーム全体を見渡す力が育っていく過程を明らかにした。

No116 **正課外活動における互惠的学習の成立過程
～大学における古典文学輪読実践のエスノグラフィ～**

眞崎光司 青山学院大学大学院社会情報学研究科

本研究は、大学生が没頭する正課外活動においてどのような仲間関係が構築され、その仲間関係からどのような学習が起きるのかを明らかにする。そのために自主的に古典文学を輪読する大学生のコミュニティへの参与観察と半構造化インタビューを行い、それらを元にエスノグラフィとして実践を記述した。その結果、活動への参加当初にみられる先輩が後輩を手厚く指導する擬似的親子関係から、相互に対等な立場で輪読の活動に貢献し合う互惠的仲間関係への移行が見られた。この移行は、1対1の親密な関係の元で先輩を倣う徒弟的な学習から、実践における公的な責任を相互に背負い合う互惠的な学習に変化したことを意味している。

24日(土) 10:00～11:30【ポスター発表1】

No117 高校交換留学体験者が進学先の大学を決めるプロセス

岩本綾 信州大学

1 学年間ホームステイをして現地の高校に通学する高校交換留学は、参加生徒に大きな変化をもたらすが、留学中のどのような体験が帰国後にどのような影響を与えるのかという詳細は不明である。本研究は、特に高校卒業後の進路選択への影響に注目し、高校交換留学体験者が進学先の大学を決めるプロセスを明らかにする。高校交換留学を体験した大学生 21 名に聞き取り調査を行い、M-GTA で分析した。その結果、留学体験者は留学中の衝撃的なできごとや自分の関心に向き合う体験によって、「なりたい自分」を意識化し、留学由来の自信や視野の広がりにも後押しされて、特定の進路を希望するが、そのまま突き進むのではなく、親や高校の教員、先輩の話に耳を傾けて、長期的視点でその進路が適切であることを確かめたうえで、ベストと思える進学先を決めていくことがわかった。このプロセスは、進路指導に当たる教員が留学体験者を指導する際の手がかりになる。

No118 しびれている身体における「治る—治らない」という意味の発生と更新

坂井志織 首都大学東京人間健康科学研究科

病者にとって、病気や症状が治るのかどうかは、重要な関心事である。他方で、医学的には個々の患者の経験に先立って、治るもの・治らないものという分類が既に確立されている。その分類に従うと、しびれは治らないものであり、症状が固定するとされている。だが、患者らは「しびれが治らない」「ひどくなった」と何年経っても訴え続け、医療者はその対応に難しさを感じている。

本発表では、しびれている身体に着目し、どのように「治る—治らない」という意味が発生しているのかを記述することが目的である。参加者は、しびれを経験している患者 4 名で、調査は、約 2 年間のフィールドワークを基に現象学的に分析した。

回復期という時期や退院という制度的な時間の区切りが、症状に意味を持たせ、その意味がさらに時間に新しい意味を与えていた。また、生活の拡大により多様な物との接触が生じ、一時的にしびれがひどくなったように感じる可能性が示唆された。

No119 複線径路・等至性モデル (TEM) の保育カンファレンスでの活用に向けた検討
若手保育者へのアンケート調査から

境愛一郎 宮城学院女子大学 中坪史典 (広島大学大学院)

複線径路・等至性モデル (TEM) とは、対象者の経験のプロセスを、時間を捨象せずに描出する質的研究の方法論である (安田・サトウ編, 2012)。近年、この方法論を、保育者が協働で子どもや実践に対する理解を深めるための機会である保育カンファレンスに応用することで、保育者の視点の転換や視野の拡大を促そうとする試みが散見される (香曾我部, 2015; 保木井・境・濱名・中坪, 2016)。これらの研究では、その有効性が様々な指摘されているものの、あくまで 1 施設 1 集団での試みの分析に留まり、多様な現場の状況などを考慮した上で、TEM を応用することの意義と課題を見極めるには至っていない。

本研究では、施設横断的な研修大会で、TEM を用いた事例分析を体験した若手保育者らに、分析の感想や自園での活用可能性について自由記述形式で訪ねるアンケートを実施し、その回答を KJ 法によって分析することで、実際の保育カンファレンスで TEM の活用するための方途を探る。

No120 障がいのある子どもの家族のレジリエンス

渡邊照美 佛教大学教育学部 菅原伸康 (関西学院大学教育学部)

近年、人間の持つ精神的な回復力を表すレジリエンスという概念が注目されている。レジリエンスの定義は明確には統一されていないが、基本的にはストレスフルな出来事や状況の中でも潰れることなく適応し、また、精神的な傷つきから立ち直ることのできる個人の力を指す場合が多い (平野, 2015)。

本研究では、まず障がいのある子どものいる家族のレジリエンス研究について概観し、どのような概念として捉えるのかを整理する。その上で、障がいのある子どもの家族 (親、きょうだい) を対象にし、障がいのある子どもを育てたり、共に生活したりすることによるレジリエンスを明らかにする。方法としては、半構造化面接を実施し、語りの分析を行う。障がいのある子どもの家族のレジリエンスを明らかにすることと共に、レジリエンスを高める効果的な介入について報告予定である。

24日(土) 10:00～11:30【ポスター発表1】

No121 **地域定住外国人支援者の学習支援に対する中学校教員の意識—国際教室における母語を活用した教科学習支援の取り組みから—**

高梨宏子 東海大学

外国につながるのある子ども(以下、子ども)の日本語習得や学校での学習の遅れが目目され、学校や地域において学習支援が行われている。他方で子どもは日本語優先の学習観により母語を喪失する可能性がある。こうした課題から母語と日本語を用いて教科学習に取り組む研究や事例が報告されている。学校での取り組みでは、地域に定住する外国人主婦などが支援者として参加している。こうした地域に定住する外国人が子どもたちの学習を支えることは学校にどのような影響を与えるのだろうか。

本研究では、地域定住外国人である母語支援者が子どもの学習に関わることを教員がどのように捉えるのか明らかにすることを目的とする。母語支援者との協働的支援を始めた教員への半構造化インタビューの結果、支援記録の記述をもとに、取り組みの意義と課題を考察する。

No122 **精神障害の子どもをもつ父親が役割再構築する過程—家族心理教育参加を通して—**

田中俊明 滋賀県立大学院生活文化学学部長 松嶋秀明(滋賀県立大学大学院) 間関係論研究科

近年、精神障害の子どもをもつ家族の現状において、家族の中心的役割多いと推測する父親の治療参加が、重要であるとされている。しかし、現状は妻任せになる現状の報告もあり、父親のケア場面の撤退は、母親の負担は増大になることは明らかである。父親は、突然の発病に受け入れがたい葛藤があり、今まで構築していた父親の認識が一気に崩れてしまい、戸惑いを感じていると推測される。戸惑いを感じて仕事に専念していたが、子どもの対応に疲弊している妻の姿を見て支えることの必要さを認識し、何か手立てを講じる決意をする。父親は、精神障害の子ども特に、統合失調症の発病が青年期に多いことから、父親の第1子になる年齢32歳(厚生労働省人口動態調査;2010)。であることを想定すると、50代にして始めて障害の子どもとなる。さらに、生涯発達での中年期に該当する父親が、青年以上になった子どもと向き合うのに戸惑いがある。しかし、精神障害のなかでも統合失調症は慢性化しやすく、長期的な経過のなかで家族の協力が必須となることが予測される。このように、困難で長期にわたる子育てや支援は母親だけでは無理であり、父親の支えが重要である。子育てをする母の大変さに対する察知、子への愛情を妻と共有することなど、人間ならではの心理機能が、男性に「親をする」ことを推進させると言っている(柏木ら;2011)。今回父親は、妻の疲弊する姿を見て妻をも掴む思いで心理教育に参加し、グループセッションの場で、気づきを通して認識変容が見られ、父親が変化することで、妻との一致した思いが未来への希望となることが、共有できた。また、父親は30代で子どもができ初めて父親となり、中年期になって障害の子どもをもつ父親になる。しかし、子どもが統合失調症に発病したことを医師から説明されるが、受容できずに、仕事にかこつけて逃避していた。しかし、妻の疲弊する姿を見て、「父親になる」から「父親をする」と認識変容がみられた。父親にとっての認識変容する要因には、妻の影響が大きく相互の影響が要因となっていることが、示唆された。

No123 **グレーゾーンに近い自閉症スペクトラム児の母親が“子ども理解”を深めるプロセスの検討**

金子なおみ 川村学園女子大学

【問題】発達障害児の支援を包括的かつ効果的に行うためには、養育者の“子ども理解”の段階が大きくなる。いわゆるグレーゾーンに近い自閉症スペクトラム児は健常児との差異が明確でないことが少なくない。養育者はどのように“子ども理解”を深めるのか。本研究の目的は、そのプロセスを検討することとした。【方法】就学1年後にアスペルガー症候群と診断された子の母親1人に半構造化面接を行い、質的研究法を用いてデータを分析した。【結果と考察】母親は「学校との齟齬」から「できる子」という期待「できないとき」の要因の探索を繰り返しつつ、「ポジティブな体験」が支えとなり「子の教育的ニーズ」を確立させていた。我が子に多様な指導方法を体験させるなかで出会う「ポジティブな体験」は、砂漠で宝石を発見するような喜びであり、その体験が“子ども理解”に大きく影響していることが示唆された。

No124 **ガラス工芸の技術の復活から捉える物語の引き継ぎ方—世代の越境を通じたイノベーションとその仕組み**

竹内一真 多摩大学グローバルスタディーズ 学部

近年、各地で伝統工芸の技芸が失われている。一方で技芸を復活させ、興隆を極めていく技芸も存在する。本発表では地域に伝わるガラス工芸を復活させた長崎、鹿児島、萩、仙台の四つの地域を対象として、現代社会における技芸の復活プロセスを明らかにした。特にイノベーションという点に焦点を当て、ライフストーリーインタビューを行った。その結果、2つの点が明らかになった。一つ目が物語を単純に復活の際の源として利用するという黒子としての機能だけでなく、物語自身を商品の一部として利用する「商品としての物語利用」という点である。二つ目が「自身の経験の物語への組み込み」という点で、復活を行う際に技術者自身のキャリアで築き上げてきた経験を途絶えた物語に組み込むことで創発を産むという点である。これら二点を通じて、過去に廃れてしまったような技芸であったとしても現在に価値あるものとして蘇られせることを可能にしているのである。

24日(土) 10:00～11:30【ポスター発表1】

No125 **認知症高齢者の体験性の質的变化：日記の縦断的分析**

田中元基 東京都健康長寿医療センター研究 大橋靖史 (淑徳大学総合福祉学部)
所社会参加と地域保健研究チーム

本発表では、認知症高齢者の日常的な体験性の変化に着目する。これまでの、認知症高齢者の体験性に着目した研究は、認知症になった時点から振り返った体験が中心的に扱われ、縦断的な変化について詳細な検討が行われることは少なかった。本発表では、認知症高齢者の縦断的な体験の変化を検討するため、アルツハイマー型認知症と診断された1人の女性が、診断以前から書き続けてきた約20年分の日記を対象に、ドキュメント分析を行った。その結果、時間体験(日記初期は、去年や来年といった範囲での比較を行っていたが、後期になると昨日と明日の範囲で比較する記述のみになってくる等)、関係性における自分自身の位置づけといった体験性の質的变化が生じていた。一方で、自分の身体の痛みなどに関する体験は、初期から後期まで大きく変化せずに記述されるといった特徴も見出された。

No126 **オートエスノグラフィーによるキャリアの「語り」の可能性
－「転機」と「自己物語」の視点から－**

土元哲平 鹿児島大学教育学研究科

「転機」とは、その人の人生における転換点であり、「自己物語」を書き換える契機となるような出来事である。本発表では、特にキャリア上の転機に焦点を当て、その経験をオートエスノグラフィーという研究手法を通して「語る」ことの可能性について論考する。

まず、転機についての、キャリア論およびライフコース論における研究動向を整理する。その上で、転機を「物語」として捉えることの意義がどのような点に見出され得るかを検討する。

次に、オートエスノグラフィーの理論的な展開について整理する。そして、「転機の物語」としてのオートエスノグラフィーが、自己物語でもあるという視点から、その物語が「読み手」へ及ぼす内省的・対話的な効果について考察する。

以上の論考の結果、オートエスノグラフィーによるキャリアの「語り」には、対話的・内省的なキャリア構築の可能性が見出されることを今後の研究深化の方向性として提示する。

No127 **日本の外で震災を経験するということ
－阪神・淡路大震災および東日本大震災に関する手記を通じて－**

栗本綾子 北海道大学大学院教育学院

災害が襲うとき、その中心部には最も注目が集まるが、中心からの距離が遠くなればなるほど、向けられる視線は徐々に弱くなる。外務省の調査によると、阪神・淡路大震災発生当時は70万人、東日本大震災発生当時では100万人を超える日本人が日本の外にいた。しかし、彼らの震災経験を扱った研究は少なく、国境という物理的境界によって隔たれた周縁の声が聞かれることはこれまでほとんどなかった。

本発表では、これまでに出版された手記を通して、震災発生当時、日本国外にいた日本人が震災をどのように経験したのかを検討する。震災体験記を綴る彼らは、日本で起きた震災を「誰」として見聞きし、その経験を語るのか。分析において、彼らは日本の外にいても間接的に震災を「経験する」が、日本の外にいるために震災を「経験しない」という2つの側面に注目する。また、本研究においては、震災体験の分析手法として、テキストマイニングの可能性も探る。

No128 **NIPT(無侵襲的出生前遺伝学的検査) 受検の経験についてのインタビュー調査**

山本佳世乃 岩手医科大学 福島明宗

【背景】NIPTでは母体血中の胎児由来DNA量を測定し、3種の染色体異常症について胎児が罹患する可能性を確率的に算定する。本研究では、NIPTの受検経験を構成している要素を探索した。【対象方法】陰性結果の妊婦3名。解釈学的ライフストーリーインタビューを実施。1) 共通要素、2) 聞き手・語り手関係、3) 社会との関わりを解析基本軸とした。【結果考察】1) 「お金」・「検査の時期」への言及が共通していた。「金額は高いが安心には変えられない」、「受検時には胎児を実感しづらい」、「結果が出てくる時期になって、陽性だったらその後の選択をできたか自信がない」との発言があった。2) 「役に立つこと言わなければ」、「改善してほしいところを言いたい」という意識をもってインタビューに臨んでいる語り手もいた。3) 血縁者・友人といった「人」から影響を受けている例とインターネット情報から影響を受けている例とがあった。

24日(土) 10:00～11:30【ポスター発表1】

No129 **対人場面のプロセスレコードを用いたオートエスノグラフィーにおける分析方法に関する検討**

大河内敦子 帝京大学医療技術学部看護学科 杉本明子 (明星大学教育学部教育学科)

看護系大学の精神看護学実習担当教員である筆者は、自身の教育観獲得を目的として、精神看護学実習の教育現場で自身が捉えた事象とそれに対する思考と態度について、オートエスノグラフィーでの分析を試みた。

データには、筆者自身の対人場面におけるプロセスレコードを用いた。

オートエスノグラフィーは、「確立された方法論が見当たらない」とも言われ、本研究においても分析方法の案出が課題となったが、プロセスレコードによるデータの記述、そして記述後のデータを「プロット (=筋立て)」と呼ぶひとつの意味を持つまとまりに分け、更にカテゴリー化するという3つの手法と時間的段階を経たことは、自己が自己を分析する場合において、データのもつ意味を崩さず且つ客観的に対象化するための一方策であったものとする。

本研究を経て、オートエスノグラフィーにおける汎用性のある分析方法としての示唆を得たので報告をする。

No130 **「ピア・レスポンスにおける日本語母語話者と日本語学習者の差異」パイロット調査報告**

石毛順子 国際教養大学

本研究は「ピア・レスポンス (以下 PR) における日本語母語話者と日本語学習者の差異」のパイロット調査として、中上級の日本語学習者の授業での PR をビデオで記録した。PR は12回の授業のうち5回目・8回目・10回目・12回目で行われ、10回目と12回目の授業を記録し、12回目終了後 PR で困ったことやアドバイスがしにくかったことを尋ねた。その結果、参加者 M から「評価基準を十分に理解できていなかったためコメントができなかった」「自分の意見を表す文型を最初の授業の時に少し教えたほうが良い」という回答が得られた。実際、M は3人グループでの PR において、作文の内容を発展させるような会話には積極的に参加していたが、作文の構成などに対するコメントはほとんどしていなかった。今後の本調査では前者の回答は日本語学習者・日本語母語話者ともに見られる可能性があるが、後者の回答は日本語学習者のみに見られると推測される。

No131 **心理学を学ぶ学生がもつ精神障害者への偏見についての考察 —理論モデルの生成—**

宇野澤遼一 淑徳大学大学院

精神障害者にとって、自他による精神疾患への偏見は大きな問題の一つである。精神障害者への偏見は彼らと関わる専門家においても確認されているが、このことを踏まえると専門知識を得る段階である学生においても精神障害者への偏見は示されるであろう。本研究では大学生を対象に精神障害者への偏見及びその偏見を取り巻く心理的プロセスについての理論モデルを生成することを目的とする。

本研究では精神医学関連領域として心理学を学ぶ大学生3名へのインタビューを行い、得られたデータはGTA法を用いて分析を行った。その結果、最終的に10個の大カテゴリーが生成され、それを用いてモデル図を作成した。

理論モデルによれば、一定の知識を持っている本研究の参加者においても一般的な偏見は示されていたが、専門的な学びを持つことからその偏見への対処も同時に考察していた。このことから深い専門知識は偏見への対処としてその一助に成り得ると考えられる。

No132 **発達障害の障害受容における課題 —支援者へのインタビューから—**

中村恵子 新潟青陵大学

学校や発達障害者支援センター、地域若者サポートステーション、保健所、NPO法人等、様々な機関において発達障害者支援がなされている。しかしながら、発達障害であることに気づかず、青年期、成人期になって診断される場合も少なくない。また、自分の障害に気づく以上に、障害を受容することは困難なことである。

本研究では、発達障害の障害受容における課題を明らかにし、支援の在り方について考察するために、支援者10名(幼稚園園長、通級学級担任、発達支援員、就労支援員、保健師、臨床心理士、SSW、NPO法人代表)に半構造化面接を行い、逐語録をKJ法を用いて分析した。その結果、本人や保護者の困り感のなさ、思春期の問題、早期発見の難しさなどの課題に加え、つながらない診断と支援、一貫しない支援、敷居の高さ、支援者の意識の違いといった学校や関係機関の連携不足も課題として挙げられた。

24日(土) 10:00～11:30【ポスター発表1】

No133 **日本人ホストは在日ムスリム留学生とどのように関わりを築いていくのか？
－異文化接触場面における交流の工夫**

中野祥子 岡山大学大学院社会文化科学研究科 田中共子 (岡山大学大学院社会文化科学研究科)

在日ムスリム留学生と交流を持つ日本人6名に半構造化面接を行い、交流時における違和感や戸惑いを聞いた上で、そのような彼らと関係を形成・維持するための工夫に何があるか尋ねた。質的内容分析を行った結果、今回のホストたちは、ムスリム留学生をイスラム教徒として過度に意識せず、留学生あるいは個人と捉えて関わりをもっていた。だが、相手の宗教的ニーズを確認し、最低限の配慮することを、付き合いの要領と心得ていた。ハラール食品を使った料理を作ったり、豚や酒を抜いたメニューを出してもらえるよう前もって店に連絡したりしていた。宗教規範の差に基づく戸惑いは頻繁に経験されていた。悩みを相談した時には、神からの試練と捉えることを勧められたり、死後の世界観を用いた励ましをされたり、礼拝中の待機の仕方に戸惑いを抱いたりしていた。宗教規範の差に戸惑いや違和感を感じつつも、相手の信仰を尊重し、過度に干渉しないよう努めていた。

No134 **医療的ケアを要する在宅療養児を持つ母親が避難先を確保するまでのプロセス**

松下聖子 公立大学法人名桜大学

医療的ケアを要する在宅療養児を持つ母親が、台風や災害に備え、どのようにして避難先を確保したのかということ明らかにするため、半構造化面接を実施し、質的統合法(KJ法)で分析した。その結果、「命を脅かす不安」を抱えながら「避難先の確保」を試みるが、なかなか「進まない避難先の確保」に「個人による限界」を感じていた。しかし、「日頃の取り組み」として「日常生活の中で非常時の対応確認」や「自ら動き、訴え、人々を巻き込み」避難先を探し続けた結果、「理想の避難先と人々の支え」を得て、「安心・安全の確保」ができた。しかし、一般的には「災害対策への取り組み」として、各々の自助意識の低さをあげ「自助強化への意識改革」をあげていた。以上のことから、災害時要支援者として公的支援を求めながらも、当事者として自助力を強化していくことが課題であることがわかった。そして、そのための教育の必要性が示唆された。

No135 **工学部学生の英語学習動機の類型**

斎藤明宏 八戸工業大学

発表者の勤務校において工学を専門とする大学生は、外国語学習に対する苦手意識や無関心を持つ傾向が観察される。そうした中でも、彼らの中には必修ではない選択科目としての英語を進んで履修する者もいる。このような学習者はどのような動機で、必修ではない選択の英語科目を履修するに至るのだろうか。2年次開講の選択の英語科目を履修する12名の学生に、半構造化インタビューを行った。調査では、任意選択である英語科目を履修するという行動とその動機を、彼らの個人史と学習歴というコンテキストで焦点を当てた。彼らの学習歴、英語を選択するに至った動機、また、学習への取り組み方と学習方略に認められる個人の動機の特徴を中心に予備分析を報告する。

No136 **Xジェンダー・アイデンティティの語り直し**

山田苑幹 名古屋大学大学院教育発達科学研究科

GID(性同一性障害)が社会的な注目を集める中、DSMでは第5版への改訂に伴い、GIDはGD(性別違和)へと変更された。この背景として、男女のいずれかというわけではないジェンダー・アイデンティティを持つ人々(Xジェンダーの人々)の存在が認められるようになってきたことが挙げられる。しかし、GID当事者の語り研究が盛んに行われ、その主観的体験を明らかにしていこうという流れがあるのに対して、Xジェンダーをとりあげた研究はほとんどなされておらず、一時点における少数の語り研究に留まっている現状がある。そこで、本研究では、Xジェンダーを自称する1名に対して、月に1度、計3回の非構造化面接を行い、得られたデータをディスコース分析によって検討した。その結果から、Xジェンダー当事者が自身のアイデンティティを繰り返し語り直していく中で、それをいかに捉え直し、意味づけていくかのプロセスを描き出した。

24日(土) 10:00～11:30【ポスター発表1】

No137 **ピアジェの発生的認識論のスピノザ的解体—(3) ベルクソンによる意味の身体性批判**

小島康次 北海学園大学

ピアジェの発生的認識論に関する一連の理論的考察(「ピアジェの発生的認識論のスピノザ的解体」)に関する第3弾。日心第79回大会において「(1) 生命的なものから論理的なものへ」、日教心第56回総会において「(2) ベルクソンの二元論をめぐる諸問題」として発表した内容をさらに、「(3) ベルクソンによる意味の身体性批判」として展開したものである。発生的認識論において子どもが如何にして意味の世界を立ち上げるのかに関する「もう一つの可能性」すなわちベルクソンの哲学と出会っていた場合のピアジェ理論における意味の発達について論じる。ベルクソンによれば、人が言葉を聞き意味を理解する過程は、シエマのような論理的構成要素を積み重ねていくことによるのではなく、意味の領域に一気に身を置くことだという。つまり、意味は記憶の一水準として存在するのではなく、潜在的な「意味」の領域にある超越性においてその存在を担保されている。

No138 **共同想起／個人想起の実施順が記憶高進に及ぼす影響**

郡司史穂 淑徳大学大学院

記憶高進とは、再学習の機会なしにテストを繰り返した時に記憶パフォーマンスの向上を示す現象である。本研究では研究計画者を4組のペアに分け、2組は個人想起→共同想起の順で、残りの2組は共同想起→個人想起の順で詩を想起する実験を行い、記憶高進が起こるかどうかについて検討した。

その結果、個人想起→共同想起群では、共同想起場面において個人想起場面で各人が語った内容に加え、新たな事柄についても語られ内容が豊かになっていた。一方、共同想起→個人想起群では、いずれの想起場面においても同じ内容を話している場面が多くみられた。

したがって、共同想起→個人想起群では個人想起場面で語られる内容は、共同想起場面とほぼ同じ内容であったため、記憶高進は生じていなかった。一方、個人想起→共同想起群では、個人想起では想起されなかったことも共同想起では互いに補い合って想起することができていたため、記憶高進が生じていたといえる。

No139 **同級生の大学生と社会人の再会場面における「自己の変化」に関する談話特性—参加者のポジショニングに着目した検討—**

阿部廣二 早稲田大学大学院人間科学研究科 古山宣洋(早稲田大学人間科学学術院)

同級生の大学生と社会人の再会場面に着目し、大学生の「自己の変化」が相互行為のなかでどのように取り扱われるのかを検討した。同級生の大学生と社会人3名に自由に会話してもらい、その様子を録画した。データはすべて文字起こし、現在の自己が語られている場面に対し、ポジショニング(Harre, 1998)の観点から分析を行った。その結果、第一に社会人が苦労体験語りを通して特権的な「社会人ポジション」にポジショニングすること、第二に大学生がセカンドストーリー(Sacks, 1992)として大学での苦労体験を語り、「大学生ポジション」を社会人ポジションに近づけること、第三に社会人が大学生の苦労体験を自らの体験と相対的に「大変なものではない」と位置づけ、社会人ポジションの特権性を維持していることが明らかとなった。以上の結果に対し、大学生という立場の不安定性や特殊性の観点から考察を行った。

No140 **質的研究の意義から見る読み手の位置付け—個人の経験の意味付けや解釈を探求する研究を対象に—**

伊藤翼斗 京都工芸繊維大学 大河内瞳(関西学院大学)
香月裕介(神戸学院大学)

個人の経験の意味付けや解釈を探求することを目的とした研究においては、その個別性を越えてどのような意義が提示されるのであろうか。本発表では、そのような目的を持った質的研究の意義を検討した。具体的には、本学会の学会誌二種に掲載されている論文から該当する研究を選び、そこから意義が記述されている部分を抽出、分類した。その結果、【先行する理論に貢献するという意義】と【読み手の気づきや経験の機会を提供するという意義】の二つに大別された。前者には「既存の理論・概念を反証する事例を提示する意義」や「既存の理論・概念を実証する事例を提示する意義」などが含まれ、後者には「読み手が研究結果を自身の経験に繋ぐことを可能にする意義」や「読み手の追体験を可能にする意義」などが見られた。この結果を踏まえ、上述のような質的研究において読み手はどのように位置付けられるべきかを考察し、論じる。

24日(土) 10:00～11:30【ポスター発表1】

No141 **Career & Identity Work** による大学生のキャリア発達分析
～TEAとDS理論を融合させて～

番田清美

産業能率大学准教授

上淵寿(東京学芸大学)

大学生が社会人生活に移行する間のキャリア発達プロセスを、開発中の「キャリア&アイデンティティ・ワーク」を用いて可視化し分析する。「複線径路等至性アプローチ」(Trajectory Equifinality Approach: TEA)と「対話的自己理論」(Dialogical Self Theory: DS理論)を融合させることにより、新たな分析を試みる。

自己研究では、James (1890)によって主体としてのIが客体Meを捉える様相が示されてきたが、Hermans (1993)はこれをHarre (1991)のポジショニング理論を基に発展させ対話的自己理論を提唱した。Hermansは、主体は複数のアイポジションを持ち、二つ以上のアイポジションが葛藤を起し調整を行うと考え、人々はポジショニングした自己内対話によって自己世界を構成しているとした。そこで、キャリア選択の分岐点における学生の葛藤を、アイポジションを用いて描くことにより、キャリア発達の分析を試みる。

25日(日) 13:30～15:00【ポスター発表 2】

No201 **性的／人種的少数者の語りに見る立ち位置の交渉
－多層的排除の表出と構築としてのディスコースを分析する－**

木場安莉沙 大阪大学言語文化研究科

本研究は人種的且つ性的少数者である人々の語りに着目し、彼ら／彼女らの困難を明らかにするとともに、その困難についてディスコースによって交渉する過程を、ナラティブ分析による質的研究から明らかにすることを目的とする。

国内の先行研究では、人種的属性や性的属性を個別に焦点化したものは見られる一方、それらを包括的に扱ったものは管見の限り見あたらない。しかし、人種的・性的属性が同じであっても、その交渉プロセスおよび社会的状況が同一であるとは限らず、注意深い観察と分析による複合的属性への着目が必要とされている(上野1996)。

本発表では、日本で生活する人種的且つ性的少数者への半構造化インタビューデータを取り上げる。分析から、多様なディスコースに対する立ち位置が様々な展開される過程が見られた。発表では、語りの場におけるこのような立ち位置の構築的側面と、語り手が用いるディスコースとの関連性について示したい。

No202 **複数の支援員が共に児童理解を構築するプロセスに関する一考察
－通常学級で特別支援教育に携わる支援員の事例から－**

黒住早紀子 駒澤大学総合教育研究部

本研究は、小学校通常学級に在籍する知的障害のある児童への支援に携わる複数の支援員の支援活動を扱ったものである。単独で支援活動に携わる支援員は、他の支援員と会う機会が得られず困り感を抱くことがある。そこで本研究では、支援活動について話し合う機会を得た支援員が、どのように児童理解を深めていくかというリサーチクエスチョンを設定した。分析対象は、児童Aにかかわる2人の支援員によるミーティングの録音記録である。ミーティングは、2008年11月から3月の間に計4回実施した。カテゴリーの生成を通じた分析の結果、支援員の話し合いの過程では、①支援対象児の過去と現在、②他児童と支援対象児、③支援員それぞれの支援方法等、いくつかの比較が行なわれていることが見えてきた。このことから、支援員が児童理解を深めるプロセスには「比較」が関係する可能性があることが示唆された。

No203 **高校生の語りにもみる健常児の知的障害理解の過程 ー交流経験の語りの解釈学的現象学的分析からー**

楠見友輔 東京大学教育学研究科

健常高校生と知的障害中学生の2年間の学校間交流を映像として記録し、1名の男子高校生(A)の2年間の交流の様子を分析した。その結果、1年目には障害児との個別的な関わりが少なく緊張した様子で交流会に参加していたAは、2年目に知的障害児と手を繋いだり積極的に話したりしていた。Aに対して1年目と2年目の交流会終了後に経験を聞くインタビューを行い、その記録の解釈学的現象学的分析を行った。分析の結果、1年目にAは〈障害を肯定的に捉える〉意識は持っていたが〈集団依存的な関わり〉になったことが自覚され、その反省から〈自分が楽しむ〉という目標が見出された。2年目にはAは〈積極的感情〉を抱き〈個人としての関わり〉を意識的に行った。その結果、1年目より〈反省〉の語りは少なくなり、〈改善点の提示〉や〈深い反省〉が多く語られた。2年間の交流後のAの発話からは、〈理解をプロセスとして捉える〉という学びが見られた。

No204 **ゲームの種類についての分類と種類ごとの特徴の検討**

古賀佳樹 中京大学心理学研究科 川島大輔(中京大学心理学部)

近年ゲーム使用に関する問題が心理学の分野においても注目されるようになってきている。DSM-Vにおいても、“インターネットゲーム障害”が指摘されており、国内外で研究が蓄積されつつある。しかし、好まれるゲームの種類が国ごとに異なるとする報告があるにもかかわらず、種類ごとの影響や分類についての研究は少ない。そこで本研究では、大学生302名に対して質問紙調査を行い、もっとも頻度の多いゲームの種類について自由記述での回答を求めた。回答の得られた156名分のデータを今回の分析に用いた。自由記述回答すべてをカード化し、類似した内容ごとに分類した結果、“対戦”、“音楽”、“ランキング”、“RPG”、“アドベンチャー”、“アクション”、“その他”の8つのカテゴリーに分類された。さらに8つのカテゴリーを用いて、ゲーム依存度(GAS7-J)、使用時間、攻撃性などとの関連について検討した。

25日(日) 13:30～15:00【ポスター発表2】

No205 **児童の従い易さを考慮した教師のポジショニング
—指示・注意のための発話表現に対する会話分析から—**

川島哲 東京大学大学院教育学研究科教育
心理学コース

教室談話を分析するため、ポライトネス理論(Brown & Levinson, 1987)を用いた研究が行われている(山下, 2014; Kerksen-Griep, 2001)。理論で提唱された、聞き手の基本的心理欲求に配慮する発話方法であるポライトネス・ストラテジー(以下、PS)について、山下は第二言語教室における使用を確認したものの、川島(2014)はPSでは扱えない、小学校の教室独自の配慮を示した。

そこで、教室談話にPSを応用したカテゴリー分析と、その際に分類された事例に対する質的な分析を行うことで、個々のPSにおいて教師が児童の欲求に配慮するために、自身の立ち位置をどのように変化させているのかを検討した。

結果、PSに含まれるストラテジーは、促す行為の負担を小さく示すこと、教師と児童の社会的距離を近く示すことに加えて、教師の権威に関する3種類の操作(権威を隠すこと/力関係で教師が下にいること示すこと/「行為としての権威」(川島, 2011)を示すこと)によって、児童の欲求に配慮する発話を行っていたことが明らかになった。

No206 **セクシュアルマイノリティの受容体験についての探索的研究**

鳥越淳一 開智国際大学 安田和喜(開智国際大学人間心理学科)

本研究は、セクシュアルマイノリティの当事者がどのような「生きづらさ」を抱え、どのような過程をへることで、ストレートの人たちに受容されたという体験に至るのかというプロセスを模索することを目的としている。

セクシュアルマイノリティの受容に関する主観的体験を研究テーマとし、都内の大学(複数)のLGBTサークルに所属している学生に対して、セクシュアルマイノリティ当事者としての「生きづらさ」に焦点を当てた半構造化面接を行った(e.g. 自分のセクシュアリティについてどの様に考えたか、カミングアウトした経験の有無とその理由についてなど)。性的指向に関して同じような境遇を共有できる居場所を持っているセクシュアルマイノリティの大学生がどのような生きづらさを、どのように抱え、それらがどのように「ストレートの人に受容された」という体験へ発展していくのかというプロセスをM-GTAを用いて理論化していく。

No207 **保護者にとって乳幼児期の発達相談はどういう体験なのか?**

岸本栄嗣 京都造形芸術大学/京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程

自治体による子どもの発達支援システムにおいては、心理職による子どもの発達状態の把握とともに保護者への発達相談が行われる。この発達相談は保護者への支援という側面があるが、当の保護者にとってそれがどのような体験となり、また影響を及ぼしているのかについては明らかにされていない。本研究では、乳幼児期の発達相談について保護者の側から捉え直すことを目的とし、保護者の主観的体験を重視し「発達相談とは何なのか」について検討する。本報告では、語り合い法を用いたAさんへの調査の分析について経過を報告する。

No208 **教育実習を経験した学生の進路認識の過程と時間的展望
—TEMによる経験と進路認識変化の可視化—**

有村勇紀 横浜国立大学大学院教育学研究科 有元典文(横浜国立大学)
心理学領域

教育実習経験は教員養成課程の学生にとって進路選択の重要な契機となる経験である。このため、多くの教員養成に携わる研究者らによって教育実習が学生に与える影響に関する研究が行われている。

しかし、その多くが個々の学生の教育実習経験を同質のものとして捉え進路認識の変化に与える一変数として捉えており、個々の教育実習経験そのものの多様性や過程が描かれていないように思われる。また、教育実習経験を変数として学生の実習前後の変化を測定し論じているものが多いが、人間にとってその経験が重要なものであるほど、経験から時間が経っても人生において影響を持つと考えられる。このような問題意識から、教育実習経験の多様性と過程、及び教育実習経験が終了して以降の学生の進路認識の変化に着目し、TEMによる分析と時間的展望の観点から検討を行った。

25日(日) 13:30～15:00【ポスター発表 2】

No209 **子ども同士のスキュグルにおける情緒的な体験の考察**
—言葉のない状況をもたらすものについて—

小林規江 明治大学大学院

箱庭療法や描画技法と言った非言語的な技法の多くは、クライアントに表現をしてもらい、それをセラピストが見守り・味わうことが求められる。しかし、イギリスの子どもたちの伝統的な遊びに着想を得て開発されたスキュグルという相互描画技法は、クライアントと共にセラピストも描画を行う過程である。多くの非言語的な技法で求められる姿勢とスキュグルでの過程の差異は、非言語的なコミュニケーションの仕方によるものと思われる。

小学校6年生の道徳の授業で、子ども同士がペアとなり、言葉を発しないという条件下でスキュグルをしてもらい、参与観察を行う調査を実施した。その際、線を描いている時あるいは表現している時、そして仕上がった表現を見た時、の3点でどのような気持ちになったかを自由記述で求めた。本研究では、言葉のない状況が描画上のコミュニケーションにおいて心理的にどのような体験をもたらすのか、について質的分析を行った。

No210 **代替コミュニケーション支援に関する ALS 患者の家族の思い**

鈴木康子 埼玉県総合リハビリテーションセンター 星克司(埼玉県総合リハビリテーションセンター作業療法科)・河合俊宏(福祉工学担当)・岸典子((株)祥ファクトリ さかいりハ訪問看護ステーション・船橋)・平田樹伸(埼玉医科大学総合医療センターリハビリテーション科)・田島明子(聖隷クリストファー大学リハビリテーション学部)

ALSは病状の進行により人工呼吸器を装着し、声を失うことになるが多くのALS患者は、文字盤や重度障害者用意思伝達装置(以下、意思伝達装置)等の使用により、コミュニケーションを再確保する。ALS患者と共に生活している家族は、コミュニケーションについてどのように捉え、支援に関してどのように考えているのだろうか。家族の思いを明確にして支援の一助としたいと考えた。

対象者は、平成23～26年度に当センターで代替コミュニケーション支援にかかわったALS患者の家族5名に対し、意思伝達装置の導入時期を中心に支援についてのインタビュー調査を実施し、MGT-Aを参考にカテゴリー化した。

発症後のコミュニケーションに関わるカテゴリは6、サブカテゴリは49にそれぞれ分類された。意思伝達装置の適切な導入時期はいつなのか、それぞれの家族が考える時期についてインタビューから得られた知見を報告する。

No211 **助産師が〈触れる〉ことの意味における理論的考察**

鯨島輝美 京都光華女子大学健康科学部 西川みゆき(京都光華女子大学)

本研究の目的は、助産師と妊婦との相互行為の医療的・社会的意義を明らかにし、地域における母児・家族関係の育成支援に向けたケアモデルを提示することにある。今回は、その基盤整理として「助産師が妊婦に〈触れる〉ことの意味」を検討するための理論について検討する。助産師は、〈触れる〉技術を用いた妊婦健診に関わる場面において、非常に豊かな支援空間、実践共同体を作り出している。しかし、既存の医学・看護学的アプローチでは、相互行為としての助産師活動の医療的・社会的意義について十分議論してこなかった。そのため、従来の自然科学を基盤とした比較検討型研究において、可視化数値化に優れている超音波検査が重用されてきた。だが、いかに医療機器が発達したとしても、そこに関わる人々の実践は必要不可欠なものである。助産師が妊婦に〈触れる〉ことの意味を明示するために、状況論的アプローチの有用性を考察する。

No212 **TEM 図による英国在住日本人女性の心理的文化変容とキャリア選択プロセスの分析(3)**
—調査協力者Cのキャリアに焦点を当てて—

石盛真徳 追手門学院大学経営学部

国際結婚を機に日本での仕事を辞めて海外に移住した日本人女性が移住先の国で職業上のキャリア追求を志した場合、その個人は異文化でのストレスフルなライフイベントと遭遇しつつ、様々なキャリアバリアを乗り越える必要に迫られる。本研究では、国際結婚した協力者Cのキャリア選択プロセスを、TEM図に基づいて分析し、検討を行った。面接データは2007年と2012年に実施された半構造化面接により収集された。40代半ばの協力者Cは、日本と英国の両方で、就業と出産・子育ての経験を有している。現時点のキャリアについて協力者Cは、仕事よりも家庭での子育てを自分のメインのエリアとして捉えており、約5年継続している日系企業での現地採用職としての仕事にと満足していた。今後のキャリアアップについては、毎日が忙しいため積極的に探索しておらず、また40代に入って「キャリアアップという世代は終わっている」との認識であった。

25日(日) 13:30～15:00【ポスター発表 2】

No213 **新任小学校教師は経験をどのように語るのか — 継時的インタビューで繰り返し語られるテーマに注目して —**

曾山いづみ 東京大学大学院教育学研究科

新任小学校教師に対する計4回の継時的インタビューにおいて繰り返し語られるテーマを抽出し、省察的实践家概念、対話的自己概念を用いて分析した。繰り返し語られるテーマは「信念・思いを支える語り」、「葛藤の語り」、「再構成・統合の語り」のいずれかに分類され、それぞれ信念を支え確認する、違和感や葛藤を言葉にする、違和感や葛藤を解決する、という機能を有していた。これらの語りはインタビュー時期を経て変遷することもあれば同様の語りを繰り返す場合も見られたが、あるテーマについて繰り返し語ることは、自らの首尾一貫性を維持する働きと、自らの実践を振り返るためのフレームを形成する働きを担っていると考えられた。新任教師にとって、継時的インタビューの場は経験に区切りをつける機会であり、学校現場では語りにくいテーマも含めて語ることで、改めて自分のあり方について考え直すきっかけになっている可能性が示唆された。

No214 **東日本大震災における持続可能な復興とは何か ～茨城県大洗町の復興過程を例に～**

李勇昕 京都大学防災研究所 矢守克也 (京都大学防災研究所)

東日本大震災が発生して5年が経った。被災地における持続可能な復興の取り組みが求められるが、その実現は難しい。本研究は東日本大震災の被災地茨城県大洗町の事例から、この課題の現状や解決策を見出していきたい。大洗町にとって、震災がもたらした影響は、地震・津波による物理的な破壊、放射能汚染の実被害とマスメディアの風評被害報道などがあつた。震災直後、震災前から活躍してきた地元の団体、および震災後、復興支援のため結成されたボランティア団体が「元気な大洗町」の実現に貢献した。しかし、町の復旧が落ち着いて以降、これらの団体の課題は、一過性のイベントで終わらせるのではなく、いかに長期的に続けていくことができるのかである。本研究は、震災直後から2016年までを時系列で、大洗町の地域内および外部の団体における活動の目的、内容、資金源、その参加者などを整理した上で、持続的な取り組みの可能性について考察する。

No215 **「対人的嫌悪感情の生起プロセスに関する研究」**

小坂部沙希 淑徳大学

他者に対する肯定的あるいは否定的な感情に焦点を当て研究する分野は、対人魅力と呼ばれ、主に社会心理学において多様な研究がされてきたが、嫌悪感情についてはあまり注目されてこなかった。そのため、本研究においては他者に抱く嫌悪感情に焦点を当て、対人的嫌悪感情の生起するプロセスについて明らかにすることを目的とする。

大学生2名を対象とし、インタビューガイドを基にした半構造化面接を行い、グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。仮説モデルを生成するために、分析を基にモデル図を作成した。

対人的嫌悪感情の生起には、「心理的な負担による対人的ストレス」の発生と、「対人的ストレスの発生後に生じた友人関係との心理的葛藤」が影響を及ぼしていることが考えられた。また、友人による情緒的サポートの欠如や不満の蓄積が、対人的嫌悪感情の生起に関連している可能性が考えられた。

No216 **Brunerの「意味の行為」とは何であったか？
語りの「文脈」と行為の「脈絡」**

横山草介 自由学園 阿部廣二(早稲田大学大学院人間科学研究科)

Bruner (1990) の主張した「意味の行為 (acts of meaning)」とは、前提や常識の破綻として定義される混乱 (Trouble) の発生に対峙した精神が、その破綻を修復し、平静を取り戻そうとする「混乱と修復のダイナミズム」(横山, 2016) として理解することができる。この過程は、何らかの混乱 (Trouble) の発生に伴って生じた、今、この時点においては理解し難い出来事が、いずれ何らかの意味を獲得することによって理解可能になるような「可能性の脈絡希求の行為」として定義される。何らかの意味が落ち着き得るような「可能性の脈絡希求の行為」には、「語りの文脈」を生成する行為と、「行為の脈絡」を生成する行為との少なくとも二種類が考えられる。本発表では Bruner (1990) の「意味の行為」の方法論と、これまで質的心理学において用いられてきたナラティブ分析やディスコース分析などの具体的な分析方法との接続可能性について議論したい。

25日(日) 13:30～15:00【ポスター発表 2】

No217 **子どもとわかり合おうとする関係性を Parallel-TEM で描く試み
—保育者の子ども理解プロセスにおける可視化—**

上村晶 桜花学園大学

保育現場においては、保育者の子ども理解は実践を規定する出発点として重視されており、子どもとの相互関係の中でその子に対する理解は漸次的に変容・更新されていくと捉えられている。特に、初任・若手保育者は多様な出来事や社会的背景の影響を受けやすく、揺らぎが生じやすい、リアリティショックを受けやすいなどの現象が見受けられる。本発表では、保育者が1年を通して「子どもとわかり合おうとする関係を構築していくプロセス」に焦点を絞りながら、その転機や要因の分析を行う。その上で、相互主体的関係を重視して並行的に TEM を描くこと (Parallel-TEM) で見えてくる多層的な子ども理解の分岐点や要因を明らかにしていく。

No218 **絵本を手がかりとした日常的な出来事における自伝的推論モデル**

中園佐恵子 神戸大学大学院人間発達環境学研
究科人間発達専攻

近年、自己と記憶の関係における新たな概念として自伝的推論 (autobiographical reasoning) が提唱された (Habermas & Bluck, 2000)。自伝的推論は、自己と体験した出来事をつなぎ、自己を説明する物語を構成する働きである。先行研究では、自伝的推論の様々な働きが示されているが、その一貫した働きを示す研究はない。本研究は、自伝的推論の一貫した働きを示すモデルを構築することを目的とした。自伝的推論は、転機の記憶のような自己と結びつきの強い出来事から検討されることが多かったが、それでは自伝的推論の働きを過大評価する恐れがあるとの指摘がある (佐藤・清水, 2012)。そのため、日常的な出来事における自伝的推論を対象とした。本研究では、絵本を手がかりとした半構造化面接を行い、日常的な出来事における自伝的推論の働きのモデルを検討した。その結果、自伝的推論は自己を説明する物語全体ではなく、その中のテーマを通して働いていることが示唆された。

No219 **参与観察法における「データ」の成り立ちに関する考察 (第二報) —フィールドワークでの“見る／見える”についての現象学的思索**

細野知子 首都大学東京大学院

筆者は、慢性の病いの経験を探究する現象学的研究において、約1年間にわたるフィールドワーク (以下、FW) を実施してきた。それらの実践を書き起こしたフィールドノート (以下、FN) が素材の一つとなり、その分析を経て病いの経験を記述していくが、とりわけ、研究者が見たことを書く FN では、独自のスタイルとなりやすいがゆえに、読み手への現象の伝わり方が多様になることがある。そこで、本研究の第一報では FW と FN とのあいだに注目し、さまざまな志向性が働くなかで“見る／見える”が生起してくることを報告した。本稿では、その“見る／見える”の成り立ちについて、筆者の約1年間の研究活動を振り返り現象学的に考察する。そして、そのような素材が、探究する病いの経験にとってどのような意味をもつのかを検討する。

No220 **夢の内容と体験される感情に関する探索的検討**

野村信威 明治学院大学心理学部

夢の内容と夢を見ているときに感じた感情、日常場面で体験される感情との関連について探索的検討を試みた。首都圏の私立大学の大学生を対象に質問紙調査を依頼し、調査票が回収出来た 230 名を分析対象者とした。

対象者には最近見た夢の内容について自由記述で回答するようにもとめた。「あなたが憶えている範囲でもっとも最近見た夢について教えてください」という教示の上、3M社製のふせんへの記入をもとめた。その他に夢を見ているときの感情や夢を想起する頻度、日常場面で怒りの感情を経験する程度などを尋ねた。

報告された 191 名の夢の内容について KJ 法により分類を行った結果、友人の夢、非日常的な夢、日常的な夢、追いかける夢、遅刻の夢など 17 のカテゴリに分類された。

さらに夢の内容と睡眠時間との関連を検討するため、夢の内容のカテゴリを独立変数とする 1 要因分散分析を行ったところ有意傾向が認められ、追いかける夢を見た人は夢を憶えていない人よりも睡眠時間が長い傾向が認められた。

25日(日) 13:30 ~ 15:00 【ポスター発表 2】

No221 **Wolfpack Effect** における集団・意図の知覚に図形の指向性の強弱・有無が与える影響

山本敦 青山学院大学大学院社会情報学研究所

Wolfpack Effect (以下 WE) とは、指向性を持つ複数の図形が常に1つの図形を向いて動くとき、図形の動きが無作為であっても「意図を持った集団」が知覚される現象である (Gao, McCarthy & Scholl, 2010)。意図の知覚と指向性の関連の研究には Tremoulet & Feldman (2000) 等があるが、指向性の共有のみで意図と集団が知覚されるという点で WE は新しい知見を提示した。

ところで、Gao et al. (2010) では矢印図形のみが用いられており、指向性の強弱の検討はされていない。日常の経験を鑑みると、指向性の強弱が集団・意図の知覚の強さや質に影響する可能性は十分にあるといえる。また Gao et al. (2010) では知覚される意図として「攻撃」が挙げられていたが、無作為運動という映像の性質からより多様な意図の知覚が生じていた可能性が指摘できる。

そこで本研究では、図形の指向性の強弱・有無を操作し、集団・意図の知覚の強さ・質への影響を7件法尺度と自由記述を用い検討した。今回は自由記述の分析を中心に発表する。

No222 **経験の語りにおいて人称代名詞の差異がもたらす語りの諸相**

横山克貴 東京大学大学院教育学研究科

多くの言語に存在する「人称代名詞」は語りの中で自己や他者を指し示す。その際、自分自身を指す言葉として1人称代名詞(「私」「僕」等)が用いられるのが普通である。当然、自分自身を2人称代名詞や3人称代名詞を用いて語るというのは不自然であるが、こうした特異な人称の語りは経験から距離をとる視点を促すとして、一部の心理療法的介入に導入されている (Seih et al., 2008 ; Chang et al., 2013)。しかし、この人称の特異な語り方が、どのような語りを促すのかという基礎的な知見は少ない。本発表では、自分自身を2人称、3人称を用いることが、どのような語りの様相を生じさせるのかを探索的に明らかにする。具体的には、研究参加者に実際に自分自身を2人称や3人称を用いた語りを経験してもらった直後に得たインタビューデータから、想起体験や語りの体験において用いる人称代名詞の差異が語りのどのような面に影響を与えるかを議論する。

No223 **コミュニティスペースを拠点とした地域コミュニティの変容**

篠川知夏 東京都市大学大学院 小池星多 (東京都市大学)

都心の企業に務める一方で、自分の住むまちはベッドタウン化している地域が多いが、東京都の多摩地区では現在、自らの興味・関心を元にした地域ネットワークを構築し、そのネットワークの中で仕事をつくり出していく活動が盛んになりつつある。多摩地区への参与観察、また研究者自らコミュニティの中で役割を持ち、フィールドワークすることを通して、人々がどのようにネットワークを構築しているのか、そしてどのように仕事生み出しているのかを明らかにする。人々は、人同志がつながることを目的として自発的に構築したカフェやものづくりができる複数のコミュニティスペースを拠点として、水平的なネットワークを構築し、拠点にある設備や道具などを共同で使用しながら無償、有償活動を生み出し、自らを変容させることによって地域での新しい仕事や役割を獲得していく。

No224 **日本の医療現場におけるアート&デザインの現状と課題**

宮坂真紀子 女子美術大学大学院美術研究科 山口(中上)悦子(大阪市立大学大学院医学研究科)・鈴木理恵子(女子美術大学アート・デザイン表現学科)・山野雅之(女子美術大学アート・デザイン表現学科)

昨今、良質な医療を提供するという目的のために患者の心と身体のケアを充実させるという観点から、病院における環境デザインの見直しやワークショップなどのアート活動が積極的に行われている。本研究では、医療現場におけるアート&デザインの現状を把握するべく、このような活動経験をもつ医療スタッフや大学・院内学級の教員に対してインタビュー調査を行った。調査の結果、心身のケアだけでなく、コミュニケーションの促進や小児患者の心の成長、医療スタッフの業務軽減や医療に対する意識変化などの相乗効果をもたらしていることが明らかとなった。一方、予算の獲得や周囲の理解を得ることの難しさも経験しており、アート&デザインに対する関心を高める必要があるという課題も示唆された。今後、これらの経験を活かして発展させるためには関係者が周囲に語り継いでいくことに加えて、関心が高まるよう意識変化をもたらすきっかけづくりも重要と考えられる。

25日(日) 13:30～15:00【ポスター発表 2】

No225 漁協女性部が6次産業化に果たす役割の分析
—大洗漁港の「かあちゃんの店」を事例にして—

杜瑩 茨城大学

1970年代後半以降、衰退傾向にあった日本の漁業は、東日本大震災により、風評被害が生じた。このような状況の中で、漁業の町として発展してきた茨城県大洗町では、漁協女性部が経営している店がある。「漁師料理」を提供し、料理の新鮮さと安さで人気があり、「かあちゃんの店」という。これは6次産業化の成功事例の一つである。当初は売上が不安定な直販グループであったが、現在は年商が1億円を超える地元の人気食堂になった。本研究では、この活動に漁協女性部が果たした役割に着目し、この成功事例の要因を分析・検討する。これまで、漁業の男性世界の中で漁協女性部は、部員の高齢化・減少などの課題を伴いながらも、漁業の陸上作業と家事・育児・介護を両立することができた。その上、女性が中心となって、積極的に多くのイベント活動や6次産業化に取り込み、地域・漁業の振興や魚食の普及の担い手となるという役割を果たしていることが明らかになった。

No226 地域活性化に「よそ者」が果たしうる役割の検討
—茨城町地域おこし協力隊を事例として—

楊飛 茨城大学

日本は、農村の過疎化や人口減少の進行に伴う地域の活力低下、地域コミュニティの衰退といった諸課題に直面している。「よそ者」の立場である地域おこし協力隊(以下「協力隊」)は、「地元の人が気づかないもの」を掘り起こしてくれると期待される。本研究は社会心理学の視点から、「よそ者」の立場は変わらず維持されているのか、「よそ者」性に何か変化があるのかについて検討を行う。ここで「よそ者」性とは、地元住民との関係によって決まる概念として用いる。「よそ者」と地元住民は関係を作る過程にどのような問題と困難さがあるのか、そのことを踏まえ、「よそ者」性の変化と地域の活性化との関連を詳しく分析する。これまで協力隊は、活動の展開スピードが速く、活動範囲も広くなり、連携と協力する人も多くなり、活動の影響力も大きくなった。これは、協力隊の「よそ者」性が変化してきたことを意味する。協力隊は地域活性化に新しい入口を開いて、農業と教育に取り組み、地域を元気にする担い手となるという役割を果たしうるということが明らかになった。

No227 胃切除術を受けた高齢女性透析患者の医師への信頼のプロセス

石井俊行 姫路獨協大学看護学部看護学科

胃切除術を受けた高齢女性透析患者が定期受診している医師への信頼について明らかにすることを目的に、70歳代後半、透析歴10年のC氏女性透析患者にインタビュー調査を行った。インタビュー内容よりトランスクリプトを作成し質的に分析を行った。倫理的配慮:対象女性に個人情報保護について、成果を学会発表する旨の説明を口頭で行い、書名による同意を得た。結果:C氏は、医師が1年間の受診、検査予定の必要性を分かりやすく説明し自宅に持ち帰ることができる医師の工夫に感謝していた。定期受診の際に食事面、困っている点等についても相談して、C氏なりの取り組みにより血糖値も安定している。C氏は、「いろいろ相談できるし安心できるわ」「ずっとこの先生にかかっているからもうなにもかも知ってくれているけん、いいわな、信頼してるわな」と相談ができる医師に対して大きな信頼を寄せていることが語りより明らかとなった。

No228 困難な状況を、ヨガによって乗り越えられたと自覚している人の語りの分析

大西郁子 (株)椎名誠旅する文学館

本研究は、ヨガを実践することで、どのような心理的影響が生じているのかについて考察したものである。困難な状況をヨガによって乗り越えた経験を持つ、調査協力者にライフストーリー・インタビューを行い「繰り返し語られるストーリー」に焦点を当てて、そこに意味づけられた内容を考察した。さらに、ヨガとどのように関わっていたのかについて分析した。その結果、ヨガを実践することで何らかの「快」を得た経験が、ヨガの世界への入り口となり、継続へと繋がること、その際に、指導者の存在が強く影響することが示された。ヨガにはポーズ、呼吸法、哲学など複数の要素があり、これらを包括的に実践するものである。ヨガを継続する過程で、各々がこれらの要素をカスタマイズして固有の方法を実践し、困難な状況に対処していることが見出された。

25日(日) 13:30～15:00【ポスター発表 2】

No229 **利用者の主体性を促進する歩行支援ロボットの参与観察**

河合直樹

京都大学大学院工学研究科

鮫島輝美(京都光華女子大学健康科学部講師)

歩行支援機器を利用する歩行困難者の参与観察をとおして、新奇な生活支援ロボットが社会生活に受け入れられていく物理的・心理的プロセスを明らかにする。対象とするロボットは、2015年7月にRT.ワークス社より発売された「RT.1」である。高齢者の自立歩行用として広く使用されているシルバーカートの形状をベースに、坂道でのスムーズな歩行を支援する制御機能などが付加されており、自分の足で歩くことの喜びを利用者が感受することをめざして開発された。そこで、本機器を積極的に活用している3名のユーザーに対して、利用状況の観察およびインタビューを実施した結果、疾患や家庭環境の違いによらず、利用者の積極的な外出や社会参加を促進していることが明らかとなった。以上を踏まえ、利用者の主体性の発露を自然に促すロボットに求められる条件を検討する。

No230 **共同作業における歌の時間構造**

—野沢温泉道祖神祭りの胴突歌—

細馬宏通

滋賀県立大学人間文化学部

一般に共同行為を達成するには、行為の精密な時間構造と、言語・非言語の密接な関係が重要となる。これらを調整するものとして、行為に伴って歌われる「労働歌」が考えられる。本発表では、長野県野沢温泉村で行われる道祖神祭りにおいて歌われる「胴突歌」(どんつき節)を取り上げ、労働歌と共同行為の時間関係について論じる。

胴突は、高さ18mの御神木を雪中深く埋め込む数十人による共同行為である。メンバーは、御神木の根元近くに取り付けられた井桁を介して木を持ち上げる「井桁係」と御神木の中ほどに取り付けられたロープ(トラ)を介して木を引っ張る「トラ係」の二手に分かれ、井桁係が御神木を持ち上げた直後にトラ係が引っ張ることで、御神木を一瞬空中に浮かせて雪中深く埋め込む。本発表では、胴突歌の微細な時間構造が二種の作業のタイミングを調整し、複雑な共同行為を可能にしていることを示す。

No231 **対人葛藤場面への介入における幼児同士の連携 —幼稚園3年間における形成過程—**

松原未季

奈良女子大学大学院

本発表では、他児の対人葛藤場面への介入において、幼稚園3年間で介入児同士がどのような過程を経て連携するようになるのかということ明らかにすることを目的とする。その手法として、幼稚園3年間同一のコホートの幼児を縦断的に観察し、複数の幼児による介入事例について、カテゴリーのコーディング及び解釈的分析を行った。介入の型としては<分散型>、<同調型>、<協応型>が抽出された。3歳児では、幼児同士の介入が並行したり、他児の介入を模倣するに留まり、意見が交わされず、介入は連携されにくかった。4歳児では、他児と異なる意見を出したり、多数で同じ意見を主張したり、葛藤状況の情報を伝達し合い、分担して介入し、介入の連携が萌芽した。5歳児では、複雑な葛藤場面でも、情報を伝達し合って、各々の意見を交わしたり、他児の介入に従うだけでなく、自分の判断も付与して介入し、公平な終結が目指されて、介入の連携が形成された。

No232 **「Days-Before」の視座による津波被災想定地域の語りの研究**

高知県幡多郡黒潮町を例に

杉山高志

京都大学

矢守克也(京都大学)

本研究は、2012年3月に発表された中央防災会議の想定が出される前の日常、すなわち「Days-Before」の視座から、南海トラフ巨大地震によって津波被災が想定される地域の住民の語りを聞き取り分析した研究である。本研究では、高知県幡多郡黒潮町の住民を対象に調査した。黒潮町は中央防災会議によって34メートル以上の日本一の津波高が想定された地域であり、全町的に津波防災に取り組んでいる。一方で、巨大想定によって住民の間では自然災害に対する諦めの声も生まれており、黒潮町は想定によって「擬似被災」をした地域ともいえる。本研究の特徴は、巨大想定が発表される前の日常生活に焦点を当てて住民の経験談を聞き取る点である。本研究では、想定が発表される前の経験談を「Days-Before」の語りとして名付けている。本研究の結果、太平洋の荒波や不測の海難事故に屈すること無く漁師として生活してきたことが明らかになり、津波災害に対する諦めを克服する糸口を得た。

25日(日) 13:30～15:00【ポスター発表 2】

No233 **友人関係に関する高校生へのグループ・インタビューにみる性差についてのナラティブ・アイデンティティ分析**

保坂裕子 兵庫県立大学環境人間学部

高校生の時期の友人関係は、それまでの同質・同調に基づく関係から、互いの価値観や理想、将来の生き方などを語り合うなかで、次第に互いの違いを尊重しあう関係へと変化するとされている(たとえば、榎本, 2003)。一方で、友人関係についての意識については、性差が認められており、発達に伴い性差が大きくなり、高校生においてその差がピークとなるとされている(佐藤, 2007)。そこで本研究においては、高校生の男女それぞれの友人グループを対象としたインタビュー調査を行い、そこで得られた語り(ナラティブ)を分析することで、高校生の時期にみられる友人関係の性差について検討する。男女それぞれに、友人関係の在り方の差異については認識しており、その差異に対するポジショニングがそれぞれのアイデンティティ・クレイムとなっていた。

No234 **慢性期脳卒中片麻痺者におけるボツリヌス治療を選択する過程 – TEM で示された分岐点を GTA で詳しくみる –**

荒井佐和子 川崎医療福祉大学臨床心理学科 深瀬裕子(北里大学医療衛生学部)・
沖井明(医療法人和会沖井クリニック)・
鈴嶋よしみ(東北大学大学院医学系研究科)・
菅俊光(関西医科大学総合医療センター)

患者が新しい治療を選択する過程では葛藤が繰り返され、家族の影響もあることが報告されている(大木, 2005)。慢性期脳卒中後遺症の痙縮へのボツリヌス治療(BT)は日本では比較的新しい治療であり、患者がどのような葛藤や影響を経験しているかは明らかではない。本研究では深瀬ら(2015)がTEMで示したBT治療選択過程の分岐点「BTを知る」における患者の葛藤をGTAにて詳細に検討した。

BT施注を提案された患者2名を調査対象者として半構造化面接を行った。得られた語りのうち、治療選択に関係する語りを抜きだし、GTAにより分析した。

その結果、調査対象者は治療への期待と不安からなる「治療への思い」を形成しており、それは「後遺症による身体・生活の困りごと」「受け入れられている身体の不自由さ」「家族から得られる支援」に規定されていた。発表ではTEMとGTAを統合した分析法についても議論したい。

No235 **創作過程における児童の相互作用の事例研究 – 図画工作科「造形遊び」と「協同」に着目して –**

小柳沙織 神奈川県海老名市立小学校 河野麻沙美(上越教育大学)

1. 問題と目的 協同による学習の目的の一つは、「理解を深め、自ら学ぶ」ことである。図画工作科においては、子ども同士が意見交換や鑑賞等をし合うなど、相互作用を通して理解を深めることを目的としている。しかし、図画工作科の授業における協同の実践や先行研究は数少なく、また、現小学校教師も、図画工作科における協同の実践について、課題意識が低いこと明らかになった。このように、「協同」の重要性は指摘されてはいるが、実践上の課題は山積している。そこで、本研究は、造形活動と協同の双方を取り入れた授業事例における、児童の学習過程の記述から、他者との相互作用が造形活動に与える影響を検討することを目的とする。2. 研究方法 本研究では、小学二年生の協同を取り入れ「造形遊び」を事例に検討を行う。3つに分けた授業場面を更に内容からエピソードに分割し、詳細に検討することを通して、造形活動のプロセスを検討した。

No236 **児童養護施設における長期継続職員の実践継続プロセスに関する研究 – 子育て規範から生じるジレンマ構造と実践の正当化方略の検討 –**

引谷幹彦 青山学院大学大学院社会情報学研究所

本研究は、児童養護施設で長期的に支援実践に携わってきた職員がどのように自身の経験を理解しているのかを把握する目的で、施設職員10名に対し半構造化インタビューを実施した。

> その結果、施設職員は「子どもは家族によって養育されるべき」という考えを持ちながら自身が親とは別の存在であることを認識し他の家族の子どもに対して養育支援を続けている現実との間で、本来であれば「自分自身では受け入れることのできない実践をしている」というジレンマ状態に陥っていることが明らかになった。

> さらに、こうしたジレンマ状態のなかで職員はどのような方略を用いて自身の支援実践の正当化を行っているのかを分析した結果、施設職員は「私は」や「個人的には」というような「個人性の強調」を通じて、自身の支援実践の正当化を行っていることが明らかになった。このような個人性の強調には、子育て規範や児童養護施設への否定的な言説といった職員を取り巻く複雑な文脈を扱うための対処方略になっていることが示唆された。

25日(日) 13:30～15:00【ポスター発表 2】

No237 **日米国際結婚夫婦における宗教的文化実践をめぐる夫婦間葛藤と夫婦関係の変容**

矢吹理恵 東京都市大学メディア情報学部

家庭内における宗教的文化実践には主に次の機能があると考えられる。①夫婦が構築する家庭文化のフレームワークを構成する。②宗派の一致に関わらず信仰により夫婦間で宗教的世界観・人生観の一致が見られた場合は、夫婦の絆を強め、結婚を継続させる要因となる(矢吹 2011)。③しつけ方略や学校選択など子育てに関わる文化実践のあり方を方向付ける。④その宗教コミュニティが社会的コミュニティとなり夫婦にソーシャルサポートを提供する。

>国際結婚夫婦の場合、特に④は異文化出身の配偶者の地域社会への溶け込みに大きな役割を果たすと考えられる。

>それでは、家庭文化の枠組みをつくる宗教的文化実践が国際結婚夫婦の夫婦間葛藤課題となるのはどのような場合か。それにより夫婦関係はどのように変容し、夫婦はそれにどのように対処するのか。本研究ではその過程を、在アメリカ日米国際結婚夫婦の事例を用いて日本人妻の視点から質的に分析する。

No238 **せっかちで得をしているのは誰？**

磯貝愛菜 淑徳大学大学院総合福祉研究科心理学専攻

タイプA特性は“せっかち”を連想させる下位概念をいくつか有しているが、自分が「せっかちかどうか」で有している下位概念の内容は異なると考えられる。本研究ではせっかちな人とおっとりな人が、せっかちについてそれぞれどのように捉えているのかを明らかにする。

>方法として、自称せっかち群とおっとり群それぞれ3名ずつのフォーカスグループを設定し、インタビューガイドを基にしたグループディスカッションを行い、グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析し、モデル図を作成した。

>モデル図からせっかちの下位概念について、せっかち群は「せっかちであることを損」と捉えており、これを軸に「せわしない」「心配りができない」などイメージを多く持っていた。一方おっとり群は「せっかちといると物事が進む」と捉えており、これを軸に「行動が早い」「仕事ができる」「リーダーに向いている」などの+イメージを多く有していた。

No239 **『ダンスとダンスカンパニーについてのインタビューエスノグラフィーダンスカンパニー〈プロジェクト大山〉を事例にー』**

三輪亜希子 尚美学園大学 田代順 (山梨英和大学)

この調査は、ダンスが生成する瞬間を内部観察と当事者へのインタビューを通して、観察する質的研究である。ダンスカンパニーの活動を通して築かれる人間模様と組織の裏の機能を含めて〈プロジェクト大山〉本体をフィールドワークする。表の機能とは、公演活動や作品創作、出演依頼を受けること、ダンサーとして作品を踊ることといった活動の実践的な部分を指す。プロジェクト大山とは、2016年に結成10年目を迎える女性のみダンスカンパニーで、近年は、出産・育児というライフイベントを経験するメンバーもいながら、同じメンバー構成で長期に渡り活動を続けている。こうした特徴を持つダンスカンパニーの活動について、メンバーへのインタビュー調査を基に振り返ることがどういった回顧的見解を生むのか。人格形成や芸術的価値に対する考え方の変化に対して、カンパニーの活動が与えた影響とは何か。〈プロジェクト大山〉の生成の独自性をみていく。

No240 **交換留学生と日本人学生による対話的教室活動におけるルーブリック作成についてーインタビューによる学習者の振り返りを中心にー**

福岡寿美子 流通科学大学商学部

交換留学生と日本人学生による異文化交流や異文化理解を目的とした日本の文化や社会について学ぶ「日本事情」の授業において、対話的教室活動(Peer Response)を行った。2016年6～7月に、イギリスおよび韓国からの交換留学生と日本人学生が、「現代日本の若者文化」について学んだ後、各自若者言葉やファッション等に関する作文を書き、グループに分かれて、対話的教室活動を行った。その際、各自ルーブリックを作成し、その後、各学習者の振り返りについて、一人ずつインタビューを行った(ICレコーダーで録音)。そのインタビューを分析することによって、ルーブリック作成における日本人学生による振り返りとイギリスからの交換留学生および韓国からの交換留学生における各学習者の振り返りがそれぞれ異なり、お互いに気づきと学びがあったことが明らかになった。

25日(日) 13:30～15:00【ポスター発表 2】

No241 **食行動における選択や拒否についての研究 –ベジタリアンを対象として–**

三村千春 淑徳大学大学院

特定の食べ物に対して強い拒否を示すものとして、ベジタリアンが挙げられる。三村(2015)は、ベジタリアンになったきっかけに焦点を当て、現在の食生活を送るようになったプロセスについて、検討した。ベジタリアンがどのように食意識を確立していくのか、食行動の選択や拒否に焦点を当て、その過程をより詳しく検討することが、今後の課題として挙げられた。そこで本研究では、食行動における選択や拒否に焦点を当て、ベジタリアンの食意識について検討することを目的とした。研究対象者は、ベジタリアンとしての食生活を送っている方1名であり、インタビューガイドを用いて約1時間の半構造化面接を行い、GTAを用いて分析を行った。結果、ベジタリアンの食行動の選択と拒否に関するプロセスモデルが作成された。モデル図から、ベジタリアンが動物虐待の現状と向き合ったことをきっかけとして、食行動の拒否と選択を徐々に行っていたことが明らかとなった。

No242 **ひきこもり当事者のきょうだいの内的変容過程**

和田美香 東京都立学校

ひきこもりを抱える家族において、当事者(以下、同胞)がひきこもることに伴うその兄弟姉妹(以下、きょうだい)の体験は、家族やそれを取り巻く環境で保持されている価値観といった社会文化的な影響を受けつつ、家族との相互作用を通して変容していくと考えられる。本研究では、思春期・青年期に同胞のひきこもりを体験した協力者Aさんの語りデータを基に、個人の変容を記述し理解する発生の三層モデル(TLMG)を用いて、きょうだいの内面で生じている変容のメカニズムを捉えることを目的とした。家族状況から受け取る情報を介して、行動の選択が自己の認識との関連において変容していく過程について考察する。

No243 **中年男性の中年期における心理的危機についての検討**

田汲由佳 淑徳大学大学院総合福祉研究科心
理学専攻臨床心理学領域

現代の中年男性が抱える心理的問題の背景には、中年期の危機の存在が考えられる。全ての人に経験される訳ではないが同時に誰もが経験しうるこの危機は、適応的にも不適応的にも働く可能性があり、中年期の危機を探索的に検討することで、中年男性の適応的な生活に寄与できると考えられる。そこで本研究では、中年男性の心理的危機についての心的プロセスを明らかにすることを目的とする。研究方法は対象者1名に約1時間の半構造化面接を行い、得られたデータをグラウンデッドセオリー・アプローチにて分析した。その結果、両親の将来や自己の身体的衰え、仕事に関する一時的な後悔などが語られた。しかし、それらを起こるべきことと受け止め、前向きかつ具体的に対応していくといった未来志向の考え方や、子どもの成長など環境のポジティブな変化が影響することで、本研究の定義における中年期の危機は経験されていなかったことが、モデル図によって示された。

No244 **教師は自校の「文化」をどう捉えているか –教師が語る学校文化–**

別所崇 滋賀県立大学大学院 松嶋秀明(滋賀県立大学)

従来から、教育社会学、教育心理学、学校臨床心理学の立場から、学校にある特質を理解するための研究が行われてきた。その特質の1つとしての学校文化というものについては、その構造化や他の文化、例えばカウンセラー文化との比較によって捉えようとする試みが中心であった。また、こうした文化は、学校の構成員の主要メンバーである教師にとっても、日常の場であるゆえに、普段は意識されにくいものであろう。本研究では、実際の学校現場で生活している教師を対象に半構造化インタビューを行い、教師自身の捉えた感覚としての学校文化を明らかにすることを目的とする。本報告で取り上げる学校は、2つの小学校が統合して新たに生まれた学校である。教師も長年の学校での日常生活の中で、当たり前としていたものが、統合という契機によってその日常が失われる経験をする。その状況の中で語られた内容を提示したい。

25日(日) 13:30～15:00【ポスター発表 2】

No245 **どのように意味づけて服を選ぶのか：Thinking aloud 法による分析**

荒川歩

武蔵野美術大学

木戸彩恵(関西大学)

被服は、防寒や被覆といった機能だけではなく、個人の思考やアイデンティティ、社会との関係に影響する重要な装置である。そのため、たとえ、服にこだわりがないと思っている人でも、その多くが服の取捨選択を行う。しかし、どのような観点で人が服を取捨選択しているのかは明らかではない。そこで、本研究では、女子大学生5組10名に服を選びながらそのときに考えていたことをThinking aloud法で話してもらう実験を実施し、その音声を録音した。この録音された音声をもとに文字に起こし、そこで、買わない、買う理由として挙げられた言葉をまとめて、そこから概念をつくって検討をおこなった。

No246 **喪失の悲哀から回復過程～死産体験の語りから～**

水尾智佐子

帝京大学福岡医療技術学部

周産期に子どもを亡くすという事は、深い悲しみをもたらし、周囲の無理解は、悲嘆を長引かせ複雑な反応を引き起す。悲嘆は悲哀と同義語のように使われ、英語では、griefとMourningである。日本の精神科医の小此木らの定義では、「人が愛する対象を失った後にみられる混乱から適応に至るプロセスが「悲哀」であり、このプロセスによっておいて生じる感情を「悲嘆」という。」(小此木, 1997) 一体、死産経験者の悲嘆を抱いた悲哀からの回復の過程とはどのようなプロセスがあるのだろうか。

本研究では、死産を経験した女性が喪失体験からどのように生成継承サイクルを構築していくのかを明らかにする。個人の経験の語りをもとに、その経験をその人がどのように意味づけし理解しているのか、当事者の主観的な視点から悲嘆感情を含む悲哀の経験のプロセスを明らかにし、どのように個人的生成継承につながっているのかを分析し考察した。

No247 **ビジュアル・リサーチ・メソッドを用いた女子大学生のハイヒール靴着用の考察**

木戸彩恵

関西大学

荒川歩(武蔵野美術大学)

従来の被服心理学では、着用する単一のアイテムあるいは全体性としてのよそおいのジャンルが主な研究対象となってきた。一方で、アイテム同士を組み合わせるコーディネート視点の視点が欠けている。本研究では被服と靴の選択に着目し、特に、女性らしさを装う記号としてのハイヒール靴着用について考察する。調査は、女子大学生9名(平均年齢20.3歳)に協力を依頼し、2週間分の被服と靴の装着写真を手掛かりに個別インタビュー形式を実施した。インタビューでは、写真を用いてお気に入りのアイテム及びコーディネートのエピソード、ハイヒール靴装着の開始に至るまでの経緯、コーディネートの選択理由について尋ねた。装着に至るまでの経緯は複線径路・等至性アプローチで分析し、コーディネートの選択理由はKJ法で分析した。結果をもとに、コーディネートの自由度と選好、被服心理学にビジュアル・リサーチ・メソッドを用いる意義について考察を行った。

新時代の保育双書
子どもの理解と保育・教育相談
 小田豊・秋田喜代美 編
 B5判 188頁 2,000円(税別)

新時代の保育双書
今に生きる保育者論 [第3版]
 秋田喜代美・西山薫・菱田隆昭 編
 B5判 200頁 2,000円(税別)

新時代の保育双書
実践・発達心理学
 青木紀久代 編
 B5判 208頁 2,000円(税別)

新時代の保育双書
保育に生かす教育心理学
 伊藤健次 編
 B5判 184頁 2,000円(税別)

新時代の保育双書
新・乳幼児発達心理学
 後藤宗理 編
 A5判 168頁 2,000円(税別) 在庫僅少



新刊
はじめて学ぶ発達心理学
 吉田直子 著
 A5判 104頁 1,500円(税別)

保育・教育実践のための心理学
 浅野敬子・丸山真名美 編
 A5判 240頁 2,000円(税別)

子ども臨床とカウンセリング
 伊藤健次 編
 A5判 248頁 2,000円(税別)

**子どもとかかわる力を培う
 実践・発達心理学ワークブック**
 青木紀久代・矢野由佳子 編
 B5判 120頁 1,800円(税別)

**幼児期の道徳性を培う
 コミュニケーション環境の構築**
 三宅茂夫 著
 A5判 456頁 2,800円(税別) 在庫僅少



株式会社 **みらい**

<http://www.mirai-inc.jp/>

〒500-8137 岐阜市東興町40番地 第5澤田ビル
 TEL: 058-247-1227 FAX: 058-247-1218



2016年夏・発行, 電子書籍・新刊

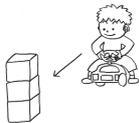
子どもとむかいあう

教育実践の記述, 省察, 対話 (仮題)

川島大輔・勝浦真仁 編著

「質的研究」の方法論を携えて教育の「現場」へ。
 子どもの微細な発達を読みとり、応答しようとする試み。
 「記述」と「対話」にもとづく「省察的实践」のために。

- ◆販売価格：未定 (各種クレジットカード利用可)
- ◆ファイル形式：EPUB, PDF (印刷・製本サービスのオプションあり)



序章 往復書簡

「教育実践と質的研究の方法論をめぐって」

川島大輔・竹本克己・東海林秀樹

〈第I部 子どもとむかいあう〉

第1章 聾学校において聴覚障害を抱えた子どもとむかいあう 三浦麻依子

第2章 小学校において発達障害を抱えた子どもとむかいあう 東海林秀樹

第3章 中学校において実習生として生徒とむかいあう 前川 洸

第4章 発達支援センターにおいて保育者／幼児とむかいあう 熊田広樹

コラム 私が出会ってきた子どもたちの「こえ」 竹本克己

〈第II部 子どもとむかいあうことにむかいあう〉

第5章 教職を目指す学生とむかいあう 勝浦真仁

第6章 エピソード記述・検討会で保育者とむかいあう 大倉得史

第7章 「子ども理解のカンファレンス」を通じ同僚とともに

生徒とむかいあう 福井雅英

終章 往復書簡

「子どもとむかいあうための教育実践と質的研究」

川島大輔・竹本克己

関連 既刊書籍 (お求めはratikのwebサイトで!)



ビジュアル・ナラティブとしてのマンガ

マンガ/小説/映画の中の視点から
 家島明彦 編著
 菅谷充 (すがやみつる)・やまだようこ・齊藤こずゑ 著
 販売価格: 800円(消費税込)



震災被災地で心理援助職に何ができるのか?

国重浩一 編著
 持留健吾・西嶋雅樹・星美保 著
 販売価格: 3,000円(消費税込)



「裁判員」の形成、その心理学的解明

荒川 歩 著
 販売価格: 2,500円(消費税込)



体験を問いつづける哲学

第1巻 初期ジェンドリン 哲学と体験過程理論
 三村 尚彦 著
 販売価格: 2,500円(消費税込)

ratik (らていっく) は、NPO (Non-Profit Organization) の出版組織です。学術専門書・新刊の電子出版のほか、論文校閲、電子ジャーナルの編集事務局、シンポジウム等ウェブ起こしからの書籍化など、学術コミュニケーションに取り組んでいます。ぜひ、お気軽にお声かけください!

特定非営利活動法人ratik
 学術図書出版
 電子書籍等の企画・編集・制作・販売
<http://ratik.org>
 E-mail: info@ratik.org

ライフストーリー分析指標の開発

山本佳世乃著 9500円
「語り」に着目し、患者・家族が経験している多面的な問題状況を把握しうる研究法を開発。医療現場において、語り手の視座に立った包括的な支援の提供を目指した。

保育所2歳児クラスにおける集団での対話のあり方の変化

淀川 裕美著 6500円
集団保育の場における対話に焦点をあて、保育者が対話を主導していない2~3歳児同士の対話のあり方の変化を明らかにし、集団保育での育ちについて丹念に描出する。

大島青松園で生きたハンセン病回復者の人生の語り

近藤真紀子監修 大島青松園編 2800円
病いに苦しむ人々を社会全体がどのようにケアすべきか。17名のハンセン病回復者の人生の語りを聴き、過酷な人生を通して得た「英知」と「負の歴史」を学ぶ教訓の書。

教員の異文化体験 —異文化適応・人間の成長・教員としての成長—

鈴木 京子著 9000円
日本からの教員海外派遣プログラムで海外に滞在した経験を持つ教員を対象に質的調査を実施。異文化接触による人間の成長と教員としての成長について明らかにした。

現代日本の母親規範と自己アイデンティティ

井上 清美著 7000円
子どもをケアする女性たちが直面する葛藤とアイデンティティの危機を、豊富な語りと詳細な事例分析から描き出す。ファミリー・サポート事業の数少ない実証的研究書。

トラウマケアとPTSD予防のためのグループ表現セラピーと語りのちから

井上孝代 いたうたけひこ 福本敬子 エイタン・オン編著 予価2500円
東日本大震災における被災者のトラウマケア/PTSD予防のための心理社会的支援を行ってきたIsraAID及びJISPの活動を通して、グループ表現セラピーと語りのちからの有効性を解明。

算数授業における協同的な学習過程の検討

河野麻沙美著 8000円
授業で『算数がわかる』とは何か。心理学、教育方法学、教科教育の知見を統合。教室談話の比較研究と質的研究から、知識基盤社会に応答する協同的な学習過程モデルを示す。

授業における児童の聴くという行為に関する研究

一柳 智紀著 6500円
小学校でのフィールドワークに基づき、話し合いを中心とした授業において児童が何をどのように聴いているのか、またそれを教師はいかに支援しているのかを検討。

語りによる保育者の省察論 —保育との関連をふまえて—

守随 香著 6000円
保育者の経験という視点を保育研究に投げ、語りによる省察の成り立ちと意味を解明。参与観察による質的分析から、〈保育〉の循環過程の内実を迫る。

慢性腎疾患の子どもとその関係発達

渡部千世子著 7500円
筆者自身の事例をもとに「慢性疾患をもつ子どもはいかにしてその病気を自らの人生に引き受けていくのか」について、家族との関係発達に注目して考察した当事者研究。

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-34
TEL 03-3291-5729 FAX 03-3291-5757

風間書房

(URL) <http://www.kazamashobo.co.jp>
メールアドレス pub@kazamashobo.co.jp

北大路書房

〒603-8303
京都市北区紫野十二坊町12-8
☎ 075-431-0361 FAX 075-431-9393
<http://www.kitaohji.com>
振替 01050-4-2083

ふだん使いのナラティブ・セラピー

—人生のストーリーを語り直し、希望を呼び戻す—
D. デンボロウ著 小森康永・奥野 光訳 四六・344頁・本体3200円+税
トラウマ、虐待、個人的な失敗、悲嘆、老いなどの困難に対峙するためのユニークな質問や道具、アイデアを提供。「問題の外在化」や「リ・メンバリング」など、人生のストーリーを書き換える方法を実践的に解説する。

ナラティブ・セラピストになる

—人生の物語を語る権利をもつのは誰か?— S. マディガン著 児島達美・国重浩一・バーナード 紫・坂本真佐哉監訳 A5・232頁・本体2600円+税
日常的な治療の実践例を紹介しながら、基礎となるポスト構造主義の重要概念を紐解く。創始者M・ホワイト、D・エプストンの熟き交流を経た原著者が、セラピーの核心を問いかける。

名前のない母子をみつめて

—日本のこうのとりのゆりかご ドイツの赤ちゃんポスト— 蓮田太二・柏木恭典著 四六・206頁・本体1800円+税
日本初となる赤ちゃんポスト「こうのとりのゆりかご」を設置した病院理事長自身の回想から、その誕生の背景に迫る。先行するドイツでの実態レポート、匿名・内密出産について議論し、日本での母子支援のあり方を問う。緊急下の女性と子どもをめぐる著作の第2弾。

精神病と統合失調症の新しい理解

—地域ケアとリカバリーを支える心理学— 英国心理学会・臨床心理学部門監修 A. クック編 国重浩一・バーナード紫訳 A5・224頁・本体3200円+税
最新の研究や当事者の体験談を豊富に引用し、精神疾患の心理的・社会的側面に光を当て、生活上の影響を踏まえた支援のあり方を探り、多元的・複眼的視点からメンタルヘルスの制度改革を説く。

心理学マニュアル 観察法

中澤 潤・大野木裕明・南 博文編著 本体1300円+税

体験と経験のフィールドワーク

宮内 洋著 本体2200円+税

アジア映画をアジアの人々と楽しむ

山本登志哉・伊藤哲司編著 本体1600円+税

心理学マニュアル 面接法

保坂 亨・中澤 潤・大野木裕明編著 本体1500円+税

質的研究法による授業研究

平山満義編著 本体3200円+税

心理学者、裁判と出会う

大橋靖史・森 直久・他著 本体2500円+税

心理学におけるフィールド研究の現場

尾見康博・伊藤哲司編著 本体2800円+税

新保育ライブラリ 保育実践のフィールド心理学

無藤 隆・倉持清美編著 本体1700円+税

狭山事件 虚偽自白【新版】

浜田寿美男著 本体2400円+税

心理学理論百科事典 (全2巻)

The SAGE Encyclopedia of Theory in Psychology

Two-Volume Set

Edited by Harold L. Miller, Jr.
- Brigham Young University



May-2016 · 1,176 pages ISBN: 9781452256719

List Price: £235.00 本体概価: 41,521円

心理学の主要な理論および理論家について、その長所と短所を理解するのに必要なコンテキストとともに解説する百科事典です。

専門研究者によって執筆された約335項目には、項目ごとの相互参照機能や、文献案内が付属しています。また、認知、進化、ジェンダー、学習、神経科学といったテーマごとに関連項目をまとめるReader's Guideも収録されており、テーマやカテゴリごとの学習にも適しています。巻末には、心理学理論の年表や、参考文献・資料案内が収録されています。心理学理論の決定版レファレンスとしておすすめいたします。

Key Themes:

Cognition / Consciousness / Culture / Development / Emotion / Evolution / Gender / Health / Intelligence / Language / Learning / Motivation / Neuroscience / Organizations / Perception / Personality / Psychopathology / Research Methods / Sensation / Sociality / Therapy

心理学における定性調査法 (全5巻)

Qualitative Research in Psychology

Five-Volume Set

Edited by Brendan Gough - Leeds Metropolitan University

Nov-2014 · 1,784 pages ISBN: 9781446282335

List Price: £875.00 本体概価: 143,642円



本書は、質的心理学の重要研究文献を収めた論文集成です。主要な理論、方向性や特質について論じる古典的な文献から、近年の研究潮流やイノベーション、議論について検討する最新の研究成果までを収録しています。

研究の発展や傾向を理解しやすいよう、各巻は時系列に構成されています。また、著者による書き下ろしのイントロダクションでは、本書の全体像とともに研究状況の概観が示されています。

質的心理学に関心をもつ研究者・関連研究機関にとって、必備のレファレンスとしておすすめいたします。

Vol.1: Foundations / Vol.2: Qualitative data collection / Vol.3: Methodologies 1: From experiential to constructionist approaches / Vol.4: Methodologies 2: Discursive and critical approaches / Vol.5: Contemporary issues and innovations

Quantitative Psychology, 5 vols. とのセットコレクションもございます。

心理学調査法: コレクション (全10巻)

Research in Psychology: Collection, Ten-Volume Set

Edited by Brendan Gough, Jeremy Miles, Brian Stucky

Dec-2014 · 3,696 pages ISBN: 9781473912038 List Price: £1,485.00



※ご注文は各洋書取扱い書店までお願いいたします。
※商品の価格は改定・変更する可能性があります。

内容のお問い合わせ: セイジ・パブリケーションズ日本支社
Email: sagejapan@sagepub.co.uk Website: www.sagepub.co.uk

ナカニシヤ出版

TEL 075-723-0111 〒606-8161 京都市左京区一乗寺木ノ本町15
FAX 075-723-0095 http://www.nakanishiya.co.jp/ [表示は税抜価格]

実践的な心理学の学びかた

大橋靖史 神 信人 編
◎学びを通して成長する心理学の基礎・実習・研究・キャリアすべてを網羅したテキスト。2500円

あなたへの社会構成主義

ケネス・J・ガーゲン 著 / 東村知子 訳
社会構成主義の重鎮ガーゲンによる、平易で格好の入門書。3500円

概念分析の社会学2

酒井泰斗・浦野茂・前田泰樹 他編
◎実践の社会的論理
社会生活における、多種多様な実践を編みあげる方法。3200円

コミュニケーション研究のデータ解析

田崎勝也 編著
統計理論と実際のデータ解析をバランスよく解説。3200円

最強の社会調査入門

前田拓也・秋谷直矩・朴沙羅 木下衆 編
◎これから質的調査をはじめようの人のために
社会調査の極意を、気鋭の社会学者たちが伝授。2600円

文系のためのSPSSデータ解析

山際勇一郎・服部 環 著
人文系領域で必要となるデータ解析法を基本から学ぶ。2700円

これから心理学を学ぶ人のための研究法と統計法

西村純一 井上俊哉 著
心理学の両輪を徹底的にわかりやすく解説した方法論概論書。2800円

ラディカル質的心理学

イアン・パーカー 著 / ハツ塚一郎 訳
◎アクションリサーチ入門
基本原則から論文作成まで、質的研究の理論と方法を詳説。2800円

グラウンデッド・セオリーの構築

キャシー・シャーマズ 著 / 抱井・末田 監訳
◎社会構成主義からの挑戦
社会構成主義版グラウンデッド・セオリーを生き生きと解説。2900円

子ども理解のメンドロー

中坪史典 編 ◎実践者のための「質的実践研究」アイデアブック
エピソード記述やKJ法など、子ども観察の手法を事例で紹介。2000円

社会調査のための計量テキスト分析

樋口耕一 著
◎内容分析の継承と発展を目指して
データ分析フリーソフトKHCoderの開発者による解説と事例。2800円

Rによる心理データ解析

山田剛史・村井潤一郎・杉澤武俊 著
Rを使ったレポートや卒論・修論を書くために、データ解析を行う手順を具体的に紹介。3400円

東洋羽毛 睡眠セミナー無料サービスのご案内

睡眠に関するお悩みはありませんか？

睡眠セミナーを無料で開催しています

東洋羽毛では「睡眠健康指導士」の資格を有した講師による充実したセミナーをご用意しています。

- 睡眠の科学的メカニズム
- 社会学的な睡眠の重要性
- よりよく眠る方法
- よりよく眠るための心得
- 交代制勤務の負担を軽減する眠りのヒント など



* 研修内容及び研修時間はご相談に応じます。

* 研修会は複数回ご受講いただけます。

◆ 東洋羽毛では、研修会や勉強会、学会でのコーヒーサービスもご提供しています。

 **TUK 東洋羽毛東海販売株式会社**

〒465-0091 愛知県名古屋市名東区よもぎ台3-203-1 ☎ 0120-365039

福島哲夫 編

臨床現場で役立つ質的研究法

臨床心理学の卒論・修論から投稿論文まで

日頃の臨床実践を、質的研究法を用いてどうやって論文化するのか。その論文をどのように実践に役立てることができるのか。KJ法をはじめ、その具体的手順やアイデアを、実際の研究例を交えてわかりやすく解説。

A5判並製192頁／2200円＋税

戈木クレイグヒル滋子 著

ワドマップ・グラウンデッド・セオリー・アプローチ改訂版

理論を生みだすまで

初心者がまず読むべき教科書として版を重ねてきた初版から十年。その後の経験をもとに大幅に改稿し、旧版同様、懇切に勘所を説明するだけでなく、より使い勝手をよくなる新たな工夫を随所に加えた決定版！

四六判並製192頁／1800円＋税

ダレン・ラングドリック 著／田中彰吾・渡辺恒夫・植田嘉好子 訳

現象学的心理学への招待

理論から具体的技法まで

フッサールに基づくジオルジの現象学的アプローチ、スミスの解釈学的現象学的分析、リクールに基づく批判的ナラティブ分析という3つの現象学的心理学を体系的に紹介した、はじめての現象学的心理学入門。

A5判上製280頁／3100円＋税

中田基昭 編著／大岩みちの・横井絢子 著
遊びのリアリティー
事例から読み解く子どもの豊かさと奥深さ
四六判並製260頁／2400円＋税

矢守克也・宮本 匠 編
現場でつくる減災学
共同実践の五つのフロンティア
四六判並製214頁／1800円＋税

岡本依子 著
妊娠期から乳幼児期における親への移行
親子のやりとりを通して発達する親
A5判上製248頁／3400円＋税

山本登志哉 著
文化とは何か、どこにあるのか
対立と共生をめぐる心理学
四六判上製216頁／2400円＋税

小林隆児・西 研 編著／竹田青嗣・山竹伸二・鯨岡峻 著
人間科学におけるエヴィデンスとは何か
現象学と実践をつなぐ
四六判上製300頁／3400円＋税

日本質的心理学会 編
質的心理学研究 第15号
特集 子どもをめぐる質的研究
B5判並製252頁／3000円＋税

ウヴェ・フリック 監修／A5判並製
「SAGE質的研究キット」
新曜社とSAGE社の提携企画「SAGE質的研究キット 全8巻」邦訳刊行開始！
【以下続刊】

ウヴェ・フリック 著／鈴木聡志 訳
1 質的研究のデザイン
質の高い質的研究をデザインするための勘所を、実例を用いて丁寧に解説した質的研究入門必携。 196頁／2100円＋税

スタイナー・クヴァール 著／能智正博・徳田治子 訳
2 質的研究のための「インター・ビュー」
初心者にとって必読書であるだけでなく、経験者にも、研究を振り返り発展させる契機となる一冊。272頁／2700円＋税

マイケル・アングロシーノ 著／柴山真琴 訳
3 質的研究のためのエスノグラフィと観察
フィールドサイトの選定からさまざまな観察技法、報告書の作成まで、鍵となる事項を一冊に凝縮！ 168頁／1800円＋税



キヤサリン・モンゴメリー 著／斎藤清一・岸本寛史 監訳

ドクターズ・ストーリーーズ

医学の知の物語的構造

医学とは、主観的な知識に基盤を置く物語的活動である。現場での広範なフィールドワークに基づき、医学の思考は物語的作業であるという新しい視点を提供し、医学理解を根底から変えた書、待望の完訳！

四六判上製384頁／4200円＋税

西村ユミ 著

看護実践の語り

言葉にならない営みを言葉にする

患者を援助するなかで、看護師自身はどのように感じ、考え、実践しているのだろうか。「じこり」「引っかけり」となって今も生き続ける経験を率直に語りあう共同作業から紡ぎ出される、看護実践の言葉。

四六判上製244頁／2600円＋税

ロブマン&ルンドクワイスト 著／ジャパン・オールスターズ 訳

インプロをすべての教室へ

学びを革新する即興ゲーム・ガイド

創造的な協同の学びを生みだす即興パフォーマンス、インプロ。その基本から具体的進め方、配慮点までを周到に解説した、教師必携のゲーム集。幼稚園から小・中学校以上まで、すぐに使えるインプロゲームを100以上収録！

A5判並製232頁／2100円＋税

株式会社
新曜社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-9 第一丸三ビル

TEL : 03-3264-4973 (代) FAX : 03-3239-2958

E-mail info@shin-yo-sha.co.jp URL http://www.shin-yo-sha.co.jp

(表示価格は本体価格)